

序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であります。昭和55年3月の県教育委員会文化課調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は4,719ヶ所の多きとなっております。この数は今後分布調査の範囲の拡張によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であります。

近年岩手県においても東北縦貫自動車道建設をはじめ、御所ダム建設等大型公共事業が実施され、その対象地内に多くの埋蔵文化財包蔵地が包括されております。これら対象地内の包蔵地について、事業実施以前に事業者と県文化課の間でその取り扱い方を協議し、その保護につとめています。しかし事業とのかかわりにおいて発掘調査を行ない記録保存をする所までで参ります。

当センターにおいては、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参りました。発掘調査によってこれまでの数々の貴重な資料を得ております。例えば、集落址としては、郡南村湯沢遺跡、松尾村長者屋敷遺跡、盛岡市つなぎ田遺跡、水沢市膳性遺跡等、遺構、遺物としては盛岡市荷内遺跡の駄、足跡、弓、大型土偶など数多くございます。又これらの資料の整理、報告書の公刊についても職員一同一丸となって鋭意努力しておる所でございます。

今般センター一丸の努力によって、ここに本報告書を刊行いたすことになりました。内容については不十分な点が多々あるとは思いますが、本報告が、いささかでも関係各位の参考に供され、学術向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教委、委託者をはじめ、関係各位に多大なご協力、ご援助を頂きましたことに厚く感謝申し上げ、今後のご指導、ご協力を合わせてお願い申し上げます。

昭和56年3月

岩手県埋蔵文化財センター
理事長 新里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織表

役員

理事長	新里 盈	(県 教 育 長)
副理事長	古館 尚一郎	(県 教 育 次 長)
常務理事	菅原 一郎	(県埋文センター所長)
理事	土門 隆三	(県農政部次長)
"	佐々木 益人	(県林業水産部次長)
"	菊池 岩人	(県土木部次長)
"	森 嘉兵衛	(岩手大学名誉教授)
"	板橋 源	(岩手大学名誉教授)
"	草間 俊一	(岩手大学人文社会学部々長)
"	小形 信夫	(学 識 経 験 者)
監事	熊谷 正夫	(県文化課課長)
"	及川 久男	(県財務課課長)

職員

所長	菅原 一郎	調査課長	瀬川 司 男	専 門 員	鈴木 隆英
総務課長	小笠原 喜一	主任専門員	近藤 宗光	"	三浦 謙一
庶務課長	岡沢 成治	"	遠藤 勝博	"	種市 進之
主 事	佐藤 久四郎	"	山口 了紀	"	高橋 正之
"	立花 多加志	"	園生 尚	"	工藤 利幸
"	及川 賀子	専 門 員	村上 達夫	"	四井 謙吉
技能員	佐藤 春男	"	畠山 靖彦	"	吉田 洋
補助員	広瀬 陽子	"	高橋 与右衛門	"	光井 文行
"	田鎖 光子	"	鈴木 恵治	"	佐藤 勝
"	藤田 真弓	"	小平 忠孝	"	中川 重紀
		"	田 錦 寿夫	"	高橋 義介
		"	大原 一則	"	松野 恒夫
		"	本沢 慎輔	"	佐々木 清文
		"	高橋 文夫		

緒 言

1. 本報告書は、岩手県紫波郡紫波町高水寺に所在する稲村遺跡・中田遺跡・古屋敷遺跡の3遺跡に関連した発掘調査の内容と結果を取録したものである。
2. 今回の調査は国道4号線矢巾～紫波間の拡幅工事に伴う事前緊急調査である。調査についての協議は建設省岩手工事々務所と岩手県教育委員会文化課との間においておこなわれ、その合意にもとづいて、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが建設省岩手工事々務所の委託を受け、調査を実施した。
3. 発掘調査は2カ年にわたっている。昭和53年6月1日から8月31日までは稲村遺跡が精査まで、中田遺跡・古屋敷遺跡が粗掘りだけを実施し、後者2遺跡の精査は昭和54年4月9日から6月30日までおこなわれた。室内整理作業は昭和56年1月16日まで継続された。
4. 発掘調査および整理作業は遠藤勝博・三浦謙一・高橋義介・光井文行が担当し、稲村遺跡の発掘調査には、宮 康夫・藤原 彰が調査協力員として参加した。
5. 発掘調査に際しては次の機関に御協力をいただいた。
建設省岩手工事々務所・紫波町・紫波町教育委員会
6. 発掘調査に御協力をいただいたのは、稲村遺跡では藤尾与三郎氏をはじめとする地元42名の方々、中田遺跡・古屋敷遺跡でも同氏をはじめとする42名の方々である。
7. 本報告書の執筆は、瀬川司男が「調査に至る経過」、高橋が「調査方法及び整理方法」、稲村遺跡に関する事実記載と考察、光井が「地形・地質」、中田遺跡と古屋敷遺跡の遺構に関する事実記載と考察、三浦が中田遺跡と古屋敷遺跡の遺物に関する事実記載と考察、を分担した。それぞれの文末に執筆担当者の氏名を付した。
8. 挿図および写真図版の作成は3人の調査員が分担し、北条恵美子・滝村キヨ・浅沼朝子・南館恭子・吉田 京・藤島ヒロ子・村上幹子・酒井宗孝(以上図版)・佐藤和也・高橋 弘・松村公(以上写真図版)などの方々の協力を得た。
9. 本報告書は3遺跡を一冊にまとめて取録したものであるが、共通する事項は一括して、I「調査の共通事項」・V「遺構・遺物のまとめ」として掲載した。
10. 本報告書の挿図凡例は「室内整理の方法」の項(4ページ)に掲載した。
11. 本文3ページには、国土地理院発行の5万分の1地形図「日詰」を使用した。
12. 発掘調査における座標の基点の測量はアジア航測株式会社がおこなった。

本文目次

序

緒言

I. 調査の共通事項

1. 調査に至る経過	4
2. 調査方法と整理方法	4
(1) 調査方法	4
(2) 整理方法	6
3. 遺跡の立地と環境	6
(1) 地形・地質	6
(2) 周辺の遺跡	9

II. 稲村遺跡

1. 検出された遺構と発見遺物	15
(1) 竪穴住居址	15
B区	15
E区	17
H区	20
(2) 掘立柱建物跡	22
(3) 陥し穴状遺構	24
(4) 溝跡	27
2. まとめ	27

III. 中田遺跡

1. 検出された遺構と発見遺物	38
(1) 竪穴住居址	38
A区	38
B区	42
(2) ビット	56

(3) 陥し穴状遺構	58
(4) 溝跡	58
2. まとめ	61

IV. 古屋敷遺跡

1. 検出された遺構と発見遺物	76
(1) 竪穴住居址	76
A区	76
C区	81
D区	85
(2) 掘立柱建物跡	91
(3) ビット	93
(4) 溝跡	97
(5) 方形厩溝跡	99
2. まとめ	99

V. 遺構・遺物のまとめ

1. 奈良時代の住居址（稲村遺跡）.....	110
2. 奈良時代の遺物（稲村遺跡）.....	110
3. 平安時代の住居址（中田遺跡・古屋敷遺跡）.....	112
4. 平安時代の土器（中田遺跡・古屋敷遺跡）.....	114

図 版 目 次

I 調査の共通事項

第1図	岩手県全体図	2
第2図	遺跡位置図	3
第3図	遺跡周辺の地形分類図	8
第4図	深掘り断面柱状図	9

II 稲村遺跡

第1図	地形と調査区域	12
第2図	遺構配置図(折り込み)	13・14
第3図	B-23住居址実測図	16
第4図	E-16住居址実測図	18
第5図	H-10住居址実測図	21
第6図	C-19・E-23掘立柱建物実測図	23
第7図	陥し穴状遺構実測図	25
第8図	G-08溝跡実測図	27
第9図	出土遺物(B-23住居址)	28
第10図	出土遺物(B-23住居址)	29
第11図	出土遺物(E-16住居址)	30
第12図	出土遺物(E-16住居址)	31
第13図	出土遺物(E-16住居址)	32
第14図	出土遺物(E-16住居址)	33
第15図	出土遺物(E-16住居址)	34
第16図	出土遺物(H-10住居址)	35
第17図	出土遺物(H-10住居址)	36

III 中田遺跡

第1図	A-1住居址実測図	38
第2図	A-2住居址実測図	40
第3図	B-1住居址実測図(1)	43
第4図	B-1住居址実測図(2)	44
第5図	B-2住居址実測図	46
第6図	B-3住居址実測図	49
第7図	B-4住居址実測図(1)	52
第8図	B-4住居址実測図(2)	53
第9図	B-5住居址実測図	55
第10図	ビット・陥し穴状遺構実測図	57
第11図	溝跡実測図(折り込み)	59・60
第12図	遺構配置図	63
第13図	出土遺物(A-1住居址・A-2住居址)	64
第14図	出土遺物(A-2住居址・B-1住居址)	65
第15図	出土遺物(B-1住居址)	66
第16図	出土遺物(B-1住居址)	67
第17図	出土遺物(B-2住居址)	68
第18図	出土遺物(B-2住居址)	69
第19図	出土遺物(B-2住居址)	70
第20図	出土遺物(B-3住居址)	71
第21図	出土遺物(B-3住居址・B-4住居址)	72
第22図	出土遺物(B-4住居址)	73
第23図	出土遺物(B-4住居址・B-5住居址・A-52ビット・A-	

154溝跡) 74

IV 古屋敷遺跡

第1図 A-1住居址実測図 76

第2図 A-2住居址実測図 78

第3図 A-3住居址実測図 79

第4図 C-1住居址実測図 82

第5図 C-2住居址実測図 83

第6図 D-1住居址実測図 85

第7図 D-2 a住居址実測図 87

第8図 D-2 b住居址実測図(第1次)
..... 89

第9図 D-2 b住居址実測図(第2次)
(1) 90

第10図 D-2 b住居址実測図(第2次)

(2) 91

第11図 掘立柱建物跡実測図 92

第12図 ビット実測図(1) 94

第13図 ビット実測図(2) 95

第14図 ビット実測図(3) 96

第15図 溝跡実測図 98

第16図 方形周溝跡実測図 99

第17図 出土遺物(A-1住居址・A-
3住居址・C-1住居址) 103

第18図 出土遺物(C-2住居址・D-
1住居址・D-2 b住居址) 104

第19図 出土遺物(D-2 b住居址・C-
51ビット・D-51ビット) 105

第20図 古屋敷遺跡遺構配置図(折り込
み) 107・108

写真図版目次

写真図版1 124

- a 航空写真(南から)
- b 航空写真(東から)

II 稲村遺跡

写真図版2 125

- a B-23住居址
- b B-23住居址(カマド)
- c B-23住居址(土器出土状況)

写真図版3 126

- a E-16住居址(土器出土状況)
- b E-16住居址(カマド周辺)

写真図版4 127

- a H-10住居址
- b 鋤先出土状況
- c 須恵器・甕出土状況

写真図版5 128

- a C-19 掘立柱建物跡
- b E-23 掘立柱建物跡

写真図版6 129

- a B-27 陥し穴状況遺構
- b C-28 陥し穴状況遺構
- c D-C4 陥し穴状況遺構
- d G-08 溝

写真図版7 130

出土遺物 (B-23住居址)	
出土遺物 (E-16住居址)	
写真図版 8	131
出土遺物 (E-16住居址)	
写真図版 9	132
出土遺物 (E-16住居址)	
写真図版 10	133
出土遺物 (H-10住居址)	
写真図版 11	134
出土遺物 (H-10住居址)	

III 中田遺跡

写真図版 12	135
a A-1住居址	
b A-2住居址	
写真図版 13	136
a B-1住居址	
b B-1住居址	
c B-1住居址 (煙道部)	
写真図版 14	137
a B-2住居址	
b B-3住居址	
写真図版 15	138
a B-2住居址 (カマド)	
b B-4住居址 (カマド)	
c B-4住居址 (煙道部断面)	
d B-4住居址 (左袖部)	
e B-4住居址 (遺物出土状況)	
写真図版 16	139
a B-4住居址	
b B-4住居址 (貼り床除去後)	

写真図版 17	140
---------	-----

- a B-5住居址
- b A-51ピット

写真図版 18	141
---------	-----

- a A-52ピット
- b B-101陥し穴状遺構
- c B-101陥し穴状遺構断面

写真図版 19	142
---------	-----

- a A-152溝跡・A-153溝跡・A-154溝跡
- b A区深掘り断面

写真図版 20	143
---------	-----

- 出土遺物 (A-1住居址・A-2住居址)

写真図版 21	144
---------	-----

- 出土遺物 (B-1住居址)

写真図版 22	145
---------	-----

- 出土遺物 (B-1住居址・B-2住居址)

写真図版 23	146
---------	-----

- 出土遺物 (B-2住居址・B-3住居址)

写真図版 24	147
---------	-----

- 出土遺物 (B-3住居址・B-4住居址)

写真図版 25	148
---------	-----

- 出土遺物 (B-4住居址・B-5住居址・A-154溝跡)

IV 古屋敷遺跡

写真図版 26	149
---------	-----

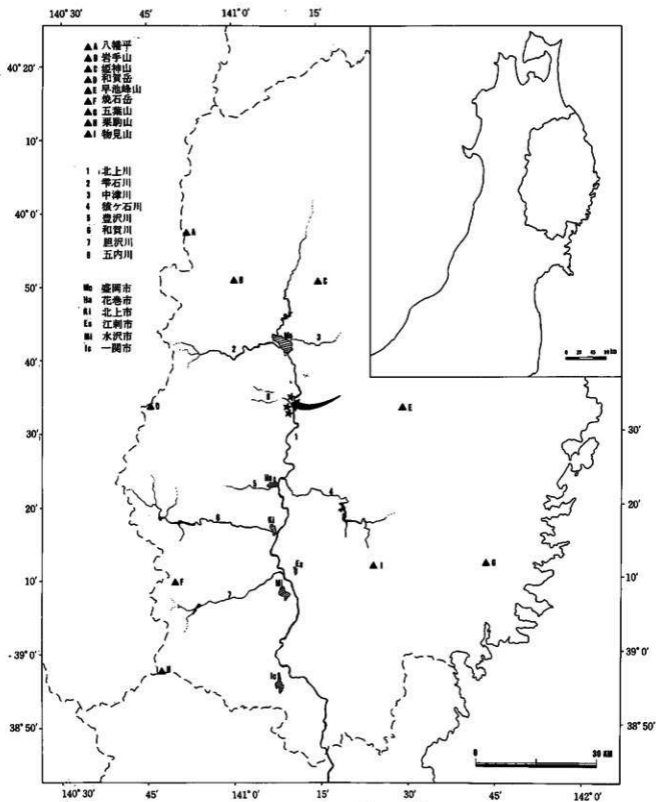
- a A-1住居址
- b A-1住居址 (カマド)
- c A-3住居址 (カマド)

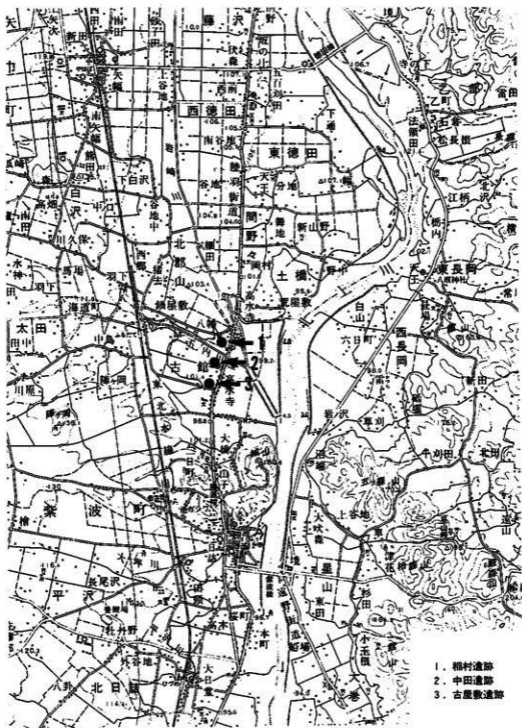
写真図版 27	150
---------	-----

a	A-2 住居址	
b	A-3 住居址	
写真図版28	151
a	C-1 住居址	
b	C-2 住居址	
写真図版29	152
a	C-1 住居址 (カマド)	
b	D-2 a 住居址 (カマド)	
c	D-1・D-2a・D-2b の住居址	
写真図版30	153
a	D-1・D-2b・D-2b の各住居址	
b	D区掘立柱建物跡	
写真図版31	154
a	C区柱穴状ピット群	
b	B-51ピット	
写真図版32	155
a	C-51ピット	
b	C-53ピット	

写真図版33	156
a	C-52ピット	
b	D-51ピット	
写真図版34	157
a	E-51ピット	
b	方形周溝跡	
写真図版35	158
a	B-151溝跡・B-152溝跡・B-153 溝跡	
b	C-151溝跡	
c	A区深掘り断面	
写真図版36	159
出土遺物(A-1住居址・A-3住居址・ C-1住居址・C-2住居址)		
写真図版37	160
出土遺物(C-2住居址・D-2b住居 址・C-51ピット・D-51ピット)		

I . 調査の共通事項





第2図 遺跡位置図

1. 調査に経る経過

昭和47年以来、岩手県には東北縦貫自動車道、東北新幹線の建設をはじめとした大型開発の波が押し寄せてきた。これらの開発は当然埋蔵文化財包蔵地を内包する事となり、これに対する埋蔵文化財保護行政側の対応が迫られる事となった。

岩手県では昭和48年に県教育委員会事務局文化課を設置してこれに対応してきた。しかし開発が更に進行してそれも限界に達したため、昭和52年に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが設立され、これに当たる事になった。

国道4号線の矢幅～紫波間の拡幅工事は昭和49年にすでに路線杭が打たれていたが、その後昭和51年に拡幅ルート内の分布調査が実施され、3ヶ所の遺跡を確認している。

調査に関する本格的協議は昭和52年度秋から行なわれた。事業主体の建設省岩手工事々務所と県文化課との間で調査に関する基本事項が話し合われ、昭和53年度に調査を着手する、未買収部分については調査区域からはずす、橋脚部分から調査することとした。

その後、県埋文センターも含めた実施協議に移った。その協議において事業側から年度内調査終了の要望があったが、他のバイパス調査との関連から、昭和53年は3遺跡とも全面に粗掘を行ない、うち1遺跡は精査まで行なう事で合意がおこなわれた。

それに基づき昭和53年度は、稲村遺跡が粗掘及び精査、中田遺跡・古屋敷遺跡が粗掘のみを行なった。

この間古屋敷遺跡の未買収地問題が、紫波町、岩手工事々務所の努力によって大部分は解決し、粗掘区域を追加したが、一部が残ることになった。

稲村遺跡は粗掘の後引き続き精査を行ない、縄文時代遺構と奈良時代住居址等を完掘した。また粗掘によって、古屋敷遺跡、中田遺跡とも平安時代集落跡であることが判明し、昭和54年度調査に対するメドがつけられた。

昭和54年度は事前実施協議において、中田・古屋敷遺跡とも工事計画との関連上8月調査完了を強く要望され、調査主体の県埋文センターもその要望に答える努力をする事を回答した。

調査は4月より開始され、未買収地問題も解決して順調に推移し、6月に一斉を完了した。

(瀬川司男)

2. 調査方法と整理方法

(1) 調査方法

調査はフィールドからの情報収集を基本に据えて行なった。調査にあたって、粗掘り、精査、

実測作業は調査員の指示にしたがって作業員が行った。調査員は遺構の実測だけに没頭することなく、全体を把握し、フィールドから得られた多量の情報収集を図る為に、実測作業は作業員の中から班を編成し行なった。実測作業はある程度経験や訓練さえあれば、作業員によっても可能である。遺構から得られた観察事項は、埋文センター作成のField Cardに記され報告書作成時において広く活用がなされた。

(1) 調査区の設定においては遺跡内本線部分、付帯施設等の用地内すべてを対象範囲とした。各遺跡とも幅約20mで南北方向に長く延びている為、遺跡の両端に任意の基準点2ヶ所を設け2点間を見通す直線と、基準点を通りこれに直交する直線を座標の基準線とした。

稲村遺跡では南北基準線をもとに、1区画5m×5mとなる様遺跡全体を区画し、北から南へ数字で1・2…西から東へアルファベットでA・B…の記号を付した。遺構の命名は原則として、遺構北西隅の位置する区画を遺構名とし、住居址はA-1住居址、A-1ピット、A-1溝という様に呼称した。

中田・古屋敷遺跡では南北基準線をもとに、30m×30mの大区画を遺跡全体に設定し、北から南へアルファベットでA・B…の記号を付した。また大区画を東西南北に10等分して、南北にアルファベット小文字でa～j、東西に0～9mを3mごとに区画し、3m×3mのグリッドを設定した。遺構の命名は各区画ごととし、原則として住居址は1から、ピットは51から、陥し穴状遺構は101から、溝は151からなどの一連の分類番号を与え、その前に区画名を付して呼称した(A-1住居址、A-51ピット、A-151溝等)。

(2) 掘り際に一部は手掘りを行ない、遺構検出面までの深さを把握したのち、バックホーを使用し表土除去を行なった。

(3) 精査に当たっては、住居址は4分法、ピットは2分法を原則としたが、遺構の重複、地積状況等に応じて使われている。遺物は原則として区ごとに取り上げ、地点、層位を記録し収納した。遺構からの遺物は、遺構に伴うものについては可能な限り出土地点、レベルを図面に記録し、遺物番号を付け取り上げた。

(4) 実測作業は作業員の中より2名1組の実測班を数班編成した。実測班は調査員の指示に従い遺構の断面、平面実測を行ない、図面は調査員が点検した。実測図は縮尺20分の1を原則としたが、状況に応じ10分の1、40分の1図を作成した。遺構の平面図は遣り方測量を原則とし補助的に平板も用いた。

(5) 写真撮影は調査員が行ない、撮影時には埋文センター作成による撮影カードを用い、整理時の混乱を避けるようにした。写真は35mm版モノクロ、カラースライド、6×7cm版モノクロを用いた。

(6) 調査員はフィールドで得られた多くの情報を収集し記録する為に、埋文センターのField

Card を最大限に利用する様に心がけた。

(2) 整理方法

現場から得られた情報の整理は、作業計画にもとづいて行われた。情報は種別ごとに仕分けし、報告書の事実記載に必要なデータを、項目別に分類した。そして観察されたデータと調査員の解釈が記述の際、混同されぬ様に留意をした。図面・遺物・写真・Field Card は下記の方法で整理された。

(1) 図面は第一原因の仕分けを行ない、点検・修正を加え、第二原因を作成し、トレース、図版のレイアウトまでを調査員の指示のもとに室内作業員が行なった。

(2) 遺物は仕分け、復元、拓本、鏽落しの作業を行ない、実測、トレースの順に室内作業員が整理を行ない、主な点検、指示はそのつど調査員が行なった。

(3) 写真は35cm版モノクロ、カラースライド、6×7cm版モノクロ写真別にアルバムに収納し、写真登録カードを作成した。

(4) Field Card はフィールド得られた観察事項を遺構別に仕分け整理した。

個別の整理方法及び挿図の凡例は下記の通りである。

(5) 住居址の図面の縮尺は次の通り統一してある。平面図と断面図は60分の1、カマド断面図は40分の1、30分の1、ピット類は40分の1、溝は不定である。焼土、シルト、攪乱、調査区域外はスクリントーン等を使用し、その指示は下記の通りである。

 焼土  シルト  炭化物  攪乱  調査区域外

(6) 土器の図面の縮尺は3分の1で、左上に口径・器高・底径の順に計測値と右上に出土地点を付した。土器の調整は中軸線の3cm幅で明瞭な部分のみを図化し、調整技法により表現方法を変えた。残存の割合は中軸の両側の線をあけることにより区別し、2分の1の残存は全部書き、2分の1～3分の1は上の線を半分あけ、3分の1～4分の1のものは上の線を3分の2あけた。黒色処理は $\cdot\cdot\cdot\cdot$ のスクリントーンで表現し、土器と須恵器を区別する為に、還元炎焼成の須恵器の断面を墨で塗り潰した。坏においてロクロからの切離しの後に加えられる調整技法の部位は \blacktriangle で示した。

(7) 鉄器は原寸、2分の1、3分の1で載せた。

(8) 石類は3分の1で載せた。

(9) 土製品は2分の1で載せた。

(高橋義介)

3. 遺跡の立地と周辺の遺跡

(1) 地形・地質

北上川は奥羽山脈と北上山地とに挟まれた細長い谷底盆地を南北に縦断して走り、盛岡以北を上流、盛岡～一ノ関間を中流、一ノ関以南を下流と3つに区分される。中でも北上川中流域は最も広い平野地帯である。北上川の西側には支流によってつくられた扇状地群の発達が著しい。大規模なものに胆沢扇状地、六原扇状地などがある。北上川がこれらの扇状地の末端面を切っていることや、幾回かの海進・海退、地盤運動などにより、各扇状地はいずれも段丘状になって北上川に臨んでいる。東側は平地がわずかに発達するだけですぐ北上山地の丘陵部になっている。

稲村・中田・古屋敷遺跡の所在する紫波町は北上川中流域北部に位置している。3遺跡は北上川の支流によって形成された扇状地の末端になっている。この地域も段丘化が進んでおり、中川ら(1963)⁽¹⁾は、高位段丘を石鳥谷段丘、中位段丘を二枚橋段丘、低位段丘を花巻段丘、飯岡野段丘、都南段丘と名づけ分けている。

石鳥谷段丘は日詰ふきん詳しくは城山から紫波高校にかけて残片的に発達しているほか陣ヶ岡にもみられる。面は開析が進んでおり頂面はなだらかになっている。上部に1m以上の黄褐色～黄褐色火山灰層をのせており、その下に赤色風化を受けたクサリ礫を上部にもつ砂または砂礫質粘土を伴う礫層が堆積している。

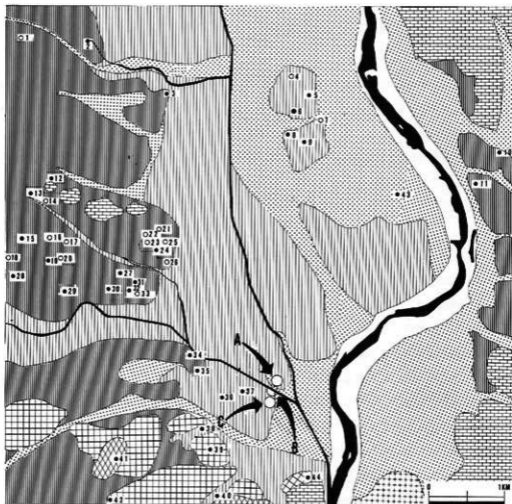
二枚橋段丘は石鳥谷段丘の外縁にへばりつく形で分布している。構成層は主として砂礫層からなり2m内外の黄褐色～黄褐色火山灰層に覆われている。

花巻段丘は西部の山麓から流れる滝名川・岩崎川などによって形成された複合扇状地として残っており原面がよく保存されている。北上川中流域北部の西側半分・山脈側は一部山麓際に残片的に石鳥谷・二枚橋段丘が散在する程度で、ほとんどこの花巻段丘が占めている。構成層は新鮮な礫からなっており、上部には砂および粘土を伴っている。この面上には黄褐色火山灰層はみられない。

都南段丘は花巻段丘の上部を浸食して形成された段丘で北上川流域ふきん・花巻段丘の外縁部に発達している。北へ進むほど沖積面との比高が不明瞭になっている。五代川、岩崎川などの下流域にみられる。構成層は新鮮な礫を主とし上部に砂・シルトおよび粘土を伴っている。

飯岡野段丘は西側の後背山地に沿う山麓状地面に発達している。

稲村・中田・古屋敷遺跡は、都南段丘の先端部になっており、五代川を挟んで北に稲村遺跡、南に中田・古屋敷遺跡(標高100m前後)が位置している。遺跡の北側、東側には、北上川およびその支流によって形成された沖積地が広がっている。沖積面との比高は2m±～3m±である。



奈良・平安時代の遺跡

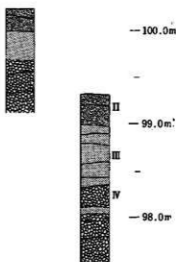
- | | | | | |
|-----------|-------------|------------|------------|------------|
| 1. 標山I遺跡 | 11. 乙部方八丁跡 | 21. 白沢Ⅲ遺跡 | 31. 白沢Ⅳ遺跡 | 40. 杉ノ上Ⅲ遺跡 |
| 2. 上矢沢I遺跡 | 12. 細屋遺跡 | 22. 白沢Ⅳ遺跡 | 32. 白沢Ⅴ遺跡 | 41. 陣ヶ岡遺跡 |
| 3. 南矢幅遺跡 | 13. 下標山遺跡 | 23. 白沢Ⅴ遺跡 | 33. 白沢Ⅵ遺跡 | 42. 柳原遺跡 |
| 4. 秋森古墳遺跡 | 14. 標山遺跡 | 24. 白沢Ⅵ遺跡 | 34. 古館輪遺跡 | 43. 洗川遺跡 |
| 5. 白山堂遺跡 | 15. 標山Ⅲ遺跡 | 25. 白沢Ⅶ遺跡 | 35. 古館駅前遺跡 | |
| 6. 田郷遺跡 | 16. 白沢Ⅲ遺跡 | 26. えぞ森古墳 | 36. 念仏堂遺跡 | A 稲村遺跡 |
| 7. 館前遺跡 | 17. 白沢Ⅱ遺跡 | 27. 白沢Ⅷ遺跡 | 37. 中田I遺跡 | B 中田遺跡 |
| 8. 西前遺跡 | 18. 白沢えぞ森古墳 | 28. 壺岡遺跡 | 38. 杉ノ上I遺跡 | C 古原歌遺跡 |
| 9. 徳丹城跡 | 19. 石蔵遺跡 | 29. 太田遺跡 | 39. 新田遺跡 | |
| 10. 松長根遺跡 | 20. 白沢I遺跡 | 30. 不動馬場遺跡 | | |

○奈良時代

第3図 遺跡周辺の地形分類図⁽¹⁾

稲村遺跡における層序は上から述べると次の通りになる。I層は表土で黒色土層(層厚20cm±)である。II層は黒色砂質シルト層(層厚20cm±)である。III層は上位(III a層)が暗褐色シルト層(層厚25cm±)、下位(III b)が褐色シルト層(層厚30cm±)である。IV層は礫を多く包含しているシルト層である。遺構検出面はIII a層上部である。

中田・古屋敷遺跡における層序(第4図)は両遺跡ともほぼ同じであるので一括して述べることにする。I層は表土で暗褐色土層(層厚15cm±~30cm±)である。II層は黄褐色シルト層(層厚23cm±~33cm±)で2層に細分される。III層は黄褐色砂層(層厚40cm±~64cm±)で粒径のちがいがら5層に細分される。IV層は褐灰~黒色砂礫層で上部に砂層の薄層をはさむ。主体は5mm±~10mm±土大の礫で構成されているが下部では最大粒径18cm±土大の大形礫がみられる。遺構検出面は2層上面である。



古屋敷遺跡A区 中田遺跡A区

第4図 深堀り断面柱状図

(2) 周辺の遺跡

周辺には、狄森古墳、白沢えぞ森古墳、えぞ森古墳、白沢遺跡、煙山遺跡、館前遺跡など奈良時代の遺跡がいくつか所在している。これらの遺跡はいずれも花巻段丘にのり都南段丘上にある稲村遺跡とは立地の面で異なる。

中田・古屋敷遺跡の北方約4kmには、徳丹城跡(創建813年)が所在する。そのほか平安時代の遺跡としては、新幹線に関係して調査がおこなわれた古築橋遺跡、古館駅前遺跡、杉ノ上I・II・III遺跡、田頭遺跡などがある。以上の平安時代の遺跡は低位段丘である花巻段丘、都南段丘上に位置している。平安時代の遺跡の分布は、奈良時代の遺跡のある周辺のほかさらに低位へ高位へと分散的に広がっている。

〔注 記〕

- (1) 地形分類図の作成にあたっては、都南村湯沢遺跡の「地形面分類図」(高橋・1977)を参考にした。
- (2) 周辺の遺跡の分布については、「埋蔵文化財地図」(岩手県教育委員会・1974)および「紫波南部地区の周辺の遺跡」「紫波地区北部~盛岡地区南部の周辺の遺跡」(鈴木・1979)を参照にした。

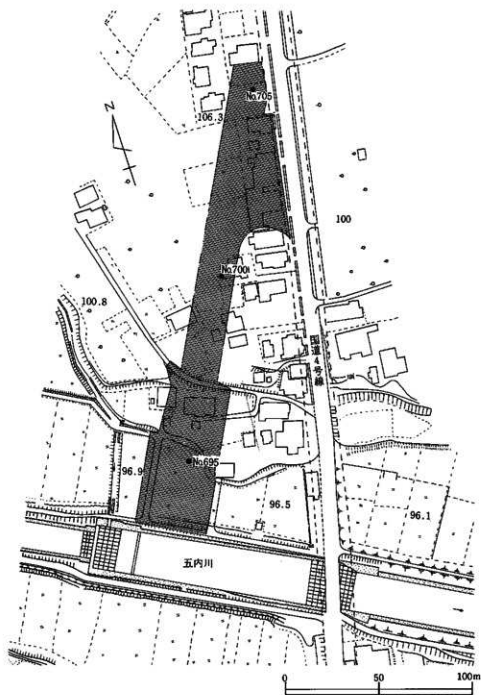
〔参考文献〕

- (1) 鈴木隆英 1979 「紫波南部地区の概観」「紫波地区北部~盛岡地区南部の概観」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- (2) 高橋文夫 1977 「地形・地質」『都南村湯沢遺跡』
- (3) 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二 1963 「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地学雑誌』第69巻第812号
- (4) 村井貞允 19 「北上川の自然」『北上川』

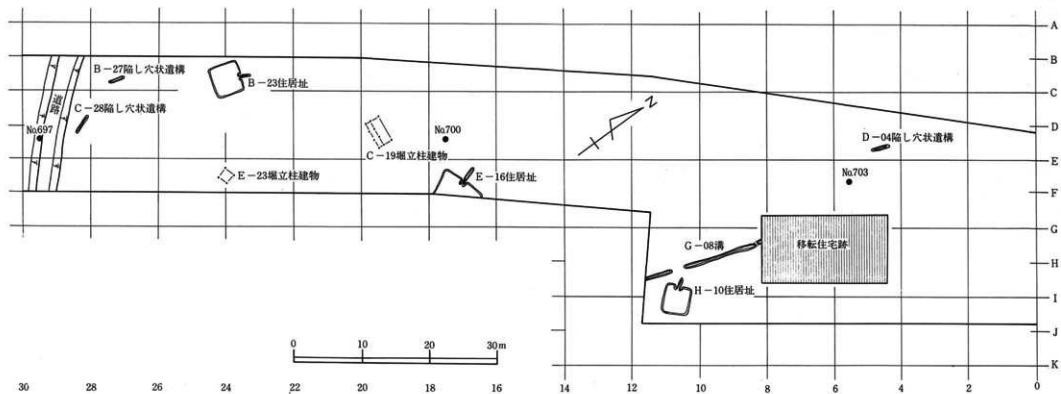
(光井文行)

II . 稻 村 遺 跡

遺跡所在地 紫波郡紫波町高水寺字稲村
調査期間 昭和53年6月1日～8月31日
調査対象面積 3,200㎡
発掘面積 3,200㎡



第1図 地形と調査区域



第2図 遺構配置図

1. 検出された遺構と発見遺物

(1) 竪穴住居址

B 区

B-23住居址

検出遺構（第3図、写真図版2）

当住居址は遺跡の南側に位置し、路線区域西端に接している。Ⅲa層上面において検出され、上部は宅地造成時の削平と木根による攪乱が著しい。

規模は4.45×4.15mのややいびつな隅丸方形を呈し、カマドは北壁中央部よりやや東側に1基設けられている。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成され、少量の炭化物を包含し硬くしまっている。床面は一部に木根等の攪乱が見られるが、ほぼ平坦で全体的に硬くしまる。

柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

壁高は東壁16cm、西壁26cm、南壁18cm、北壁22cmを計る。壁溝は幅10cm、深さ3cm前後で、一部途切れる箇所もあるが、カマド部分を除いてほぼ住居址全体を回っている。

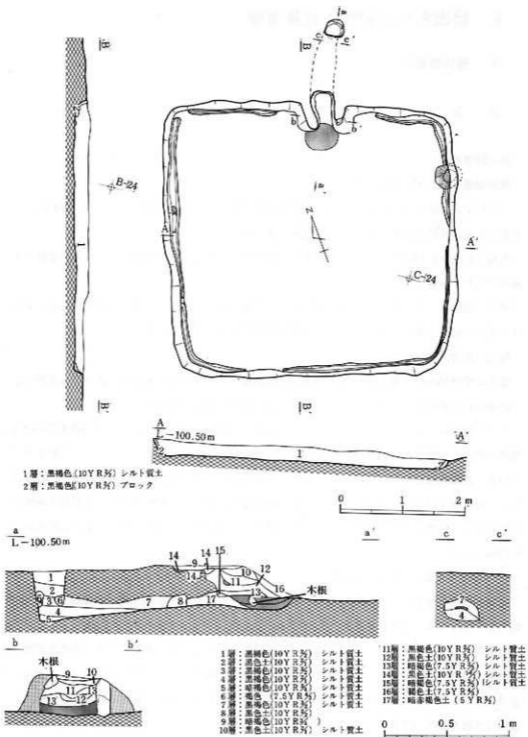
カマド軸部はシルトを用いて構築されているが、右軸部には粒形33cm大の亜角礫を5cmほど埋めこみ、シルトで覆っている。燃焼部は径54×44cmの楕円形の落ちこみがあり、火熱を受けている。煙道部はくりぬいて造られており、全長110cmである。燃焼部から煙道部には段差はなく、緩かな下り勾配で煙出し部へつづく。底面はほぼ平坦で、焼燃部寄りの天井部と側壁は火熱を受け、一部は赤色変化を示している。煙出し部は径24cmの円形を呈し、深さは検出面より40cmである。

出土遺物（第9・10図、写真図版7）

カマド周辺を中心として土師器が出土しているが、破片が多く復元可能なのは壺2点と手捏ね土器だけである。土師器の器種としては坏、甕、壺、手捏ね土器の4種類がある。

土師器坏（第9図1～3）いずれもロクロ未使用で、体部外面に篋磨き調整、内面を篋磨き調整後黒色処理を施している。1と3は体部上半から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、2点ともAⅣ類に分類される。1の底部は丸底風平底である。2の口縁部は直線的に外傾し、底部は平底を呈す（AⅢ類）。

土師器壺（第9図4～9・第10図1～3）いずれもロクロ未使用である。第9図4と5は頸部に段を有し口縁部は外反する。口縁部は横撫で調整、体部外面に篋撫で調整を施している。



第3図 B-23住居址実測図

内面は磨滅しているが、寛撫で調整した後に黒色処理を施した痕跡が見られる。6は頸部に明瞭な段を有し口縁部は外反する。体部外面は刷毛目調整を施している。3点ともA I b類に分類される。7と8の口縁部は外反し口唇部を上方にかるくひきだし、頸部に段を有す(A I c類)。9は口唇部に一条の沈線を有し口縁部は外反する。口縁部は横撫で調整、体部外面に刷毛目調整を施している(A I b類)。第10図1と2の口縁部は外反し口唇部を微かに下方にひきだしている。2は内外面とも磨滅が著しいが、口縁部は横撫で調整、体部外面に刷毛目調整痕が見られる(A I c類)。3は体部下半破片で体部外面を寛削り調整を施している。底部は木葉痕である。

土師器壺(第10図4)ロクロ未使用で口縁部から体部下半までの破片である。頸部に微かに沈線を有し、口縁部下反は外反する。体部が胴張りする器形である。

手捏ね土器(第10図5~10)いずれもカマド周辺よりの出土である。6は口径6.8cm、器高2.6cmで体部外面に黒斑を有す。8は口径7.3cm、器高2.9cmである。形状は環形を呈し、底部は平底風丸底である。焼成、成形とも雑であり、口縁部から体部上半にかけて指撫で調整痕が見られる。

E 区

E-16住居址

検出遺構(第4図, 写真図版3)

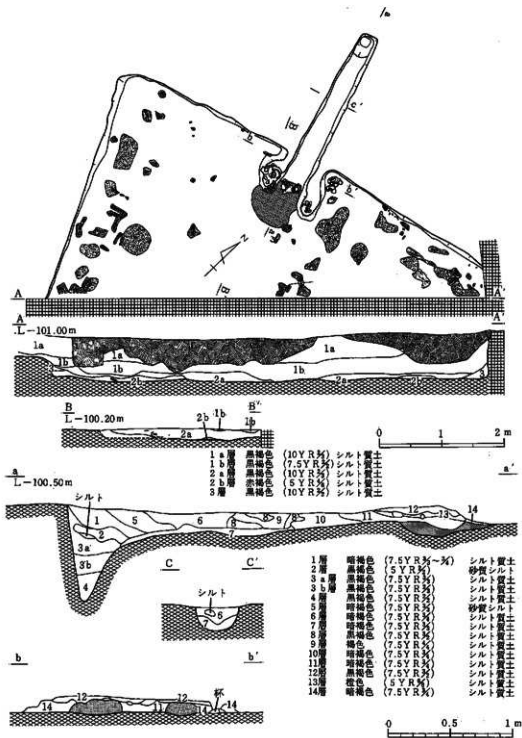
当住居址は遺跡中央部東側に位置する。遺構の半分以上が調査区域外に延びており、平面形、規模の詳細は不明であるが、検出した部分から推定すれば6.5cm前後の隅丸形状を呈すと考えられる。遺構検出面はⅢa層上面である。カマドは北西壁中部よりやや西側に1基設けられている。

埋土は黒褐色シルト質で構成され2層に大別される。いずれも多量の焼土と炭化物を包含し、硬くしまっている。床面と壁際全面に炭化材と焼土が検出されたことから焼失家屋であろうと推定される。

床面はやや硬くしまり平坦である。調査範囲内においては柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

壁高は14cm前後で床面より直立する。

住宅の擾乱削平の為、カマド天井部の構造は不明である。袖部は両袖とも芯に土師器の甕を倒立に据え、シルトで覆って構築している。燃烧部は径78×70cmの円形を呈し、支脚とし小形の甕が伏せて使用されている。煙道部は溝状に掘り上げられ、全長230cmである。燃烧部から



第4図 E-16住居址実測図

緩かな下り勾配で煙出し部へつづく。底面はやや凹凸はあるもののほぼ平坦である。側壁は良く火熱を受け赤色変化している。煙出し部は径34×23cmの隅丸長方形を呈し、深さは検出面より78cmである。

出土遺物（第11～15図，写真図版8・9）

当住居址の遺物はカマド周辺を中心として多量に出土し、土師器が主体をしめる。土師器以外の遺物としては、鉄鉗、鉄鏃、土製の小玉等がある。土師器の器種としては坏、鉢、甕、壺の4種類がある。

土師器坏（第11図1～9）いずれもロクロ未使用で内面に黒色処理を施している。1～3は体部下半に微かに沈線を有し口縁部は外傾する。体部内外面とも磨き調整を施している。2と3は磨減が著しい。底部は丸底を呈す（AⅠ類）。4は体部下半に段を有し口縁部は外傾する（AⅠ類）。5は口縁部が直線的に外傾し、内外面とも磨き調整を施している。底部は平底を呈し、磨きで「+」の印がある（AⅡ類）。6は現存1/5程度の破片で、内外面とも磨き調整を施している。底部は平底で磨き印がある（AⅣ類）。7～9は体部中位に段を有し、口縁部は内弯気味である。体部内外面とも磨き調整を施し、底部は丸底風平底である（AⅡ類）。

図面化できなかった破片の中には、床面から出土した回転米切りによる切離し無調整の坏が1点ある（B類）。

土師器鉢（第14図1～5）いずれもロクロ未使用で、内面を磨き調整後に黒色処理を施している。体部中位から口縁部にかけて内弯し、外面は磨き調整である。底部は平底と丸底風平底の2種類がある。

土師器甕（第11図10～11・第12図1～6・第13図1～5・第15図1～2）いずれもロクロ未使用である。第11図10は口縁部破片で、頸部に沈線を有し口縁部は外反する。口縁部横撫で体部外面の一部に刷毛目調整痕が見られる。第12図2・第15図1は頸部に段を有し口縁部は外反する。体部外面に刷毛目調整を施し、3点ともAⅠb類に分類される。第11図11と第12図2の口縁部は外反し口唇部をかるく上方に引きだしている。頸部に段を有し、体部外面は刷毛目調整を施している（AⅠc類）。第12図1は胴部に最大径を有し、口縁部は外反し口唇部をかるく上方に引きだしている。体部内外面とも磨減し、刷毛目調整痕が外面の一部に見られる。底部は木葉痕である（AⅠd類）。3と4は体部下半破片であり、3は体部内外面、4は外面に刷毛目調整を施している。底部は木葉痕である。5は頸部に段を有し口縁部は外反する。体部内面に刷毛目調整痕が見られる。6の口縁部は外反し、口縁部横撫で体部外面に磨き調整を施している。第13図1は口唇部に微かに一条の沈線を有し口縁部は外反する。体部外面に刷毛目調整を施している（AⅠa類）。3は頸部に段を有し口縁部は外反する（AⅡa類）。4と5は頸部に段を有し口縁部は外反し、口唇部をやや上方に引きだす（AⅡb類）。3～5の体部外面は口縁

部横撫で、体部刷毛目調整を施している。内面は磨滅している為技法が観察できなかった。

土師器壺（第15図2～3）2は体部下半破片で、体部外面に刷毛目調整痕が見られる。3は底部から体部中位までの破片で、体部は球形状を呈す。体部外面に篋撫で調整を施している。

鉄製品（第15図4～5）4は鉄鉗で、一部欠損しているだけのほぼ完形品である。径0.8cm角の鉄材を用い長さ27cmである。5は両端を欠損している鉄棒で、現存長さ3cm、横断面は0.5×0.3cmの長方形である。

土製品（第15図6～8）いずれも床面より出土した土製の小玉で、粒形1.2cmの球形状を呈し真ん中に孔が貫通している。

H 区

H-10住居址

検出遺構（第5図、写真図版4）

当住居址は遺跡の北側に位置している。掘掘りの際に不手際があり、住居址の西側半分の壁や床面、カマド本体の一部を削平してしまった。

規模は3.9×3.9mの隅丸方形である。カマドは北西壁中央部に1基設けられている。

埋土は残存部分の観察では、黒色シルト質主体の2層に大別される。1層は硬くしまり粘性がある。2層は少量の焼土と炭化物を包含し、しまりがある。中央部から北西壁際にかけ炭化材と焼土を多量に検出されたことから、焼失家屋であろうと推定される。

床面は水道、木根による攪乱はあるもののほぼ平坦である。柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

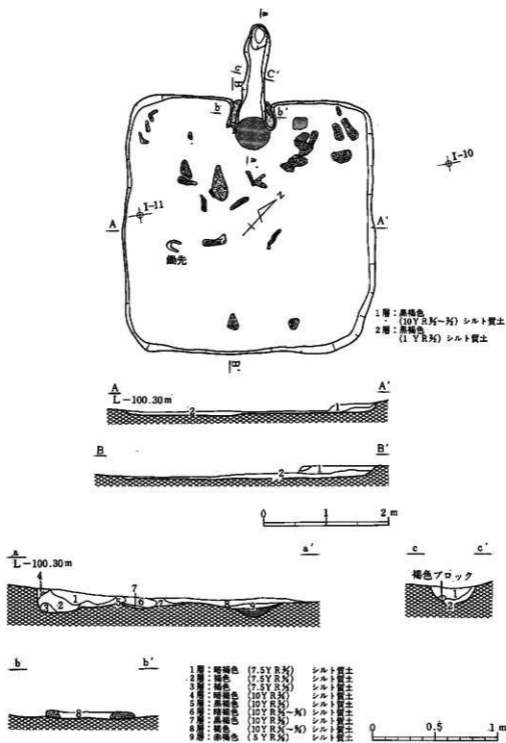
壁高は北壁20cmで、床面よりほぼ直立する。

カマドは削平の為上部構造は不明である。両軸部はシルトを用い構築している。燃焼部は径54×52cmの円形を呈し、良く火熱を受け赤色変化を示す。煙道部は全長150cmあり、燃焼部から緩かな下り勾配で煙出し部につづく。煙出し部は径38×26cm、深さ4cmの楕円形ピットである。

出土遺物（第16・17図、写真図版10・11）

当住居址の遺物は南東壁際とカマド周辺部に多く出土し、土器が主体をしめる。他の遺物としては鉄製の鋤先、鉄釘、砥石がある。器種としては土師器杯、鉢、甕、小型の手捏ね土器、須恵器の甕がある。

土師器杯（第16図1～4）いずれもロクロ未使用で内面に黒色処理を施している。1と2は



体部下半に段を有し、体部上半から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。底部は平底風丸底である。1は体部内外面とも磨き調整を施している（AⅡ類）。3の口縁部は外傾し、体部内外面に磨き調整を施している（AⅢ類）。4は体部中位に沈線を有し口縁部は外傾する。磨減が著しいが体部外面に磨き調整痕が見られる（AⅠ類）。

土師器鉢（第16図5）ロクロ未使用で口縁部は欠いている。体部外面は磨き調整、内面は磨き調整後黒色処理を施している。底部は平底である。

土師器甕（第16図6～9・第17図1）いずれもロクロ未使用である。第16図6～8は口縁部が外反し口唇部にいたって剣先状に直立する。頸部には微かに段を有し、口縁部は横撫で、体部外面に刷毛目調整を施している（AⅡa類）。7の口径と器高は同じ値を示す。9は体部下半部の破片で、体部外面は刷毛目調整、内面を横撫で調整を施している。第17図1は口縁部は外反し口唇部にいたって直立する。頸部に段を有し胴部に最大径をもつ。口縁部は横撫で体部外面に刷毛目調整を施している（AⅠd類）。

須恵器甕（第17図2）B類に分類される。口縁部破片であり、口縁部に磨きによる4本の平行沈線による波状文が施されている。口縁部は外反し口縁端にいたってN字状を呈す。

手捏土器（第17図3）口径4cm、器高2.5cmを呈し口縁部は直立する。体部外面に磨削調整を施し、削り方向は底部から口縁部方向である。

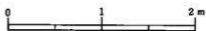
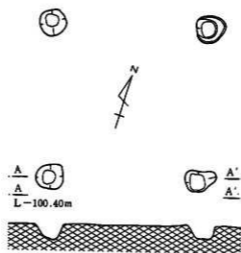
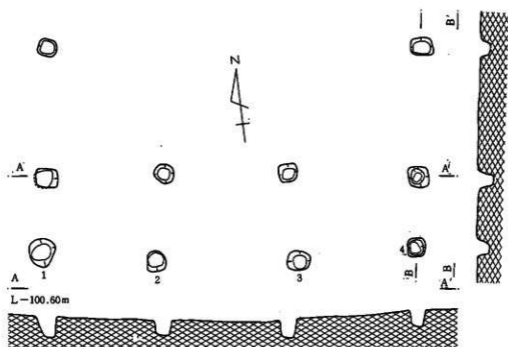
鉄製品（第17図4～6）4は径19.5×15.5cm、刃厚0.3cmのU字形を呈す鋤先鉄器である。木質部の風呂口と刃先の接続部内側には、接合を容易にする為のV字状の溝が回っている。5と6は両端を欠損しているが釘である。断面形は径0.5cm角で、現存長は5が5.8cm、6が4.8cmである。

磁石（第17図7）住居址の床面に半分以上が埋設された状態で出土した。径12.7×9.8cmで五角形の断面を呈し、面全体に細い条痕がありよく使用されている。

(2) 掘立柱建物跡

C-19掘立柱建物跡（第6図、写真図版5）

遺跡の中央部寄り、E16住居址の南側9mの所に位置し、東西棟の3間(4.0m)×2間(2.2m)の掘立柱建物である。身舎柱間寸法は南側列西側より1.25m+1.5m+1.25m(現尺4.12尺+4.95尺+4.12尺)、中列西側より1.4m+1.3m+1.3m(現尺4.62尺+4.29尺+4.29尺)、北側列は北2柱と北3柱は検出されず1間(4m)である。梁行は1.4m+0.8m(現尺4.62尺+2.64尺)の等間である。



第 6 図 掘立柱建物跡実測図

柱穴の掘り方は、18～20cm前後の隅丸方形ないし長方形を呈し、深さは10～15cmである。掘え方（柱痕）は確認することはできなかった。

埋土は黒色シルト質土で構成され、褐色土がブロック状に混入する。遺物は全く出土していない。

E-23 掘立柱建物跡（第6図、写真図版5）

遺跡の南端部に位置し、1間×1間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁行とも1.65m（現尺5.4尺）の等間である。

柱穴の掘り方は、径30cm前後の円形ないし楕円形を呈し、深さ15～20cmである。掘え方（柱痕）は確認することはできなかった。

埋土は黒褐色シルト質混土の単層である。遺物は全く出土していない。

まとめると建物はすべて掘立柱によるもので、柱穴寸法は18×20cm～30×30cm、検出面から深さ10～20cm前後である。掘え方（柱痕）は確認されなかった。C-19建物は身舎柱間寸法は4尺（1.21m）～5尺（1.51m）の間にあり、梁行寸法は4.62尺（1.4m）と2.64尺（0.8m）と一方が縮小された形をとっている。E-23建物は桁行、梁行寸法とも5.4尺（1.65m）の等間である。

古代の柱穴と比較して規模も小さく、身舎柱間寸法も4～5尺と縮んだ形をとる事等より、古代の集落に伴うものではない。間尺寸法が縮む形は、比較的新しい時期であろうと推定はされるが、年代決定資料を欠く事により時期は不明としておく。

(3) 陥し穴状遺構

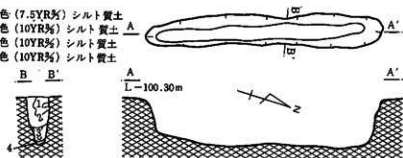
B-27 陥し穴状遺構（第7図、写真図版6）

当遺構は遺跡南端部の段丘縁に位置し、Ⅲa層上面において検出がなされた。規模は開口部233×32cm、底部225×16cm、深さ55cmである。主軸は北に向って18.9度東に偏す。平面形は細長い溝状である。横断面は底部がやや細めのU字を呈し、側壁の中段あたりから開口部にかけてほぼ直角に立ち上がる。

埋土は黒褐色シルト質土が主体であり、4層に大別される。1～2層は黒褐色土で硬くしまり、褐色土をブロック状に含む。3層は褐色土と黒色土の混土で硬くしまりがある。4層は黒褐色土でやや粘性に富む。3層は側壁の崩壊土である以外は、いずれも開口部より流れこみの自然堆積の様相を示す。

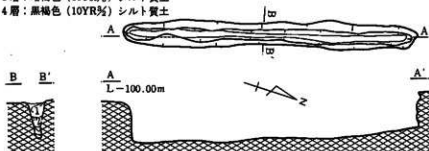
底部は礫層上面まで掘りこまれ、多少の凹凸があり、南端部がやや高まりを示す。遺物は出

- 1層：黒褐色 (7.5YR $\frac{5}{2}$) シルト質土
 2層：暗褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土
 3層：黒褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土
 4層：黒褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土



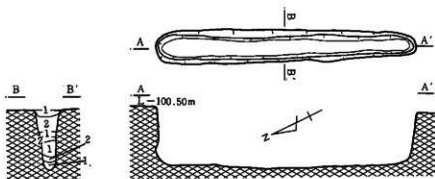
(1) B-27陥L穴状遺構

- 1層：黒褐色 (7.5YR $\frac{5}{2}$ ~ $\frac{5}{4}$) シルト質土
 2層：黒褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土
 3層：暗褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土
 4層：黒褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土

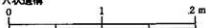


(2) C-28陥L穴状遺構

- 1層：黒褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土
 2層：黒褐色 (10YR $\frac{5}{2}$) シルト質土



(3) D-04陥L穴状遺構



第7図 陥L穴状遺構実測図

土しなかった。

C-28 陥し穴状遺構 (第7図, 写真図版6)

当遺構は遺跡の段丘縁りB-27陥し穴状遺構南側、約6mの所にほぼ等高線に沿う様に位置している。検出面はⅢa層である。規模は開口部313×23cm、底部297×10cm、深さ44cmである主軸は北に向って18.4度西に偏す。平面形は細長い溝状を呈し、横断面は開口部が開き気味のU字状である。

埋土はシルト質主体の4層に大別される。1層は黒褐色土で、褐色土のブロックを含む。2層は暗褐色土で硬くしまりがある。3層は黒褐色土で、側壁の崩壊土と黒褐色土の混土である。4層は黒褐色土で褐色の砂質シルトを含み、ややしまりがある。

底部は礫層まで掘りこまれ、北端部がやや高まりを示す。遺物は出土しなかった。

D-04 陥し穴状遺構 (第7図, 写真図版6)

当遺構は遺跡の北端部に位置し、遺構検出面はⅢa層上面である。規模は開口部279×34cm、底部266×15cm、深さ64cmである。主軸は北に向って23.5度東に偏す。平面形は南端部がやや細い溝状を呈し、横断面は開口部が開き気味のU字状である。

埋土はシルト質土で構成され、黒褐色土と灰褐色土が交互に堆積する。上部は硬くしまり、下部は軟くなり、灰褐色土がブロックで混入する。埋土はいずれも開口部より流れこみの自然堆積の様相を呈す。

底部はほぼ平坦で礫層を20cm前後掘りこんでいる。遺物は出土しなかった。

この遺構と同一形態のものは県内各地の遺跡で検出されている。紫波町内における例を上げれば、宮手遺跡⁽¹⁾29基、上平沢新田遺跡⁽²⁾14基、墳館遺跡⁽³⁾3基、栗田Ⅲ遺跡⁽⁴⁾56基、古館駅前遺跡⁽⁵⁾1基、古館横遺跡⁽⁶⁾3基、西田遺跡⁽⁷⁾20基、中田遺跡⁽⁸⁾1基である。

形状は細長い溝状を呈し、横断面はU字形を示す。検出した地形概況は、段丘の周縁部の平坦地・緩斜面上であり当遺構と類似する。形態の分類は少数の為に行なわなかった。機能的性格づけは、都南村湯沢遺跡⁽⁹⁾、北海道函館空港関連遺跡等の報告書で提示されており、「陥し穴」とする意見が大勢を占めてきている。時期は都南村湯沢遺跡の調査によって、縄文中期末～後期初頭に属するものと判明されているが、当遺構からの遺物出土はなく時期は不明である。

(註)

- (1)～(3) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 岩手県文化財調査報告書第52集 岩手県教育委員会 昭和55年3月
- (4) 栗田Ⅲ遺跡現地説明会資料 岩手県教育委員会 昭和53年
- (5)～(6) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 岩手県文化財調査報告書第35集 岩手県教育委員会 昭和54年4月
- (7) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 岩手県文化財調査報告書第51集 岩手県教育委員会 昭和55年3月
- (8) 中田・古屋敷現地説明会資料 岩手県埋蔵文化財センター 昭和54年
- (9) 都南村湯沢遺跡調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第2集 昭和52年3月



第8図 G-08溝実測図

H-8

(4) 溝

G-08溝 (第8図, 写真図版)

遺跡の北側、H10住居址西約2mの所を国道4号線とほぼ平行に南北方向に走っている。規模は幅50cm、深さ5cmの皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。

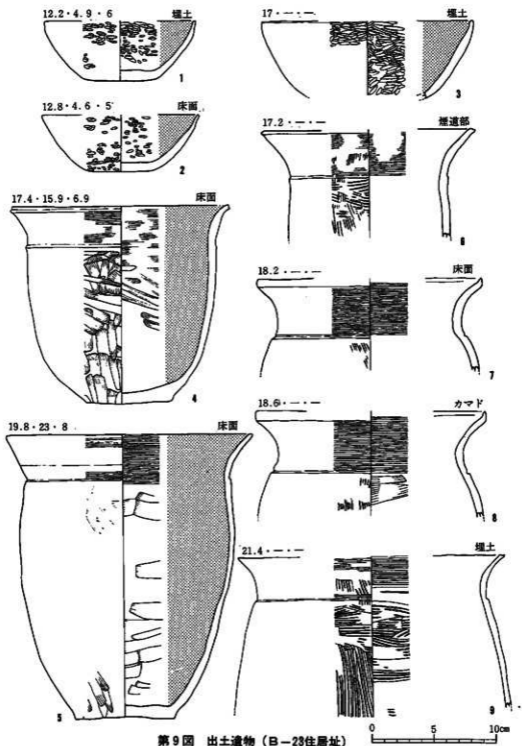
埋土は暗褐色シルト質土の単層である。この区域は移転した住宅等による攪乱、削平が著しく、溝の中央部は削平の為一部途切れている。北側は住宅のコンクリート土台によって破壊削平されているが、南側は調査区域外に延びる様である。

遺物は全く出土しておらず年代決定の資料を欠く。住宅との新旧関係は明確であり、時期は埋土状況、道路と沿う様に走る事等から見て比較的新しい時期のものであろうと推定される。

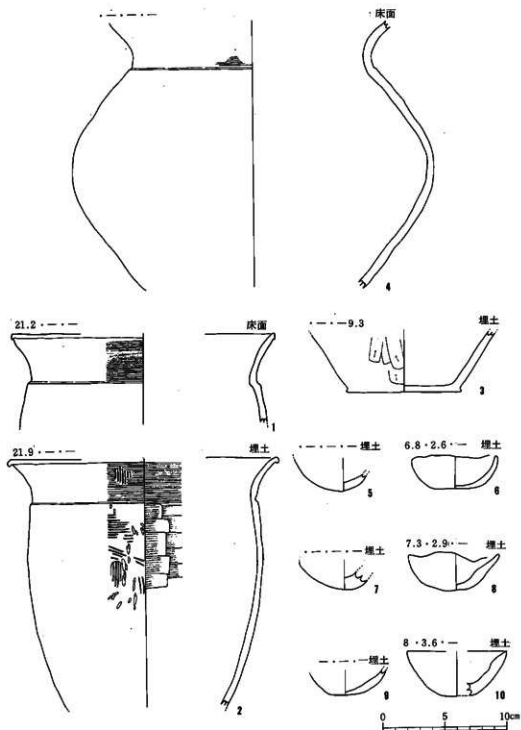
2. まとめ

稲村遺跡は北上川流域右岸の低位段丘の縁にある。今回の調査で検出された遺構は竪穴住居址3棟、掘立柱建物跡2棟、陥し穴状遺構3基、溝1条であり、住居址は奈良時代後半から平安時代初期に属するものである。奈良時代から平安時代の過渡期における集落の社会的変化の展開、遺跡の北約3.6kmにある徳丹城(813年)との関連性などの問題点が残っている。今後この地域における総合的な研究が望まれる。

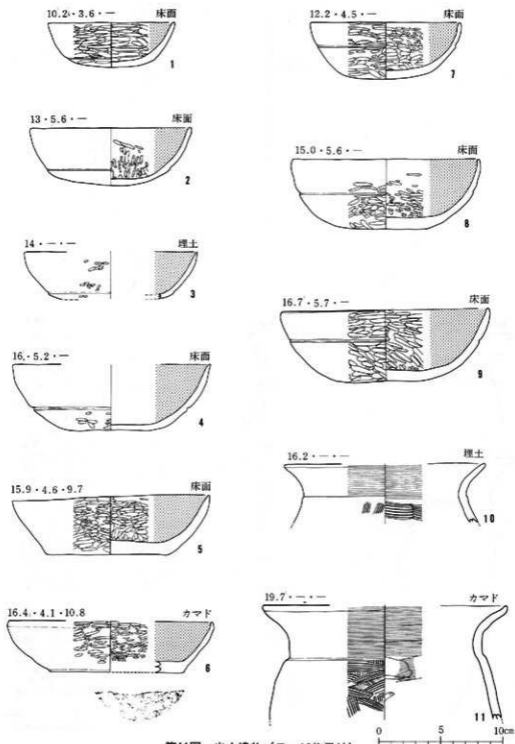
(高橋義介)



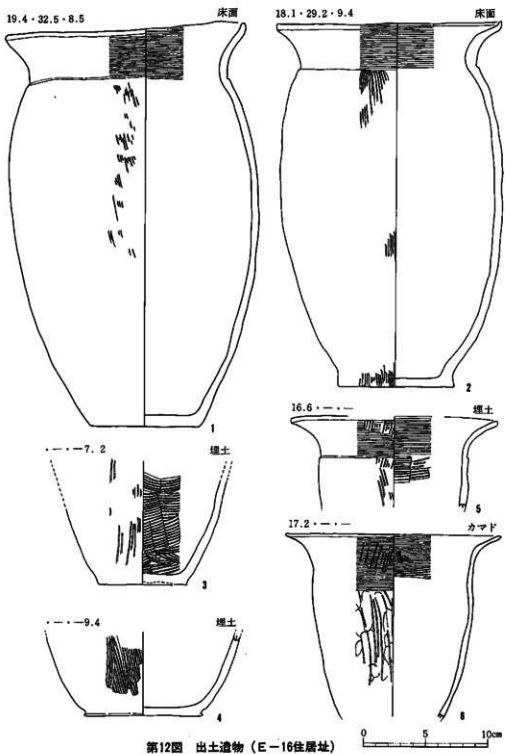
第9図 出土遺物 (B-23住居址)



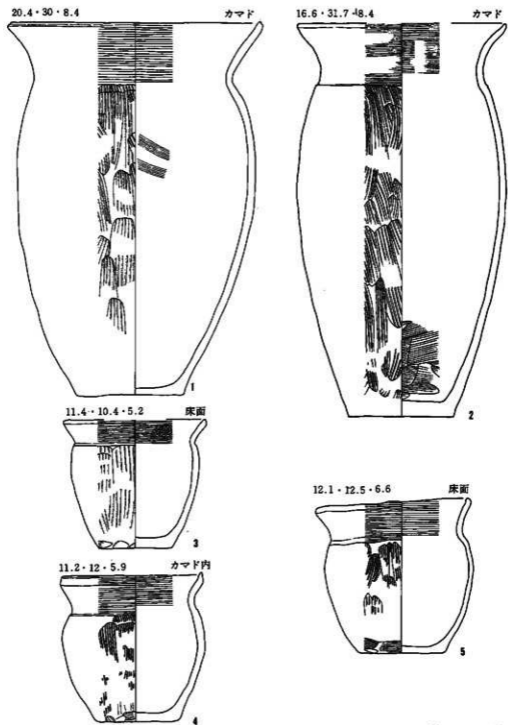
第10圖 出土遺物 (B-23住居址)



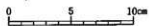
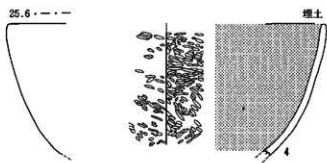
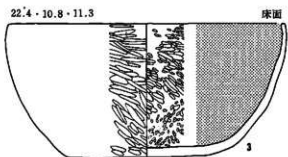
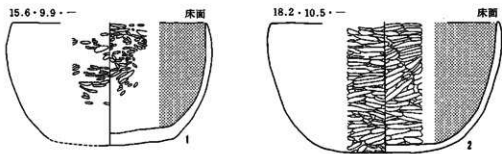
第11図 出土遺物 (E-16住居址)



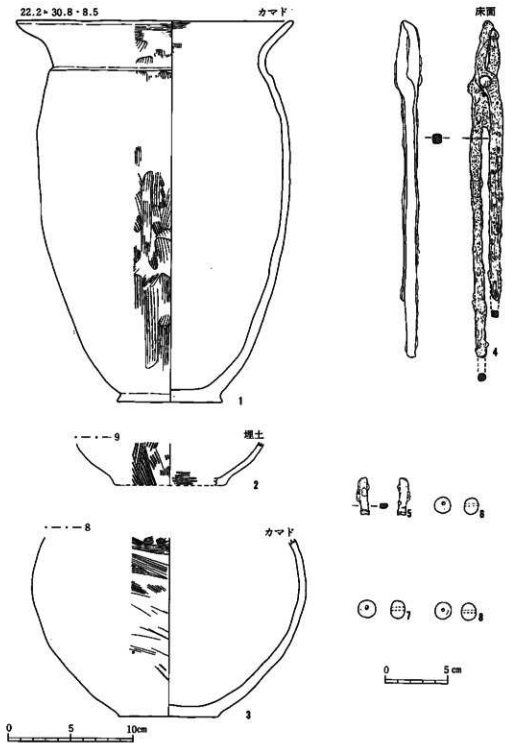
第12図 出土遺物 (E-16住居址)



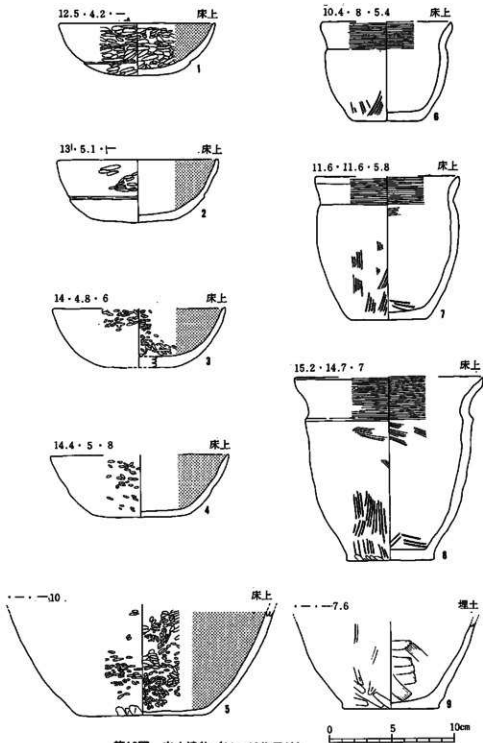
第13図 出土遺物 (E-16住居址)



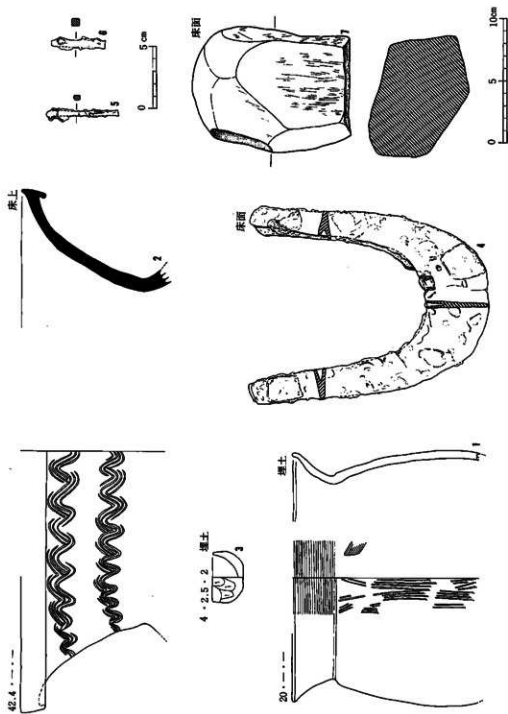
第14图 出土遗物 (E-16住居址)



第15図 出土遺物 (E-16住居址)



第16圖 出土遺物 (H-10住居址)



第17圖 出土遺物 (H-10住居址)

Ⅲ 中田遺跡

遺跡所在地 紫波郡紫波町高水寺字中田

調査期間 昭和53年6月1日～8月31日(概掘り)

昭和54年4月9日～6月30日(精査)

調査対象面積 2,700㎡

発掘面積 2,700㎡

1. 検出された遺構と発見遺物

(1) 竪穴住居址

A 区

A-1住居址

検出遺構 (第1図, 写真図版12a)

住居址の北西隅は調査区域外にある。北東隅はA-151溝跡により、南壁東側半分は最近掘られたピットにより破壊されている。そのため住居址の規模・形状についての詳細は不明であるが、残存する壁の輪郭線から、住居址は長軸3.2m土、短軸2.9m土の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈するものと思われる。カマドは、煙道の残存部から南壁中央部東寄りに設けられていると考えられる。

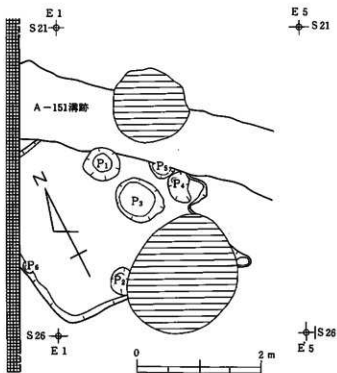
埋土は焼土粒、炭化物を包含している黒褐色土の単層で占められている。

床面はほぼ平坦でかたくしまっており、貼り床は施されていない。

柱穴は検出されていない。壁高は北壁で13cm土、東壁で10cm土、東南隅壁で16cm土を計る。

カマドは本体が最近掘られたピットにより破壊され、煙出し部と煙道の一部が残存するにすぎない。煙出し部は径20cm土、深さ7cm土の円形ピットである。煙道の長さは1.3m前後である。

住居址内からピットP₁(径57cm土・深さ21cm土)・P₂(径45cm土・深さ14cm土)・P₃(長軸径82cm土・深さ9cm土)・P₄(長軸径51cm土・深さ10cm土)・P₅(径43cm土・深さ6cm土)・P₆(長軸径20cm土・深さ3cm土)の6個が検出されている。



第1図 A-1住居址実測図

ビットP₁は中央部から北壁寄りに検出されている。埋土は上部が黒褐色土、下部が焼土粒、炭化物を包含している暗褐色土で構成されている。平面での形状は円形で断面形は摺鉢状を呈している。

ビットP₂は南壁中央部に検出されている。埋土はわずかに焼土粒を包含している黒褐色土で占められている。

ビットP₃は中央部より東寄りに検出されている。埋土は暗褐色土の単層でわずかに炭化物、焼土粒を包含している。浅皿状の断面形を示す円形ビットである。

ビットP₄・P₅は南東隅に検出されている。埋土は焼土塊、焼土粒を多く包含している暗褐色土で占められている。

ビットP₆は西壁中央部に検出されている。埋土は黒褐色土の単層で占められている。

ビットP₇～P₈は、検出状況から住居址に伴うものと考えられる。

この住居址は精査時に中央部から南西側に焼土を伴う炭化材が埋土下部から検出されたことから、焼失住居址の可能性を想定したが、材の量的なものと同様に焼土がごく一部に限られていることなどからその可能性は薄いと考えて、焼失住居址とはしなかった。

出土遺物（第13図1～4、写真図版20）

出土した遺物は土器だけである。埋土からのものがその大部分を占めるほか、P₃・P₄のビットから少量が出土した。器種は、土師器・須恵器とも環と甕が優占し、土師器高台付環と須恵器壺もあるものの僅少である。

土師器環 少量が出土したが、凶化できたものはない。回転糸切りののち調整が加えられるもの（CⅢ類）と回転糸切り無調整のもの（CⅣ類）とがある。

土師器高台付環 環部の小破片があり、内面がヘラミガキののち黒色されていること以外は詳細不明である。

土師器甕（第13図4） ロクロ不使用である（A類）。体部半ばが膨らみ、そこに最大径をもつ長胴形の形態を示す。口縁部は外反して短い。調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面が縦方向のヘラ削り、内面上半が横方向の刷毛目である。このほか、破片からみた数量では、ロクロ使用（B類）がA類に卓越する。

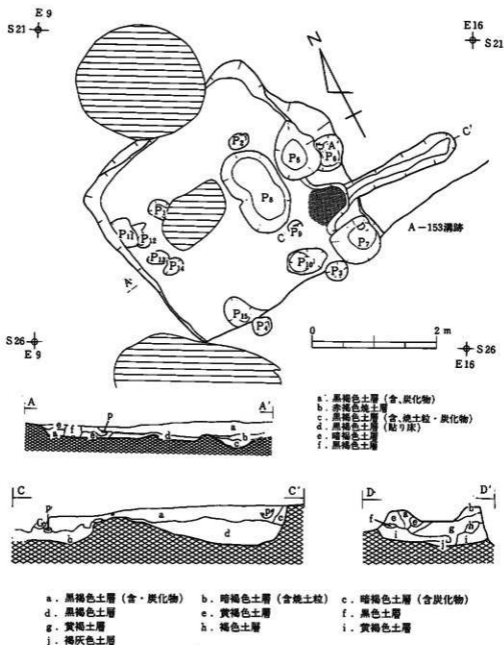
須恵器酸化炭焼成環（第13図1・2） いずれもロクロ成形で、回転糸切りののち手持ちヘラ削り調整が加えられる（DⅢ類）。1は体部下端に調整が加えられ、一部は体部にもおよぶ。2は体部下端だけが調整される。このほかにもDⅢ類と回転糸切り無調整のもの（DⅣ類）が出土している。

須恵器還元炭焼成環（第13図3） 回転糸切り無調整（EⅣ類）である。このほかにも少量のEⅣ類が出土した。

須恵器甕・須恵器壺 小破片だけであり、図化できたものはない。甕の体部破片は外面に平行叩き目文、内面にあて道具痕が残る。

A-2 住居址

検出遺構 (第2図, 写真図版12b)



第2図 A-2住居址実測図

住居址の南壁はすべてA-153溝跡により切られ、北壁の一部は最近掘られたピットにより破壊されている。残存する壁の輪郭線・柱穴配置などから、住居址は長軸3.9m±、短軸3.6m±の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈するものと思われる。カマドは東壁中央部南寄りに掛けられている。

埋土は大部分が炭化物・焼土粒を包含している黒褐色土で占められている。

床面中央部は1.5m±×1.8m±の範囲に貼り床（層厚8cm±）が施されている。貼り床は周囲の床面より一段高くシルト質黒色土でつくられている。床面はかたく一部に凹凸がみられる。

壁高は北壁で21cm±、東壁で26cm±、西壁で19cm±を計る。

柱穴はピットP₁（径32cm±・深さ48cm±）・P₂（径35cm±・深さ41cm±）・P₃（径35cm±・深さ36cm±）・P₄（径33cm±・深さ37cm±）の4個が検出されている。柱穴配置は4個1組の長方形を呈している。

カマドの袖部は、粒径20cm±大の流紋岩亜角礫を芯にしシルトで被覆してつくりだされている。袖部の幅は1.2m±を計る。燃焼部は最大径60cm±・深さ10cm±の浅皿形ピットである。煙道部は壁際で立ち上がりみせた後下方に傾斜しながら煙出し部に接続している。カマドのそばに検出されている5個の礫はカマドの構成礫の一部であると思われる。カマドの全長は2.4m±を計る。

カマドそばからピットP₅（最大径90cm±・深さ17cm±）・P₆（径55cm±・深さ4cm±）・P₇（最大径70cm±・深さ34cm±）の3個が検出されている。

ピットP₅の埋土は上部が炭化物・焼土粒をわずかに包含している暗赤褐色土、下部が焼土粒を多く包含している黒褐色土で構成されている。

ピットP₆の埋土は土器片を包含している黒褐色土で占められている。

ピットP₆～P₇は検出状況・埋土から住居址に伴うものと考えられる。

貼り床下からピットP₈（最大径140cm±・深さ18cm±）・P₉（径23cm±・深さ5cm±）・P₁₀（径52cm±・深さ17cm±）の3個が検出されている。

ピットP₈の埋土は上部が多量の黄褐色シルトのブロックを包含している黒色土、下部が少量の土器片を包含している黒褐色土で構成されている。

ピットP₉・P₁₀の埋土はフィールド・カードに記載されておらず不明である。

住居址西壁に検出されているピットR₁（径55cm±・深さ18cm±）・R₂（径39cm±・深さ25cm±）・R₃（径34cm±・深さ18cm±）・R₄（径35cm±・深さ17cm±）・R₅（推定径60cm±・深さ15cm±）は、住居址の埋土を切っていることから住居址よりも新しいものと思われる。

出土遺物（第13図5～8・第14図1～3、写真図版20）

出土した遺物は土器だけである。埋土を主として床直上やカマド・ピットなどからも出土し

たが小破片が多く、図示したのは煙出し部埋土とP₃・P₆のピットからの出土である。器種には、土師器と須恵器の坏と甕があるほか、須恵器器種不明の破片がある。

土師器坏（第13図5・6） いずれもロクロ成形で、内面はヘラミガキのち黒色処理される。5は体部下端から底部全面に手持ちヘラ削り調整が加えられるため、切離し技法は不明である（CV類）。6は回転未切り無調整である（CIV類）。このほかにはCⅢ類・CVI類の出土がある。

土師器甕（第13図8、第14図1・2） 第13図8はロクロ調整がおこなわれ、体部上半がわずかに膨らみ、そこに最大径をもつ。口縁部は外反して短く、口唇部が上方に若干挽きだされる。体部外面はロクロ痕が明瞭で、内面には刷毛目痕が部分的に残る（B₂類）。第14図1はロクロ不使用である。体部は膨らみをもたず、口縁部は外反して短い。調整は、口縁部が内外面とも横ナア、体部外面が縦方向のヘラ削り、内面が横方向のヘラナアである（A類）。2はロクロ成形である。体部下半～底部が残存し、体部外面は縦方向のヘラ削りが加えられ、底部はていねいに調整される（B₂類）。このほか、破片の数量からみると、B類がA類に卓越する。

須恵器酸化炭焼成坏（第13図7） 回転未切り無調整である（DIV類）。体部には明瞭なロクロ痕が残る。このほかにもDIV類の出土がある。

須恵器還元炭焼成坏 小破片だけであり、図化できたものはない。切離し技法が観察できる破片はEIV類である。

須恵器甕 体部小破片が少量出土したものの図化できたものはない。外面に平行叩き目文、内面にあて道具痕がみられる。

須恵器器種不明（第14図3） 形態的には小形の甕に類似する。しかし回転未切りのあと底部の大部分を占める意図的な穿孔がおこなわれており、器種不明とした。

B 区

B-1 住居址

検出遺構（第3・4図、写真図版13a・13b・13c）

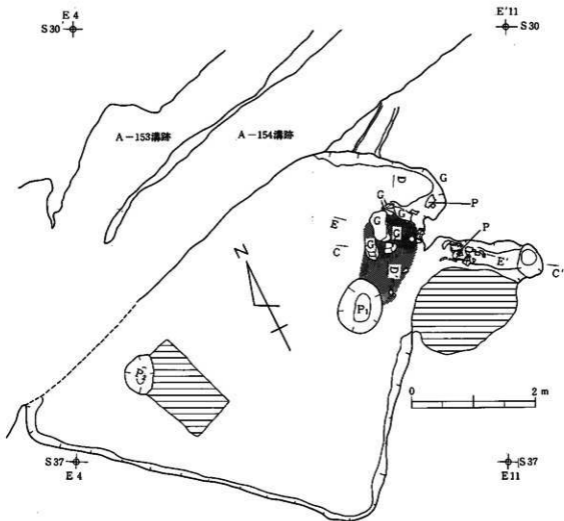
住居址の北壁西半分と西壁の大半は、A-153溝跡・A-154溝跡に切られわずかに北西隅が残存するにすぎない。カマドの南側と床面の一部は、最近掘られたピットによって破壊されている。残存する壁の輪郭線から、住居址は長軸5.9m±、短軸5.7m±の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈するものと思われる。カマドは位置をかえて2回構築されている。はじめにカマドは北壁中央部東寄り（1号カマド）につくられその後東壁中央部北寄り（2号カマド）に設けられている。

埋土は黒色土の単層で占められている。壁際に黄褐色シルトのブロックがみられる。

床面は平坦でかたくしまっている。貼り床は認められない。

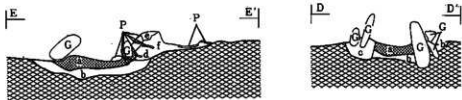
柱穴は検出されていない。壁高は北東隅壁で26cm土、東壁で22cm土、南壁で30cm土を計る。

北壁に設けられている1号カマドはA-154溝跡により煙出し部と煙道部の一部が破壊されて



- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層 (含焼土粒)
- c. 黒褐色土層 (含焼土粒)
- d. 明黄褐色土層 (カマド構築土)
- e. 黄褐色土層
- f. 暗褐色土層
- g. 暗褐色土層
- h. 明黄褐色土層
- i. 黒褐色土層 (含焼土粒・炭化物)

第3図 B-1住居址実測図(1)



- a. 赤褐色焼土層
- b. 暗褐色土層 (含焼土粒・カマド掘り方の埋土)
- c. 暗褐色土層
- d. 暗赤褐色土層 (含焼土塊)
- e. 黄褐色土層 (天井部の一部)
- f. 黒褐色土層

第4図 B-1住居址実測図(2)

いる。残存する煙道部は煙出し部に向かって上方にゆるやかに傾斜している。カマド本体はカマドをつくりかえる時に破壊されている。

東壁に設けられている2号カマドの袖部は礫を芯にしシルトで被覆してつくられている。礫は粒径20cm±~40cm±大の細長いもので、ほぼ直立または内側にやや傾けて埋められている。これらの礫の一部は燃焼部をとりかこむ形で二重に配置されている。天井部はシルトを主体にして構築されているが、一部に土師器の大形変が使用されている。燃焼部は平坦で下底部が火熱により赤色変化(層厚10cm±)を強く受けている。煙道部は壁際で大きく立ち上がった後、上方にゆるやかに傾斜しながら煙出し部に接続している。煙道の一部は土師器の大形変を合わせ口にしてつくられている。煙出し部は径40cm±・深さ25cm±の円形ピットである。カマドそばにある5個の礫は原位置をとどめているものではないが、カマドの構成礫の一部であると考えられる。カマドの全長は2.9m±を計る。

住居址内からピットP₁(径87cm±・深さ26cm±)・P₂(径62cm±・深さ19cm±)の2個が検出されている。

ピットP₁はカマド南寄りに検出されている。袖部からみられる黄褐色シルトの高まりがピットの上を一部分覆っている。埋土は少量の炭化物と土器片を多く包含している黒褐色土の単層で占められている。

ピットP₂は中央部西寄りに検出されている。ピットは最近掘られた穴で一部破壊されている。埋土は黒褐色土の単層で占められている。

ピットP₁・P₂は出土状況から住居址に伴うものと考えられる。

出土遺物(第14図4~13・第15図1~3・第16図1~3・写真図版21・22)

埋土から出土した遺物が大部分を占め、しかも土器だけである。カマドとその周辺、P₁のピ

ットからの出土土器に図化可能のものが多かった。器種には、土師器・須恵器の坏と甕のほか
に土師器高台付坏・須恵器壺がある。

土師器坏（第14図4・5） いずれもロクロ成形であり、内面はヘラミガキののち黒色処理
される。4は回転糸切り無調整（CⅣ類）だが、5は器面の磨耗のため切離し技法は不明であ
る。このほかにはCⅣ類とわずかのCⅢ類が出土した。

土師器高台付坏 小破片のため図化はできなかった。詳細は不明であるが、坏部は内面が黒
色処理され、「ハ」字状に裾が開く低い台部がつけられる。

土師器甕（第14図・第15図1～3・第16図1・2） 第14図13はロクロ不使用である。体
部上半がわずかに膨らみ、そこに最大径をもつ。口縁部は外反して短い。調整は、口縁部が内
外面とも横ナデ、体部は内外面の全面に刷毛目が加えられる（A類）。第15図1は第16図1と
ともに横位の合せ口の状態で運道部に使用されていた。体部半ばがわずかに膨らむ。口縁部は
屈曲して短く、口唇部が上方に若干挽きだされる。体部外面は縦方向のヘラ削り調整が著しい
（B₂類）。2もロクロ調整のもので、肩部がすばまり体部上半がわずかに膨らむ。調整は、体部
外面が縦方向のヘラ削り、内面が刷毛目である（B₂類）。第16図1・2はロクロ調整がおこなわ
れる。1は体部半ばがわずかに膨らむ、口縁部は屈曲して短い。調整は、体部外面が主に縦方
向のヘラ削り、内面がヘラナデである。2は体部に膨らみをもたず、口縁部は屈曲して短い。
体部外面には縦方向のヘラ削りが加えられる。いずれもB₂類である。3はロクロ成形の小形甕
（B₂類）である。体部にはほとんど膨らみをもたず、口縁部は外反して短く、口唇部が上方に挽
きだされる。このほか、破片からみた数量では、B類がA類に卓越する。

須恵器酸化炭焼成坏（第14図6） 器形はやや大形であり、口径に対する底径比は大きく器
高も高い。体部には明瞭なロクロ痕がみられ、回転糸切り無調整である（DⅣ類）。このほかの
底部が観察できる破片はすべてDⅣ類である。

須恵器還元炭焼成坏（第14図7～12） 底部を欠いて不明な8を除き、すべて回転糸切り無
調整である（EⅣ類）。器形にはばらつきがあり、12は器高が低いと、体部の外傾の度合い
が強い。このほかの底部が観察できる破片はすべてEⅣ類である。

須恵器甕 量的に少ないうえ小破片が主で、図化できたものはない。

須恵器壺（第15図3） 長頸壺の体部下半～底部の残存で、内外面ともロクロ痕がみられる
だけである。

B-2 住居址

検出遺構（第5図、写真図版14a・15a）

住居址は西壁南半分と北東隅から南西隅まで0.9m±～1.2m±の幅で溝状に床面下まで最近
の擾乱で破壊されている。残存する壁の輪郭線から、住居址は一辺4m±の規模をもち、正方

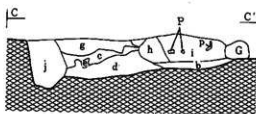
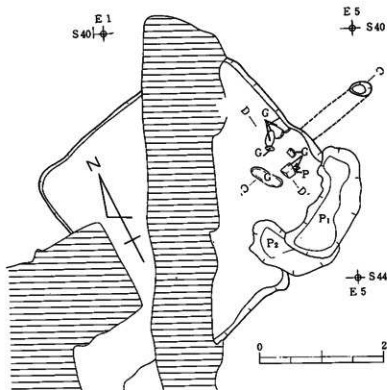
形の形状を呈するものと思われる。カマドは東壁中央部南寄りに設けられている。

埋土は炭化物・焼土粒をわずかに包含している黒色土の単層で占められている。

床面はかたく一部に凹凸がみられる。貼り床は施されていない。

柱穴は検出されていない。壁高は東壁で10cm±、南壁で12cm±、北西隅壁で8cm±を計る。

東壁に設けられているカマドの袖部は、粒径20cm±～50cm±大の粒紋岩亜角礫を主体にして構築されている。袖部幅は残存部から90cm±と推定される。燃焼部は最大径50cm±の浅皿形ピットである。ピットの下底部は火熱による赤色変化を強く受けている。カマドのそばにある粒径40cm±の亜角礫は、位置や出土状況からカマドの構成礫の1つであると思われる。煙道部はトンネル式のものである。煙道は壁際から下方にゆるやかに傾斜して煙出し部に接続している。煙出し部は最大径29cm±・深さ50cm±の円形ピットでやや東側に傾いている。



- a. 黒色土層
- b. 赤褐色焼土層
- c. 黒褐色土層 (含焼土粒)
- d. 暗褐色土層
- e. 黄褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層
- h. 暗赤褐色土層 (含焼土粒)
- i. 黒褐色土層
- j. 暗褐色土層

第5図 B-2住居址実測図

カマドの全長は1.9m土を計る。

住居址の東南隅に長軸径95cm土～110cm土・深さ13cm土～16cm土を計る不整ピットP₁・P₂が検出されている。ピットP₁の埋土は土器片・焼土粒を包含している黒褐色土の単層で占められている。埋土上部にある焼土粒はカマドまで帯状に続いている。ピットP₂の埋土は褐色土の単層で少量の炭化物と多くの焼土粒を包含している。検出状況・埋土などからピットP₁・P₂は住居址に伴うものと考えられる。

住居址と他の遺構との重複関係はみられない。

出土遺物 (第17図～第19図, 写真図版22・23)

鉄製品1点をのぞいた出土遺物のすべてが土器である。埋土からの出土遺物が量的には主体を占めるが、図化できた資料の大部分は、カマドとその周辺、P₁・P₂のピット、煙出し部から出土した。器種には、土師器・須恵器とも坏と甕が優占し、他に土師器鉢がある。

土師器坏 (第17図1～3) いずれもロクロ成形で、内面はヘラミガキのち黒色処理される。回転糸切り無調整の坏である (CⅣ類)。このほかに底部が観察できる破片では、CⅣ類に少量のCⅢ類が混じる。

土師器甕 (第17図13・第18図・第19図1・2) 第17図13だけがロクロ不使用で、他はすべてロクロ使用である。13は体部上半がわずかに膨らみ、肩部には段が形成される。口縁部はゆるやかに外反し、内外面とも横ナデされる。体部の調整は、内外面の全面に刷毛目に加えらる (A類)。第18図1と3はロクロ調整である。体部上半がわずかに膨らみ、そこに最大径をもつ。1では肩部がせばまる。口縁部はゆるやかに外反して短い。体部外面に加えらる調整はヘラ削りである (B₂類)。4はロクロ成形の小形甕である (B₁類)。体部は膨らみをもたず、口縁部は外反して短い。口唇部が上方に若干挽きだされる。調整は、外面にヘラ削り、内面にヘラナデが部分的に加えらる。第19図1と2も小形甕である (B₁類)。1は上述の第18図4に形態・調整技法が類似する。2は体部下半～底部の残存で、回転糸切り痕をもつ。このほかに、破片からみた数量では、B類がA類に卓越する。

土師器鉢 (第17図12) ロクロ成形の小形の鉢である。器高よりも口径の値が大きく、浅い。口縁部はわずかに外反して短い。回転糸切りののち底部下端にだけ手持ちヘラ削り調整が加えられる。

須恵器酸化炭焼成坏 (第17図4～11) 4～6は手持ちヘラ削り調整が加えられる。4・5は体部下端～底部全面が調整され、4には回転糸切り痕がかすかに観察できる (DⅢ類)。5はDⅣ類である。6は回転糸切りののち体部下端だけが調整される (DⅢ類)。7～11は回転糸切り無調整である (DⅣ類)。9は器形が大形で口径に対する底径比が大きく、10は他のものに比べて器高が低い特徴がある。このほかに底部が観察できる破片は、すべてDⅣ類である。

須恵器還元炭焼成坏 小破片だけの出土であり、図化できたものはない。観察した底部破片は、すべてEⅣ類である。

須恵器甕(第19図3・4) 3は大ききで大別すれば小形に属するであろう。肩部から体部にかけては急激に膨らむ。口縁部はわずかに外反して立ちあがり、口唇部は下方に挽きだされるため、稜線が形成される。口縁部は外面、体部は内外面に平行叩き目文がみられる。このほかに、体部の破片が出土した。4は甕の体部下半～底部にかけての残存と考えられる。外面はヘラ削り、内面はナデによる調整が著しい。

鉄製品(第19図5) 刀子である。現存長13.5cmで刃部の多くと基部を欠く。刃部最大幅は1.7cmで、両は背側、刃部とも段を有するが、刃部側の段はゆるい。基部は現存長8.5cmと長く、幅0.8cm、厚さ1.3cmである。基部には木質が残片的に付着する。

B-3 住居址

検出遺構(第6図、写真図版14b)

住居址の北西隅は最近掘られたピットにより破壊されている。残存する壁の輪郭線から、住居址の形状は東壁を下底とするほぼ台形を呈すると思われる。規模は長軸4.7m±、短軸4.1m±～4.6m±(平均4.4m±)を計る。カマドは東壁中央部北寄りに設けられている。

埋土は多くの焼土粒を下部に包含している黒色土の単層で占められている。

南東隅を除く住居址東側半分に貼り床(層厚平均6cm±)が施されている。貼り床の面は平坦でかたくしまっている。そのほかの床面はやわらかく凹凸がみられる。

柱穴は検出されていない。壁高は東壁で11cm±、南壁で11cm±、西壁で4cm±、北壁で17cm±を計る。

カマドの袖部はシルトで構築されている。礫・土器など袖の芯となるものは検出されていない。残存部から袖部幅は80cm±と推定される。燃焼部は平坦で下底部が火熱により赤色変化(層厚3cm±)を受けている。壁近くの煙道部は煙道が検出面より高いために破壊されている。残存部から煙道部は壁際で立ち上がり上方にゆるく傾斜し、煙道中央部から下方に傾斜しながら煙出し部に接続するものと推定される。煙出し部は径65cm±・深さ23cm±の浅皿形ピットである。カマドの全長は2.9m±を計る。

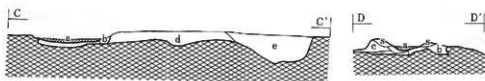
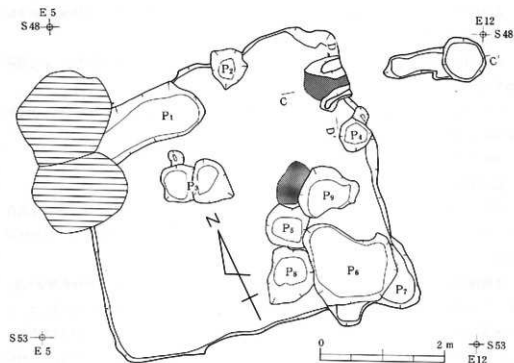
住居址床面上からピットP₁(最大径170cm±・深さ25cm±)・P₂(径54cm±・深さ5cm±)・P₃(最大径102cm±・深さ17cm±)・P₄(径51cm±・深さ16cm±)・P₅(径64cm±・深さ10cm±)・P₆(最大径160cm±・深さ26cm±)・P₇(最大径92cm±・深さ16cm±)の7個が検出されている。

ピットP₁は北東隅に検出されている。埋土は上部が土器片を多く包含している黒色土、下部が多くの焼土粒を包含している暗褐色土で構成されている。土器片は床面より上から連続している。

ビットP₂は北壁中央部に検出されている。埋土は焼土粒・焼土塊を多く包含している暗褐色土で占められている。

ビットP₃はほぼ中央部に検出されている。埋土はビットP₂と同じく焼土粒・焼土塊を多く包含している暗褐色土で占められている。

ビットP₄はカマド南寄りに検出されている。埋土は焼土粒を多く包含する暗褐色土で占められている。



- a. 赤褐色焼土層 b. 黒褐色土層(カマド廻り方の埋土) c. 黒褐色土層
 d. 褐色土層(含焼土粒) e. 暗褐色土層(含焼土塊)

第6図 B-3住居址実測図

ピットP₅は中央部南東寄りに検出されている。埋土は焼土塊・土器片を多く包含する暗赤褐色土で占められている。

ピットP₆は南東隅近くで検出されている。埋土は上部が黒色土で、下部が焼土粒・焼土塊を多く包含している黒褐色土で構成されている。

ピットP₇は南東隅で検出されている。埋土は上部が黒色土で、下部が多量の土器片と焼土粒・焼土塊を包含している黒褐色土で構成されている。

ピットP₁～P₇は検出状況から住居地に伴うものと考えられる。

貼り床下からピットP₈(最大径90cm±・深さ8cm±)・P₉(最大径97cm±・深さ15cm±)の2個が検出されている。

ピットP₈は中央部南寄りに検出されている。埋土は焼土粒・焼土塊を多く包含している黒褐色土で占められている。

ピットP₉は中央部東寄りに検出されている。埋土は上部が黒色土で、下部が焼土粒と多くの土器片を包含している黒褐色土で構成されている。

中央部東寄りに現地性焼土が検出されている。規模は長軸径74cm±を計る。

出土遺物(第20図・第21図1～3, 写真図版23・24)

出土した遺物は土器だけである。埋土からのものが主体を占めるが、埋土下部・床直上のほかP₁やP₉などのピットからの出土も多い。器種には、土師器に杯・甕、須恵器に杯・高台付杯がある。

土師器杯(第20図1～6) すべてロクロ成形で、内面はヘラミガキのち黒色処理される。1～3は回転糸切りのち手持ちヘラ削り調整が加えられる(CⅢ類)。調整される部位は、1が体部下端～底部全面、2が体部下端、3が底部外周である。3は口径に対する底径比が大きく、器高も低いのが特徴である。4～6は回転糸切り無調整である(CⅣ類)。このほかに底部が観察できる破片では、CⅢ類がCⅣ類よりも多い。

土師器甕(第21図1～3) 1はロクロ不使用である。体部には膨らみをもたず、口縁部は外反して短い。調整は、口縁部の内外面が横ナデ、体部外面が縦方向のヘラ削り、内面はヘラナデである(A類)。2はロクロ不使用である。体部半ばがわずかに膨らみ、外反する口縁部は短い。調整は、外面が縦方向のヘラ削り、内面がヘラナデである(A類)。3はロクロ成形の小形の甕である(B₁類)。体部はほとんど膨らみをもたず、口縁部は外反して短い。このほかの破片からみた数量では、B類がA類に卓越する。

須恵器酸化炭焼成杯(第20図7～15) すべて回転糸切り無調整(DⅣ類)であり、7だけが手持ちヘラ削り調整が加えられる(DⅢ類)。7は底部の磨耗が著しく、体部下端に加えられた調整が底部までおよぶものかどうなのかは不明である。このほかに底部が観察できた破片では、

DⅣ類が多く、少量のDⅢ類・DⅤ類が混じる。

須恵器酸化炭焼成高台付坏（第20図16・17）16は坏部の体部の残存である。体部は口縁部に向い直線的に外傾する。17は坏部の一部と高台部が残る。高台部は高さ2.1cmあり、裾が開く。

須恵器還元炭焼成坏（第20図18）回転糸切り無調整である（EⅣ類）。出土数量が少なく、このほかにEⅣⅢが1点知られるだけである。

B-4 住居址

検出遺構（第7・8図、写真図版15bcde・16ab）

住居址は長軸5.1m±、短軸4.8m±の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈している。カマドは東壁中央部南寄りに設けられている。

埋土は上部が黒褐色土で、下部が焼土粒・炭化物を包含する暗褐色土で構成されている。

住居址中央部と周囲に貼り床（層厚平均5cm±）が施されている。周囲の貼り床は掘り方（幅90cm±～120cm±・深さ38cm±～54cm±）を閉覆する形でシルト質黒色土でつくられている。掘り方の埋土は黄褐色シルトのブロックを包含している黒色土で占められている。断面形は「U」字形を呈し底面には凹凸が多くみられる。床面は周辺部に比べて中央部が高くなっている。全体的に床面はかたくしまっている。

柱穴は検出されていない。壁高は東壁で39cm±、南壁で35cm±、西壁で34cm±、北壁で37cm±を計る。

カマドの袖部は土師器の大形甕を倒立させて芯にしシルトで被覆して構築されている。左袖の甕の内部に先形の土師器坏が置かれている。さらに甕の隣りには倒立した土師器の小形鉢が配置されている。袖部の幅は1.2m±を計る。最初煙道部はトンネル式のものを使用し、その後上部に半地下式の煙道がつくられている。残存部からトンネル式の煙道部は、壁際でやや立ち上がりみをみせた後大きく下方に傾斜しながら煙出し部に接続している。煙出し部は径37cm±・深さ92cm±の円柱形ピットである。残存部から、カマドの全長は2.5m±と推定される。つくりかえられた半地下式の煙道部は、壁際で立ち上がりそのまま上方に傾斜しながら検出面に達している。トンネル式の煙道部を切った部分にシルトを貼って煙道がつくられている。カマドの全長は1.6m±を計る。

住居址からピットP₁（径70cm±・深さ19cm±）・P₂（径58cm±・深さ21cm±）・P₃（最大径110cm±・深さ27cm±）の3個が検出されている。

ピットP₁はカマド北寄りに検出されている。埋土は多くの焼土粒と炭化物を包含している暗赤褐色土で占められている。断面形が浅皿状の円形ピットである。

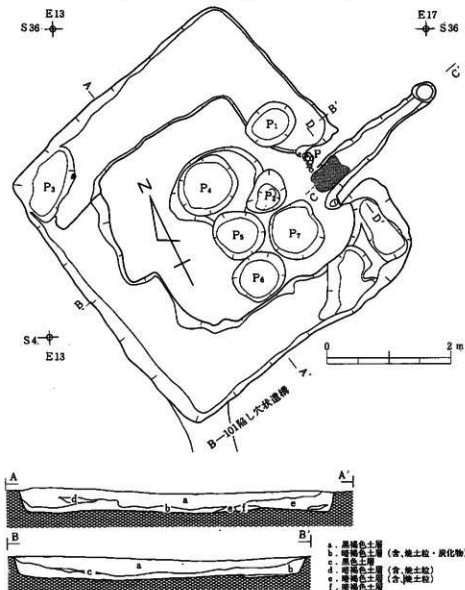
ピットP₂は中央部東寄りに検出されている。埋土は黒色土の単層で占められている。断面形

は摺鉢状を示している。

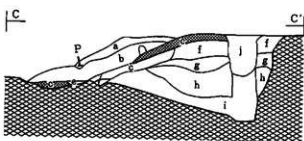
ピットP₃は北東隅に検出されている。上部は暗褐色土で、下部が黄褐色シルトを斑状に包含している黒褐色土で構成されている。

検出状況・埋土から、ピットP₁・P₂・P₃は住居地に伴うものと考えられる。

貼り床下からピットP₄(最大径136cm・深さ9cm土)・P₅(径76cm土・深さ16cm土)・P₆(径89cm土・深さ16cm土)・P₇(径84cm土・深さ9cm土)の4個が検出されている。



第7図 B-4住居址実測図



- | | | |
|-----------------|-----------------|----------|
| a. 黒色土層 (含焼土粒) | b. 暗褐色土層 (含焼土粒) | c. 焼土 |
| d. 黒褐色土層 | e. 黒褐色土層 (含焼土粒) | f. 黒褐色土層 |
| g. 黒褐色土層 | h. 黄褐色土層 | i. 黒色土層 |
| j. 赤褐色土層 (含焼土塊) | k. 黄褐色土層 (含焼土塊) | |

第8図 B-4住居址実測図(2)

ピットP₄は中央部に検出されている。埋土は上部が黒色土で、下部が多量の焼土粒・焼土塊を包含している赤褐色土で構成されている。

ピットP₅は中央部南寄りに検出されている。埋土は上部が多く土器片・焼土粒を包含している暗褐色土で、下部が焼土粒をわずかに包含している黒色土で構成されている。

ピットP₆はピットP₅の南寄りに接する形で検出されている。埋土は炭化物と多量の焼土粒・焼土塊を包含している赤褐色土で占められている。

ピットP₇はピットP₆の南東寄りに検出されている。埋土は最上部に焼土塊を多く包含している黒褐色土で占められている。断面形が浅皿状の円形ピットである。

住居址はB-101陥し穴状遺構の北側を切っている。

出土遺物 (第21図4～8・第22図・第23図1; 写真図版24・25)

土器以外の遺物は出土していない。埋土からのものが大部分を占め、カマド・掘り方埋土・P₁・P₂・P₃・P₇などのピットからも出土した。特に、カマドの袖部では土師器甕・土師器鉢(第21図8)・須恵器酸化炭焼成坏(第21図4)・須恵器還元炭焼成坏(第21図7)が芯材に使用され、良好な資料となっている。器種には、土師器・須恵器の坏と甕のほか、土師器鉢がある。

土師器坏 少量が出土しただけで、しかも小破片のため詳細は不明である。

土師器甕 (第22図, 第23図1) 第22図1～3はロクロ不使用である(A類)。1は体部にほとんど膨らみをもたず、口縁部は外反して短い。調整は、口縁部が内外面とも口唇部に近い部分に横ナデ、体部外面に叩き目、内面にヘズナデが加えられる。2は肩部がすばまって段をもち、肩部から体部へかけての部分が大きく膨らむ。口縁部は外反してやや長い。調整は、口縁部外面が刷毛目のあとに横ナデ、肩部にも刷毛目痕が若干残るが、それより下方の体部が縦方向のへう割り、内面が口縁部・体部ともに刷毛目である。3は肩部がすばまって段をもち、体部上半が大きく膨らんでそこに最大径をもつ。口縁部は外反してやや長い。調整は、口縁部外

面が横ナデ、肩部には刷毛目痕が若干残るが、それより下方の体部が縦方向のヘラ削り、内面が口縁部・体部ともに刷毛目である。第23図1はロクロ調整された小形の甕である(B₁類)。肩部がいくぶんすばまり、体部上半がわずかに膨らむ。口縁部は外反して長く、口唇部が上方に若干挽きだされる。体部外面にはヘラ削りが加えられる。このほかの破片からみた数量では、A類がB類をわずかに越える。

土師器鉢(第21図8) 小形の完形品で、ロクロ不使用である。器高よりも口径の値が大きい。肩部には段が形成され、口縁部はゆるやかに外反して長い。調整は内外面とも刷毛目であり、外面は体部、内面は口縁部から体部上半にかけてそれが著しい。

須恵器酸化炎焼成坏(第21図4) 回転系切りののち底部外周の一部が手持ちヘラ削り調整される。器高が高く、体部は底部から内弯して立ちあがり口縁部へ向う。このほかには小破片がわずかに出土しているだけで、詳細は不明である。

須恵器還元炎焼成坏(第21図5~7) 5はヘラ切り無調整である(EⅡ類)。口径に対する底径比が非常に大きく、器高が低いために体部の外傾度が小さい器形上の特徴をもつ。6は色調が浅黄橙~橙色を示す焼き損じ品である。ヘラ切りで体部下端に手持ちヘラ削り調整が加えられ(EⅠ類)、調整は底部にも一部およぶようであるが、残存部分が少なく詳細は不明である。体部は底部から口縁部へ直線的に外傾してゆく。7はヘラ切り無調整である(EⅡ類)。口径と比較して大きめの底部をもつのが特徴的である。このほかに観察できた破片では、EⅠ類・EⅡ類・EⅣ類がある。

B-5住居址

検出遺構(第9図, 写真図版17a)

住居址の南東隅は調査区域外にある。西側半分は床面下まで木根による擾乱を受けている。検出された壁の輪郭線から、住居址は長軸4.8m±、短軸4.7m±の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈していると思われる。

埋土は炭化物・焼土粒をわずかに包含している黒褐色土の単層で占められている。

住居址の中央部から東側にシルト質黒色土で貼り床(平均層厚7cm±)が施されている。床面は全体的にかたくしまっている。床面の一部に凹凸がみられる。

柱穴は検出されていない。壁高は東壁で16cm±、南壁で31cm±、西壁で7cm±、北壁で17cm±を計る。

住居址中央部南東寄りに現地性焼土が検出されている。焼土は、層厚12cm±を計りさらに調査区域外へのびている。検出状況・位置から、焼土はカマドの燃焼部の一部と考えられる。従って、カマドは東壁中央部南寄りに設けられているものと推定される。

住居址からピットP₁(径61cm±・深さ10cm±)・P₂(径25cm±・深さ8cm±)・P₃(径41cm±・

深さ13cm土)・P₄(径44cm土・深さ21cm土)・P₅(径25cm土・深さ8cm土)の5個が検出されている。

ビットP₁は南壁中央部に検出されている。埋土は多量の焼土粒を包含する暗褐色土で占められている。検出状況から、ビットP₁は住居址に伴うものと考えられる。

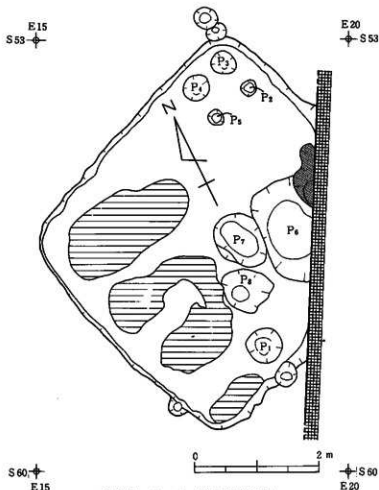
ビットP₂~P₃は北東隅に検出されている。

ビットP₁の埋土は焼土粒を僅かに包含している暗褐色土で占められている。ビットP₂~P₃の埋土は黒褐色土で占められている。ビットP₂~P₃が住居址に伴うかどうかは不明である。

貼り床下からビットP₄(最大径166cm土・深さ12cm土)・P₇(径97cm土・深さ9cm土)・P₈(径81cm土・深さ3cm土)の3個が検出されている。

ビットP₆の一部は調査区域外にかかっている。埋土は黒色土のブロックを包含している汚れ黄褐色土で占められている。

ビットP₇・P₈は中央部に検出されている。



第9図 B-5 住居址実測図

両ビットとも埋土は炭化物・焼土粒をわずかに包含している黒褐色土で占められる。

出土遺物 (第23図2~7, 写真図版25)

鉄製品1点をのぞいた遺物はすべて土器だけである。埋土出土のものが主体を占め、床面やP₄・P₇などのビットからは少量が出土したにすぎない。器種には、土師器と須恵器の坏と甕の

ほか、土師器埴・須恵器壺がある。

土師器坏 少量が出土しただけで、しかも小破片のため詳細は不明である。

土師器甕(第23図6) ロクロ調整の甕である(B₂類)。肩部がいくぶんすぼまり、体部は半ばがわずかに膨らむ。口縁部は外反して短い。体部外面には縦方向のヘラ削り調整が加えられる。このほかに破片からみた数量では、B類がA類に卓越する。

土師器埴(第23図5) 体部は底部から大きく開いて直線的に外傾し、口縁部は屈曲して口唇部が上方に若干挽きだされる。体部上半はロクロ調整されるが、下半は叩きしめたと縦方向にヘラ削りされ、一部に叩き目痕が残る。内面は上半にわずかにロクロ調整痕がみられる。

須恵器酸化炭焼成坏(第23図2・3) 2はヘラ切りののち底部全面に手持ちヘラ削り調整が加えられる(D I類)。3はヘラ切り無調整である(D II類)。2点は、口径に比べて底径が大きい器形上の特徴は共通する。このほかにも少量の小破片が出土したが、詳細は不明。

須恵器還元炭焼成坏(第23図4) 回転糸切り無調整である(E IV類)。このほかにも少量の小破片が出土したが、詳細は不明である。

須恵器甕・須恵器壺 いずれも体部小破片で、しかも少量である。

鉄製品(第23図7) 刀子である。現存長12.1cmで刃部を一部欠く。刃部最大幅1.2cm・背部の厚さ0.3cmである。基部は完全に残り、幅は0.9cmで、先端が徐々にせまくなる。

(2) ビット

A-51ビット(第10図a, 写真図版17b)

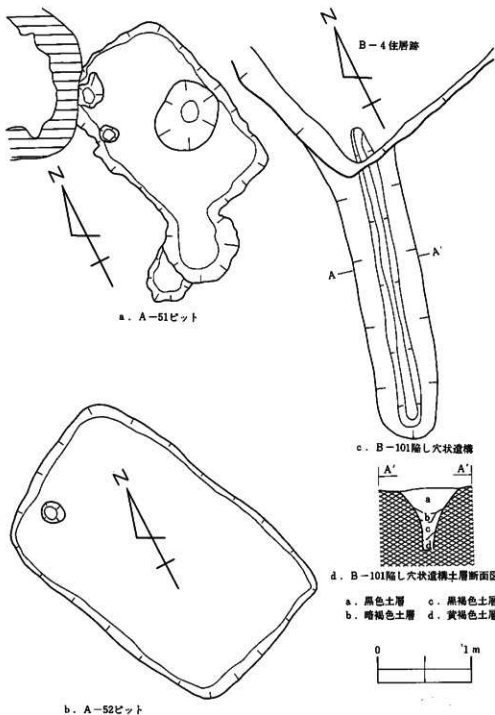
ビットの北東隅は最近掘られた溝状のビットで破壊されている。ビットは南東隅に円形ビット状の張り出しをもつ長方形の形状を呈している。規模は長軸2.1m±、短軸1.1m±を計る。壁高は東壁で9cm±、南壁で20cm±、西壁で13cm±、北壁で6cm±を計る。埋土は焼土粒をわずかに包含している黒色土の単層で占められている。底面は凹凸がはげしく全体に北側に傾斜している。中央部北寄りに浅皿形ビットP₁(径74cm±・深さ9cm±)が検出されている。ビットP₁の埋土は焼土粒・土器片を包含している黒色土で占められている。検出状況・埋土から、本遺構に伴うものと考えられる。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片だけであり、詳細は不明である。

A-52ビット

遺構(第10図b, 写真図版18a)

ビットは長軸3.2m±、短軸2.0m±の規模をもち、ほぼ長方形の形状を呈している。壁高は東壁で12cm±、南壁で13cm±、西壁で17cm±、北壁で12cm±を計る。埋土は黄褐色シルトを斑状



第10図 ビット・陥し穴状遺構実測図

に包含している黒褐色土の単層で占められている。ピット北寄りに小ピット(径26cm±・深さ6cm±)が検出されている。本遺構に伴うかどうかは不明である。

出土遺物(第23図8)

図化できたのは1点だけである。8は須恵器還元炎焼成の坏で、回転糸切り無調整である(EⅣ類)。このほかには、埋土から須恵器酸化炎焼成坏や土師器甕の破片が少量出土した。

(3) 陥し穴状遺構

B-101陥し穴状遺構(第10図cd, 写真図版18b)

北側はB-4住居址に上部を切られている。残存部から遺構は長軸3.5m±、短軸70cm±、深さ65cm±の規模をもち、細長い溝状の平面形を呈していると思われる。断面形はV字形である。埋土は最下部に黄褐色土がみられるが、大部分は黒色土~暗褐色土で占められている。埋土から出土遺物はなく遺構の時期は不明である。

(4) 溝 跡

A-151溝跡(第11図ab)

北西-南東方向に走るこの溝跡は、平均して上幅105cm±・下幅80cm±・深さ25cm±を計り両端が調査区域外へと延びている。断面形は「U」字形を呈している。底面はかたく凹凸がみられる。検出されている部分の溝跡の長さは21m±を計る。埋土は土器片をわずかに包含している黒色土で占められている。本溝跡はA-1住居址、A-2住居址を切り、A-152溝跡、A-153溝跡、A-155溝跡に切られている。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

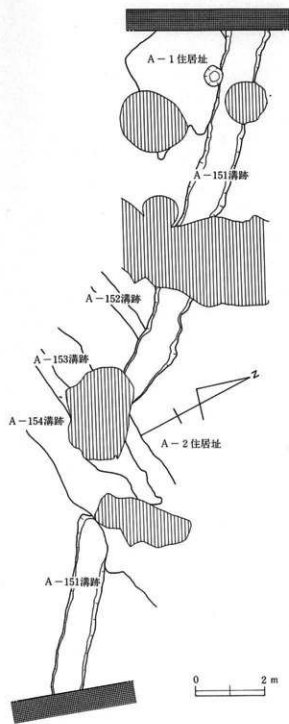
A-152溝跡(第11図b, 写真図版19a)

東西に走るこの溝跡は、平均して上幅55cm±・下幅37cm±・深さ13cm±を計る。西端は調査区域外へ延び、東端はA-151溝跡と重複する部分できれている。断面形はゆるい「U」字形を呈している。底面に大小の窪みが多くみられる。埋土は灰褐色土で占められている。最下部に砂質灰褐色土がみられる。本溝跡はA-151溝跡を切っている。

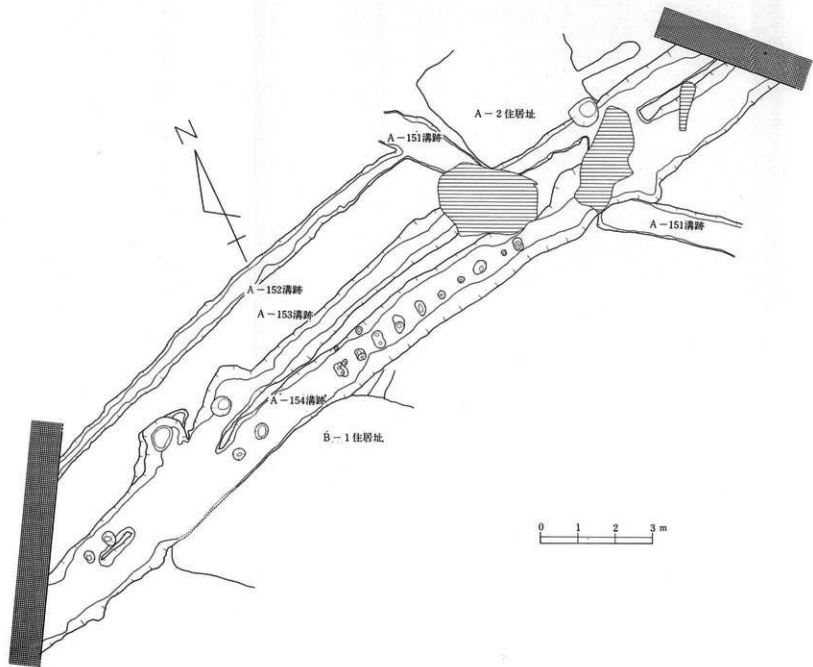
出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

A-153溝跡(第11図b, 写真図版19a)

東西方向に走るこの溝跡は、平均して上幅110cm±・下幅62cm±・深さ35cm±を計り、西端が調査を域外へと延びている。断面形は「U」字形を呈している。底面はかたく全体に凹凸がみ



a. A-151 溝跡



b. A-151・152・153・154 溝跡

られる。埋土は小礫・土器片を包含している黒色土の単層で占められている。特にB-1住居址と重複する部分から土器片が多く出土している。検出されている部分の溝の長さは22.6m土を計る。本溝跡はA-2住居址、B-1住居址、A-151溝跡を切り、A-154溝跡に切られている。

出土遺物には土師器・須恵器がある。いずれも小破片で図化できたものはない。器種は、土師器が甕・甕、須恵器が甕・壺・酸化炭焼成と還元炭焼成の坏である。

A-154 溝跡

検出遺構（第11図b, 写真図版19a）

A-153溝跡と並行して東西に走るこの溝跡は、平均して上幅135cm土・下幅68cm土・深さ36cm土を計り、両端が調査区域外に延びている。断面形はゆるい「U」字形を呈している。底面にやや凹凸がみられる。底面から12個の柱穴状ピットが検出されている。ピットの規模は、径17cm土～30cm土・深さ10cm土～27cm土を計る。そのうち10個の柱穴状ピットが西側に集中して、50cm土～75cm土の間隔で一列に並んでいる。埋土は黒褐色土の単層で占められている。B-1住居址と重複する部分から土師器片が出土している。検出されている部分の溝跡の長さは24.2m土を計る。本溝跡はB-1住居址、A-151溝跡、A-153溝跡を切っている。

出土遺物（第23図9）

図示したもの以外は、土器の小破片が少量出土したにすぎない。9はロクロ成形の土師器坏で、内面はヘラミガキのち黒色処理される。回転糸切りであるが、体部下端から底部にかけては磨耗が著しく、調整の有無は確認できない。

2. まとめ

遺跡は、北が五内川、東が北上川の沖積地に面した都南段丘の段丘崖付近に立地している。

調査は、遺跡を約20m幅で南北に縦断する範囲に限定されておこなわれた。その結果、遺跡の全容を知るにはほど遠いものの、当地域における主に平安時代の様相を部分的ながら明らかにできる資料を得ることができた。

検出された遺構は竪穴住居址7棟・ピット2基・陥し穴状遺構1基・溝跡4条である。

陥し穴状遺構は1基と少ないうえに出土遺物もなく、時期や機能を判断する資料性に欠ける。しかし主に県内各地の例を参考に、縄文時代に帰属し、動物捕獲用の「陥し穴」の機能をもつものと考えられる。五内川をはさんだ対岸の掘村遺跡も都南段丘に立地し、3基の「陥し穴状遺構」が検出された。本遺跡の例はそれとの関連において理解され、この付近は、縄文時代のある時期に狩猟場として機能していたことが考えられるであろう。

竪穴住居址はいずれも平安時代に属する。7棟のうち4棟は、須恵器の坏を中心とした土器群の様相から、時間的に推移する3期に区分される。先行する第Ⅰ期は平安時代初期に考えることができる。しかし第Ⅱ期・第Ⅲ期を、平安時代の具体的な時期に位置づけることはできなかった。

ピットは、埋土や出土遺物からは平安時代に属することが推定できるものの、性格は不明である。

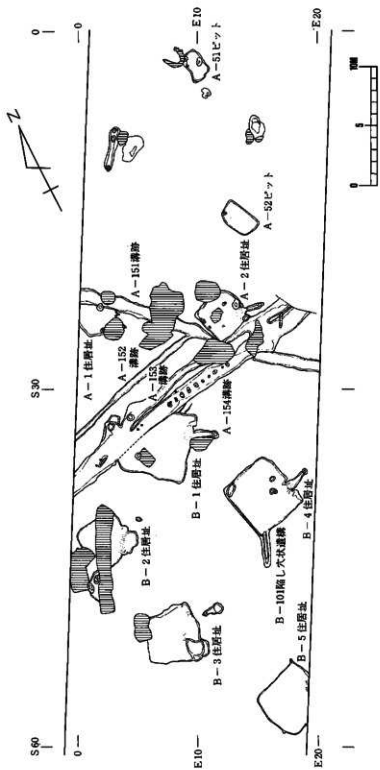
4条が検出された溝跡のなかで、A-153・A-154溝跡は第Ⅲ期に属する住居址と重複し、それを切っている。したがって、今回検出されたいずれの住居址よりも新しいことがわかる。他の溝跡の場合にも住居址と重複するときはそれを切っており、平安時代集落との関連は薄いと考えられる。また、A-154溝は溝底に杭穴状のピットが規則的に配列する部分があり、何らかの柵列跡であった可能性が指摘できよう。

遺物はほとんどが土師器と須恵器であり、平安時代に属するものだけである。須恵器の坏・高台付坏には従来の還元炎焼成のものほかに酸化炎焼成のものが識別され、須恵器に2型の存在を認める作業仮説をたてた。2型は、須恵器坏を指標に土器群を古い方から新しい方へ第Ⅰ群・第Ⅱ群・第Ⅲ群に区分したうちの第Ⅰ群にすでに出現している。岩手県での須恵器生産の開始時期や実態には不明の点も多いが、今後の研究に問題を提起するものとなろう。

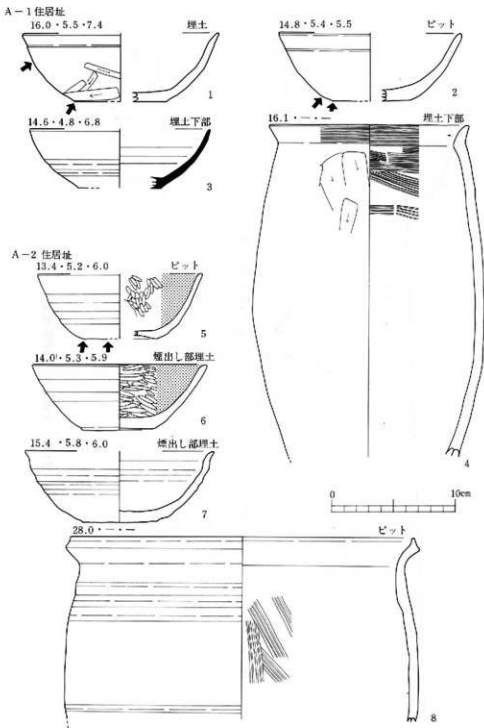
以上のことから、本遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが言える。縄文時代は狩猟場として機能したのであり、集落としての機能の開始は平安時代になってからのことである。さらにそれよりも新しい時期の溝跡の存在も考えられるのだが、時代は不明である。

北上川中流域では、平安時代以降になると遺跡数の増加・分布の拡大・立地の相違など現象面からだけでもそれ以前とは大きな隔りがあることが一般的に指摘でき、本遺跡も含めた紫波地方もその例外ではない。平安時代の社会的捕鯊期に成立してきた中田遺跡の歴史的な背景をさぐるとともに、より広く地理学的視点に立脚した把握が今後の課題となろう。

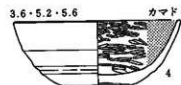
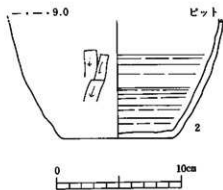
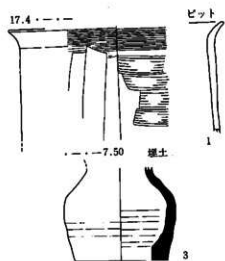
(光井文行・三浦謙一)



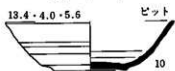
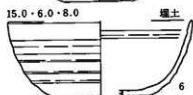
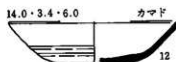
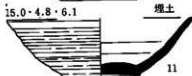
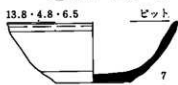
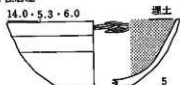
第12図 中田遺跡、遺構配置図



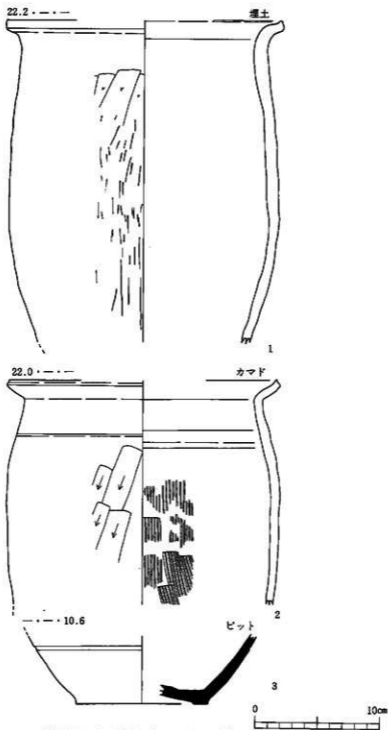
第13図 出土遺物 (A-1住居址・A-2住居址)



B-1 住居址



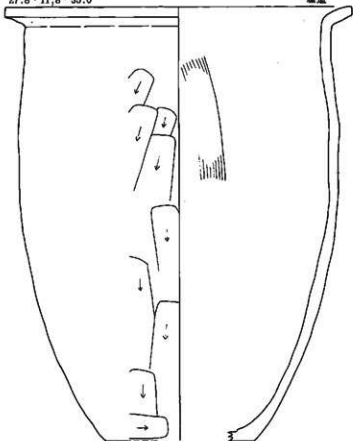
第14図 出土遺物 (A-2 住居址・B-1 住居址)



第15図 出土遺物 (B-1 住居址)

27.8 · 11.8 · 35.0

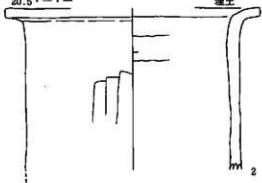
標道



1

20.5 · · · ·

埋土



2

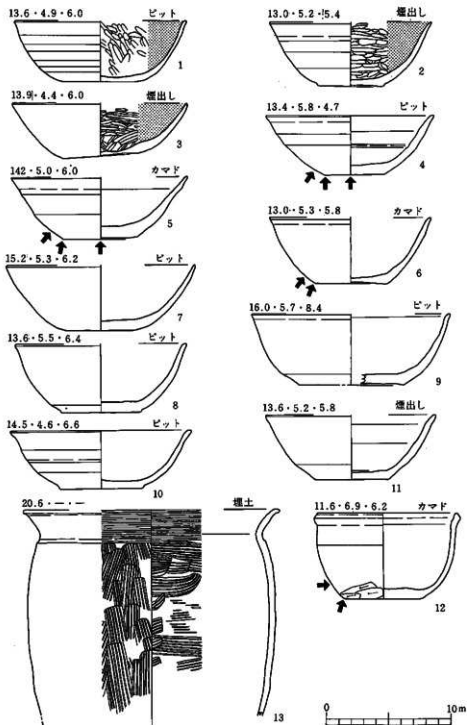
14.0 · · · ·



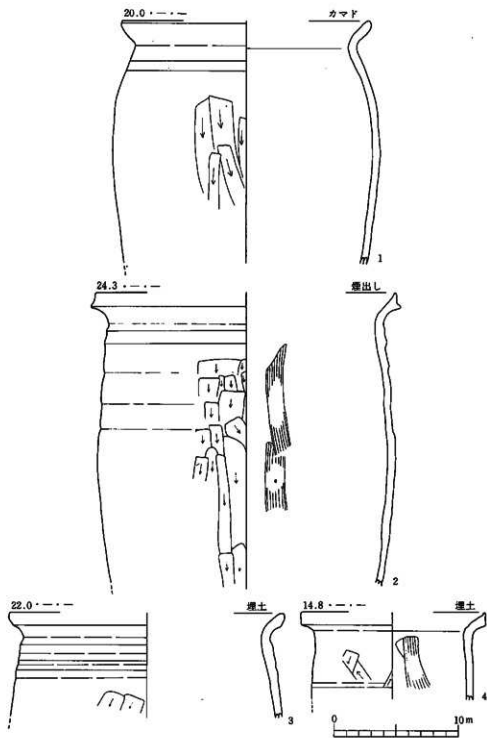
3

第16図 出土遺物 (B-1住居址)

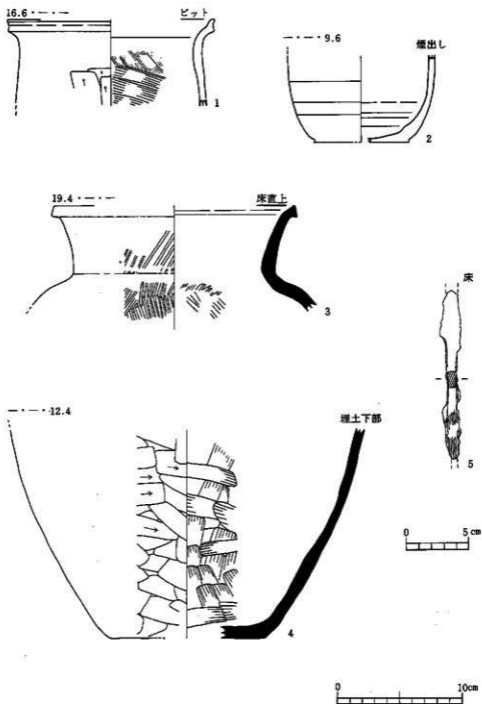




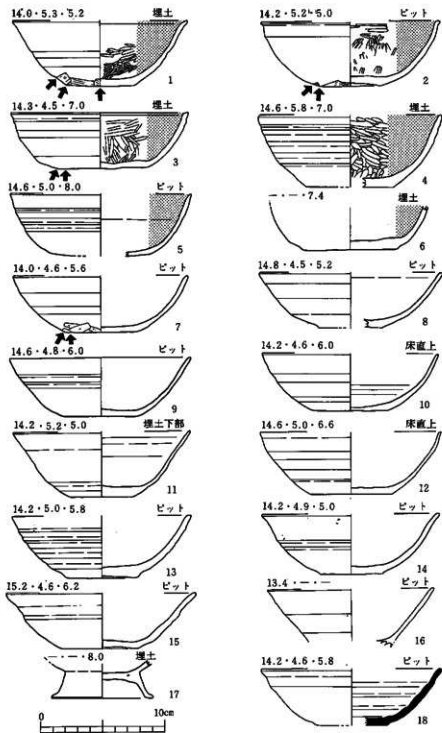
第17図 出土遺物 (B-2住居址)



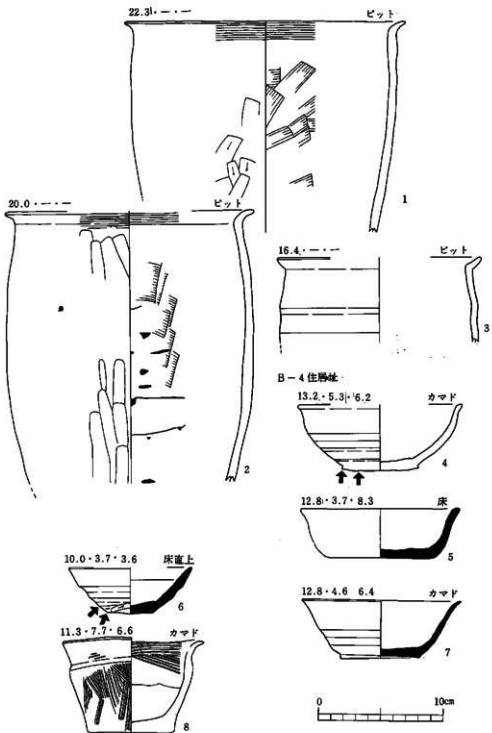
第18図 出土遺物 (B-2住居址)



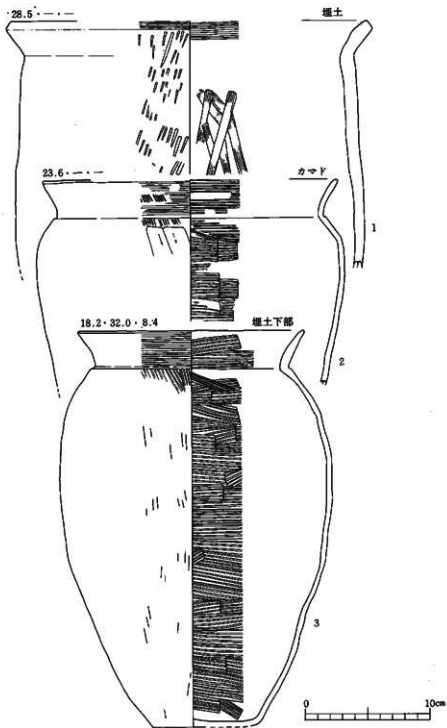
第19図 出土遺物 (B-2住居址)



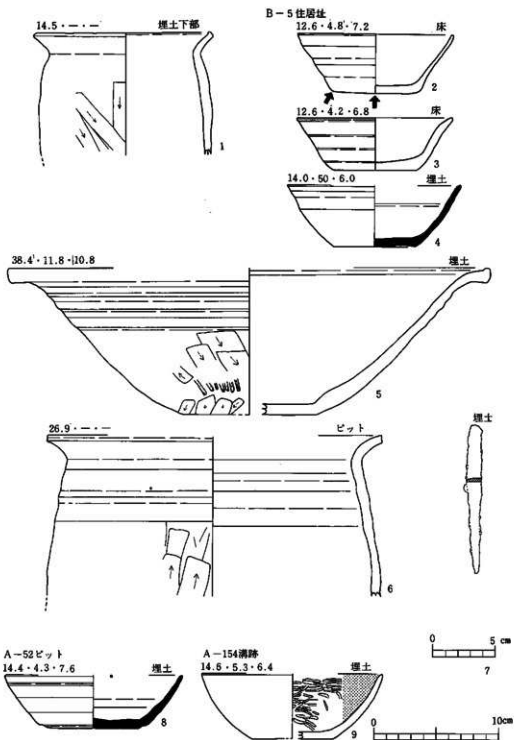
第20図 出土遺物 (B-3住居址)



第21図 出土遺物 (B-3住居址・B-4住居址)



第22図 出土遺物 (B-4住居址)



第23図 出土遺物 (B-4住居址・B-5住居址・A-52ピット・A-154溝跡)

IV. 古屋敷遺跡

遺跡所在地 紫波郡紫波町高水寺字古屋敷
調査期間 昭和53年6月1日～8月31日(粗掘り)
昭和54年4月9日～6月30日(精査)
調査対象面積 1,700㎡
発掘面積 1,700㎡

1. 検出された遺構と発見遺物

(1) 竪穴住居址

A 区

A-1 住居址

検出遺構 (第1図, 写真図版26a・26b)

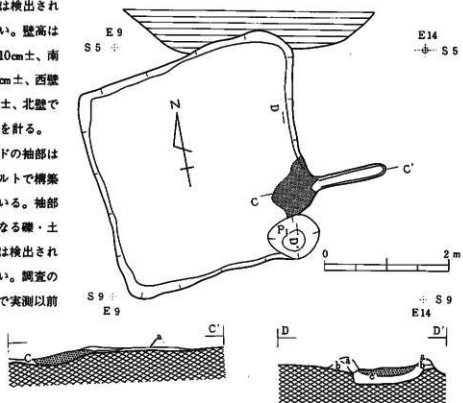
住居址は長軸3.5m±、短軸3.3m±の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈している。カマドは東壁中央部南寄りに設けられている。

埋土はわずかに炭化物・焼土粒を包含している黒色土の単層で占められている。

住居址は風倒木跡を切って構築されている。切っている北東隅は、黄褐色土と黒褐色土とで貼り床(層厚4cm±)が施されている。床面はかたく部分的に凹凸がみられる。

柱穴は検出されていない。壁高は東壁で10cm±、南壁で13cm±、西壁で14cm±、北壁で15cm±を計る。

カマドの袖部は褐色シルトで構築されている。袖部の芯になる礎・土器などは検出されていない。調査の手違いで実測以前



- a. 暗褐色土層 (含焼土粒・炭化物)
- b. 黄褐色土層
- c. 黒褐色土層

第1図 A-1 住居址実測図

に袖部の大部分を破壊してしまったが、残存部から袖部の幅は110cm±と推定される。燃焼部は浅皿状のピットで下底部が火熱により赤色変化（層厚10cm±）を受けている。煙道部は壁際でゆるく立ち上がりのみせた後平坦を保ちながら煙出し部に接続している。煙道部と煙出し部との境界が不明瞭であるため、煙出し部の形状・規模についての詳細は不明である。カマドの全長は1.8m±を計る。

住居址南東隅にカマド右袖と接する形でピットP₁（最大径82cm±・深さ16cm±）が検出されている。埋土は上部がわずかに炭化物を包含している黒褐色土、下部が少量の焼土粒と土器片を包含している黒褐色土で構成されている。検出状況・埋土から、ピットP₁は住居址に伴うものと考えられる。

出土遺物（第18図1・2，写真図版36）

出土した遺物は土器だけである。埋土からのものが主体を占めるが、ピットP₁からも少量が出土した。器種には、土師器・須恵器の坏と甕がある。そのほかに、この住居址に伴うものではないが、縄文土器の破片10数点が埋土から出土している。

縄文土器 縄文を地文にもつ体部の小破片だけであり、所属時期や器種などは不明である。

土師器坏（第18図1・2） いずれもロクロ成形で、内面はヘラミガキのち黒色処理される。回転未切り無調整である（CⅣ類）。このほかにも少量の小破片が出土したが、詳細は不明である。

土師器甕 小破片で、しかも出土量が少ないため詳細は不明であるが、B類がA類を越える。

須恵器坏 酸化炭焼成・還元炭焼成がともにあるが、僅少のため詳細は不明である。

須恵器甕 内外に平行叩き目文をもつ体部破片が僅少出土しただけである。

A-2 住居址

検出遺構（第2図，写真図版26c）

住居址の大部分が調査区域外にあり、また新しい溝により住居址の一部が切られているため、住居址の規模・形状についての詳細は不明である。残存する壁の輪郭線から、住居址は一辺3.3m±の規模をもち、正方形または長方形の形状を呈していると推定される。カマドは東壁中央部北寄りに設けられている。

埋土はわずかに炭化物を包含している黒褐色土の単層で占められている。

床面はたかく全体に凹凸がみられる。カマド周辺の一部に貼り床（層厚6cm±）が施されている。

柱穴は検出されていない。壁高は北壁で9cm±、南壁で13cm±を計る。

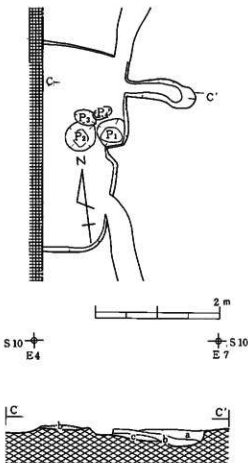
東壁に設けられているカマドは、壁近くを幅40cm±の新しい溝により破壊されている。左袖は調査の手違いから破壊されて不明である。右袖は汚れた黄褐色シルトで構築されている。残

存する部分から、袖部の幅は90cmと推定される。燃焼部は径65cm・深さ10cm±の浅皿形ピットで下底部は火熱により赤色変化(層厚3cm±)を受けている。煙道部は壁際でゆるく下方に傾斜しながら煙出し部に接続している。煙出し部は径40cm±・深さ18cm±のピットである。カマドの全長は1.8m±を計る。

カマド東側にピットP₁(径50cm±・深さ24cm±)・P₂(径52cm±・深さ13cm±)の2個が検出されている。ピットP₁の埋土は多量の焼土粒を包含している暗赤褐色土で占められている。ピットP₂の埋土は特に下部に焼土粒を多く包含している暗褐色土で占められている。

E 4
S 4

E 7
+ S 4



出土遺物

遺物は土器の破片が少量出土しただけで、図化できたものはない。破片からは、土師器・土師器甕・須恵器環(EⅡ類)・須恵器甕があることが分かるものの、詳細は不明である。

A-3 住居址

検出遺構(第3図, 写真図版27b)

住居址の西側は調査区域外にある。北壁の一部は最近掘られたピットにより破壊されている。残存する壁の輪郭線から、住居址は一辺5.2m±の正方形または長方形の形状を呈していると思われる。カマドは北壁東寄りに設けられている。

埋土は焼土粒・炭化物を包含している黒褐色土の単層で占められている。

カマド西寄り、中央部、南東隅、南壁西寄りの4カ所に、円形状(最大径40cm±~180cm±)に貼り床(層厚4cm±~8

- a. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物)
- b. 暗赤褐色土層(含焼土塊)
- c. 黒褐色土層

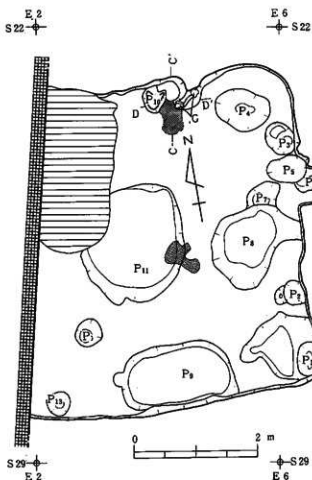
第2図 A-2 住居址実測図

cm土)が施されている。貼り床は黒褐色土・黄褐色土でつくられている。床面はかたく凹凸が著しい。

柱穴はビットP₁(径46cm土・深さ30cm土)・P₂(径38cm土・深さ23cm土)・P₃(径61cm土・深さ21cm土)の3個が検出されている。柱穴配置から、もう1個の存在が考えられる北西隅は最近のビットにより破壊されている。残存する3個から、柱配置は4本1組の長方形を呈していると推定される。南北にある2個は東壁に接している。

壁高は東壁で9cm土、南壁で6cm土、北壁で6cm土を計る。

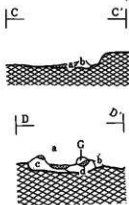
カマドの右袖は、粒径15cm土の亜角礫を芯にし褐色土質シルトを被覆させてつくられている。左袖は掘りすぎにより大部分を破壊されている。残存部から袖部の幅は80cm土と推定される。



第3図 A-3住居址実測図

燃烧部は平坦で下底部が火熱により赤色変化(層厚4cm土)を受けている。煙道部は検出されていない。

住居址中央部に現地性焼土(最大径58cm土・層厚3cm土)が検出されている。状態・位置



- a. 焼土
- b. 黒色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黒褐色土層

を果していたものと考えられる。

住居址からビットP₁(最大径90cm±・深さ10cm±)・P₂(最大径65cm±・深さ21cm±)・P₃(径35cm±・深さ4cm±)・P₄(径35cm±・深さ10cm±)・P₅(最大径110cm±・深さ20cm±)・P₆(最大径143cm±・深さ5cm±)の6個が検出されている。

ビットP₁は北東隅に検出されている。埋土は焼土粒・炭化物・土器片を包含している黒褐色土で占められている。

ビットP₂～P₆は中央部東寄りに検出されている。埋土はフィールド・カードに記載されておらず不明である。検出時これらのビットは焼土粒を包含している暗褐色土で覆われていた。

ビットP₃は南壁に接する形で検出されている。埋土は土器片を多く包含している黒色土で占められている。

検出状況・埋土から、ビットP₄・P₅は住居址に伴うものであると考えられる。ビットP₂～P₆については不明である。

カマド左袖下からビットR₁(径36cm±・深さ11cm±)が検出されている。埋土は焼土粒・黄褐色シルトのブロックを包含している暗褐色土で占められている。

貼り床下からビットR₁(最大径183cm±・深さ10cm±)・R₂(径52cm±・深さ10cm±)・R₃(径18cm±・深さ4cm±)の3個が検出されている。

ビットR₁は中央部に検出されている。埋土は多量の黄褐色シルトのブロックを包含している黒褐色土で占められている。

ビットR₂は南東隅に、ビットR₃は南壁西寄りに検出されている。埋土はともに黒褐色土で占められている。

出土遺物 (第17図3～6, 写真図版36)

出土した遺物は土器だけである。埋土出土のものを主体に、床面・P₄やP₅のビット・貼り床下・カマドなどからも少量が出土した。器種には、土師器・須恵器の坏と甕がある。またこの住居址に直接伴うものではないが、縄文土器片数点が埋土から出土している。

縄文土器 縄文を地文とする体部の小破片だけであり、帰属時期や器形などは不明である。

土師器坏 (第17図3) ロクロ成形で、内面はヘラミガキのち黒色処理される。回転糸切り無調整である(CⅣ類)。このほか底部が観察できる破片では、CⅣ類を主にCⅢ類が混じる。

土師器甕 小破片のうえ、少量が出土しただけである。破片からみた数量ではA類とB類が混じる。B₂類には、体部下端に手持ちヘラ削り調整が加えられる例が3例知られる。

須恵器酸化炎焼成坏 (第17図4～6) 4・5は回転糸切りのあと手持ちヘラ削り調整が加えられる(DⅢ類)。4は体部下端～底部外周、5は体部下端が調整される。2点は、口径に比べて底径が小さく、器高は高い。6は底部を欠く。このほかに底部が観察できる破片は少ないが、

DIV類がある。

須恵器還元炭焼成坏 小破片で、しかも僅少である。底部が観察できる破片はEIV類である。

須恵器甕 体部の小破片が少量出土した。須恵器壺との識別が困難なものもあり、詳細不明。

C 区

C-1 住居址

検出遺構（第4図，写真図版28a）

住居址の西側が調査区域外にあるため、住居址の規模、形状についての詳細は不明である。

検出されている壁の輪郭線から、住居址は一辺4.4m±の正方形または長方形の形状を呈するものと思われる。カマドは東壁中央部南寄りに設けられている。

埋土は炭化物をわずかに包含している黒褐色土の単層で占められている。

床面は全体に平坦でかたくしまっている。

住居址内から柱穴状ビットP₁（径48cm±・深さ15cm±）・P₂（径38cm±・深さ12cm±）・P₃（径17cm±・深さ6cm±）・P₄（径24cm±・深さ23cm±）の4個が検出されている。これらが柱穴を構成するかどうかは不明である。

壁高は東壁で10cm±、南壁で5cm±、北壁で20cm±を計る。

カマドの袖部は礫とシルト質黒褐色土で構築されている。袖部の幅は110cm±を計る。燃焼部は径40cm±の浅皿状のビットで下底部は火熱により赤色変化（層厚5cm±）を受けている。煙道部は壁際で大きく立ち上がりをもせた後下方に液状に傾斜しながら煙出し部に接続している。煙出し部は最大径55cm±・深さ27cm±の鉢形ビットである。カマドの全長は2.3m±を計る。

東南隅にカマドに接する形でビットP₅（径64cm±・深さ18cm±）が検出されている。埋土は焼土粒・炭化物をわずかに包含している黒褐色土で占められている。検出状況から、ビットは住居址に伴うものと考えられる。

出土遺物（第17図7～9，写真図版36）

鉄製品1点を除いた出土遺物はすべて土器である。出土量は少なく、埋土以外には床直上とカマドからの出土が若干ある。器種には、土師器・須恵器の坏と甕、須恵器壺がある。

土師器坏 出土量が少ないうえ、小破片である。底部が観察できる1点はCIV類である。

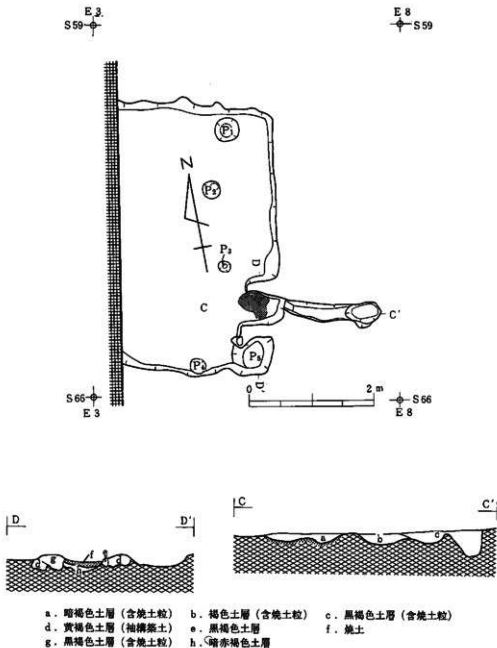
土師器甕（第17図8） ロクロ不使用である（A類）。体部下半～底部の残存であるが、器形や調整技法などは不明である。このほかの破片も体部の小破片で、詳細は不明である。

須恵器酸化炭焼成坏 小破片だけである。底部が観察できる1点はDIV類である。

須恵器還元炭焼成坏（第17図7） 底部の大部分を欠くが、回転糸切り痕が一部にみられる。

このほかはすべて小破片のため、詳細は不明である。

須恵器壺・須恵器壺 甕と長頸壺の口縁部の小破片がある以外、詳細は不明である。



第4図 C-1住居址発掘図

鉄製品(第17図9) 鎌で、現存長19.5cmのほぼ完形品である。刃部は基部から先端へ内弯し、基部に近い部分は幅3.6cmと広く、先端に向わずかにせばまる。

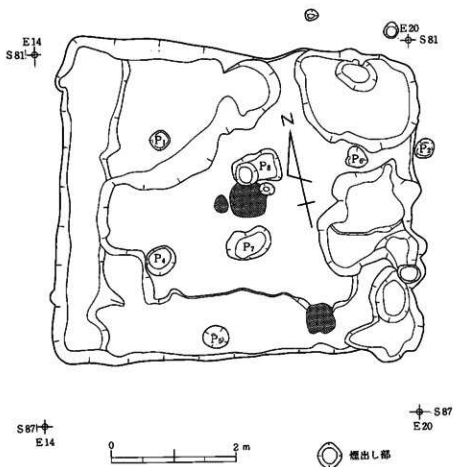
C-2 住居址

検出遺構(第5図, 写真図版28b)

住居址の東側半分は、粗掘り時の不手際で床面直上まで破壊されている。残存する壁の輪郭線、床面の広がりから、住居址は長軸5.6cm±・短軸5.0m±の規模をもち、ほぼ長方形の形状を呈しているものと考えられる。カマドは南壁中央部東寄りに設けられている。

埋土は黒褐色土の単層で占められている。

住居址周辺部(幅90cm±~150cm±)にシルト質黒褐色土で貼り床(層厚10cm±)が施されてい



第5図 C-2住居址実測図

る。床面は全体にかたく凹凸が著しい。中央部は周辺部に比べて床面が高くなっている。

住居址から柱穴状ピットP₁(径32cm±・深さ30cm±)・P₂(径35cm±・深さ35cm±)・P₃(径37cm±・深さ26cm±)・P₄(径48cm±・深さ19cm±)・P₅(径42cm±・深さ15cm±)・P₆(径35cm±・深さ4cm±)の6個が検出されている。その配置からみて、ピットP₁・P₂・P₃・P₄の4個が柱穴を構成しているものと考えられる。柱穴配置は東壁に接する長方形を呈している。

壁高は北壁で17cm±、南壁で12cm±、西壁で19cm±を計る。

カマドの大部分が削割されているため、カマドは燃焼部と煙出し部の一部が残存するにすぎない。燃焼部は平坦で径50cm±・層厚4cm±の規模で火熱により赤色変化を受けている。煙出し部は径40cm±・深さ13cm±の円形ピットである。煙出し部から燃焼部までの長さは2.2m±を計る。

住居址中央部南寄りにピットP₇(径72cm±・深さ11cm±)、南寄りにピットP₈(径79cm±・深さ11cm±)が検出されている。ピットP₇の埋土は上部が少量の炭化物と土器片を包含している黒褐色土、下部が褐色土で構成されている。ピットP₈はフィールド・カードに記載されており不明である。検出状況から、ピットP₇は住居址に伴うものと考えられる。

中央部に現地性焼土が検出されている。焼土の規模は径58cm±、層厚4cm±を計る。「炉」的な機能を果たしていたものと考えられる。

周囲に施されている貼り床下から幅76cm±～150cm±、深さ6cm±～24cm±の規模をもつ掘り方が検出されている。埋土は暗褐色土～褐色土で占められている。

出土遺物 (第18図1～6, 写真図版36)

上述のように、粗掘りの際に床面近くまで削割を受け、床面・貼り床下・P₈のピットから少量の土器が出土したにすぎない。器種には、土師器・須恵器の坏と甕がある。

土師器坏 (第18図1～3) いずれもロクロ成形で、内面はヘラミガキのち黒色処理される。1は底部の器面の磨耗、3は底部を欠くために切離し技法は不明である。口径に対する底径比が大きい。2は回転糸切り無調整である(CIV類)。このほかには、底部が観察できる破片はない。

土師器甕 小破片だけで、図化できたものはない。口縁部破片はいずれもB類である。

須恵器酸化炭焼成坏 小破片だけのため、詳細は不明である。

須恵器還元炭焼成坏 (第19図4～6) いずれも回転糸切り無調整である(EIV類)。4は体部下方に「五」の墨書がみられる。5は口径に対する底径比が大きいのが特徴である。このほかには、底部が観察できる破片はない。

須恵器甕 体部の小破片だけで、外面にヘラ削りをもつ。須恵器甕との識別も困難である。

D 区

D-1 住居址

検出遺構 (第6図・写真図版29a・29c)

住居址の大部分がD-2a・2b住居址に切られているために、住居址の規模・形状についての詳細は不明である。残存する壁の輪郭線から、住居址は一辺5.2m±の正方形または長方形の形状を呈するものと推定される。

埋土は焼土粒・炭化物を包含している暗褐色土で占められている。

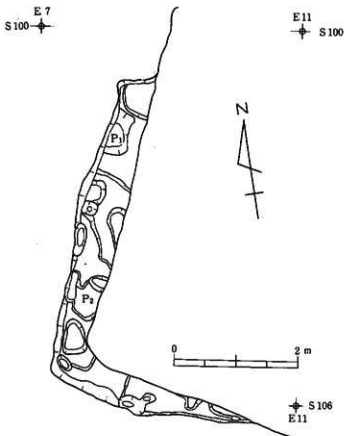
床面の大半はシルト質褐色土で貼り床(層厚4cm±)が施されている。床面はかたく部分的に凹凸がみられる。

柱穴は検出されていない。壁高は北西隅で13cm±、西壁で20cm±、南壁で21cm±を計る。

住居址内からピットP₁(径60cm±・深さ8cm±)・P₂(径55cm±・深さ21cm±)の2個が検出されている。ピットP₁・P₂の埋土は焼土粒・炭化物・土器片を包含している黒色土で占められている。

出土遺物 (第18図7, 写真図版37)

上述のように、重複する住居址に大部分を切られることや調査時にD-2住居址の埋土の遺物と識別できなかったことがあって、固有の遺物は図示した1点だけである。



第6図 D-1住居址実測図

6はピットP₁から出土した須恵器酸化炭焼成の坏で、回転糸切り無調整である(DⅣ類)。

D-2a住居址

検出遺構(第7図, 写真図版29b・29c)

住居址はD-2b住居址に拡張する以前のもので、D-2b住居址の貼り床下から検出されている。住居址は長軸5.6m±、短軸4.6m±の規模をもち、ほぼ長方形の形状を呈している。カマドは南壁中央部東寄りに設けられている。

埋土・壁高は不明である。床面はかたかく凹凸が多くみられる。

住居址内から柱穴状ピットP₁(径55cm±・深さ33cm±)・P₂(径29cm±・深さ20cm±)・P₃(径22cm±・深さ12cm±)・P₄(径49cm±・深さ32cm±)の4個が検出されている。これらのピットが柱穴を構成するかどうかは不明である。

南壁に設けられているカマドの本体は破壊され、煙道部の一部が残っているにすぎない。残存する煙道部はゆるく下方に傾斜しながら煙出し部に接続している。煙出し部は径42cm±・深さ20cm±の円形ピットである。

住居址はD-1住居址を切っている。

出土遺物

D-2b住居址の拡張前の住居址のため、埋土を欠く。貼り床されているが、D-2b住居址の床面との高低差は小さく、床下からの出土は少ない。また、ピットは新旧いずれの住居址に属するのか不明の部分もあるので、ピット出土のものはD-2b住居址の項でとりあげ、ここでは床下から出土した土器に限定して記述する。器種には、土師器・須恵器の坏と甕がある。

土師器坏 小破片で、しかも少量である。1点だけCⅣ類であるのが分かる。

土師器甕 小破片だけであるが、ほとんどがB類である。B₁類も多いのが特徴である。

須恵器坏 小破片がわずかに出土したにすぎず、詳細は不明である。EⅣ類が1点だけある。

須恵器甕 体部・底部の破片が少量出土したが、図化できたものはない。

D-2b住居址

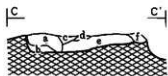
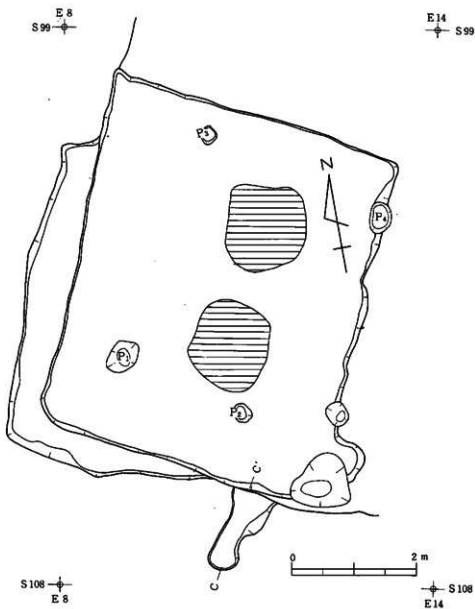
検出遺構(第8・9図, 写真図版29c)

住居址はD-2a住居址を東側に1.5m±、北側に1.4m±拡張してつくられている。住居址は長軸7.5m±、短軸6.5m±の規模をもち、ほぼ長方形の形状を呈している。カマドは東壁中央部北寄りに設けられている。

埋土は焼土粒・炭化物・黄褐色シルトのブロックを包含している暗褐色土で構成されている。

壁高は東壁で26cm±、南壁で23cm±、西壁で20cm±、北壁で11cm±を計る。

床面の大部分は褐色土シルトで貼り床(層厚10cm±)が施されている。床面は全体にかたかく凹凸が多くみられる。



- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 黄褐色土層
- d. 黑褐色土層 (含燒土粒・炭化物)
- e. 黄褐色土層 (含燒土塊)
- f. 黑褐色土層

第7圖 D-2 a 住居址突測圖

住居址内から柱穴状ピットP₁(径72cm±・深さ24cm±)・P₂(径34cm±・深さ10cm±)・P₃(径66cm±・深さ15cm±)・P₄(径52cm±・深さ13cm±)・P₅(径31cm±・深さ12cm±)・P₆(径38cm±・深さ6cm±)・P₇(径46cm±・深さ10cm±)・P₈(径34cm±・深さ3cm±)・P₉(径44cm±・深さ7cm±)・P₁₀(径41cm±・深さ7cm±)・P₁₁(径55cm±・深さ17cm±)の11個が検出されている。

ピットP₁・P₂・P₉の埋土は暗褐色土で、ピットP₃の埋土は黒褐色土で占められている。検出状況・埋土から、ピットP₁・P₂・P₃・P₉は住居址に伴うものと考えられる。

ピットP₄・P₅・P₆・P₇・P₈・P₁₀・P₁₁の埋土は灰褐色土で占められている。これらのピットが住居址に伴うかどうかは不明である。

カマドの袖部は褐色シルトでつくられている。カマド崩壊土と袖部との識別がむずかしく一部に掘りすぎがみられるが、残存部から袖部の幅は1.2m±と推定される。燃焼部は平坦で下部が火熱による赤色変化(層厚9cm±)を受けている。煙道部は壁際で立ち上がりそのまま緩やかに上方に傾斜し検出面に達している。

住居址中央部南寄りに現地性焼土が検出されている。規模は径40cm±・層厚4cm±を計る。炉に類した機能を果していたと考えられる。

住居址に伴うピットとして、ピットP₁₂(最大径146cm±・深さ11cm)・P₁₃(径86cm±・深さ6cm±)・P₁₄(径98cm±・深さ18cm±)・P₁₅(径120cm±・深さ14cm±)・P₁₆(径96cm±・深さ27cm±)・P₁₇(径154cm±・深さ16cm±)の6個が検出されている。

ピットP₁₂の埋土は焼土粒・炭化物・土器片を多く包含している黒色土である。ピットP₁₃の埋土は焼土粒を包含している黒色土で占められている。ピットP₁₄・P₁₅の埋土は暗褐色土、ピットP₁₆・P₁₇の埋土は黒色土で構成されている。

周辺部の貼り床下からピットP₁₈(径210cm±・深さ18cm±)・P₁₉(径48cm±・深さ18cm±)の2個が検出されている。

出土遺物(第18図8～11・第19図1～5, 写真図版37)

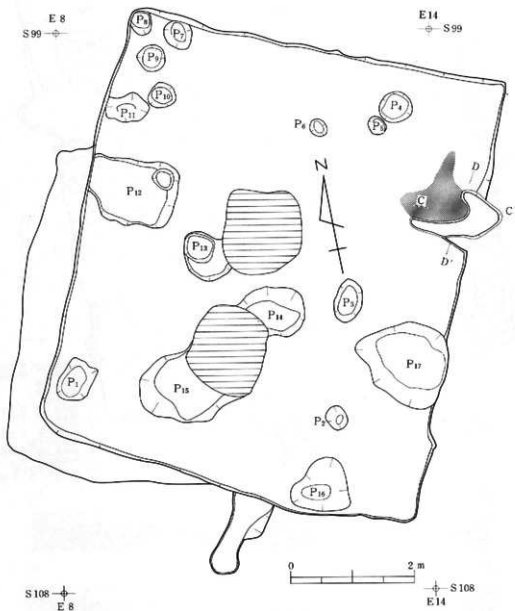
出土した遺物は砥石1点をのぞいてすべて土器である。埋土からのものが主体を占め、床面・P₃・P₁₂・P₁₃・P₁₄・P₁₅などのピット・カマドからも出土したものの、量としては多くない。ピットとの関係は、D-2a 住居址の存在もあって一部に不明の点があるが、出土した遺物はここであつかうことにした。器種には、土師器・須恵器の坏と甕のほかには土師器鉢・須恵器壺がある。

土師器坏 小破片だけで、図化できたものはない。底部を観察できる破片のほとんどはCⅣ類である。

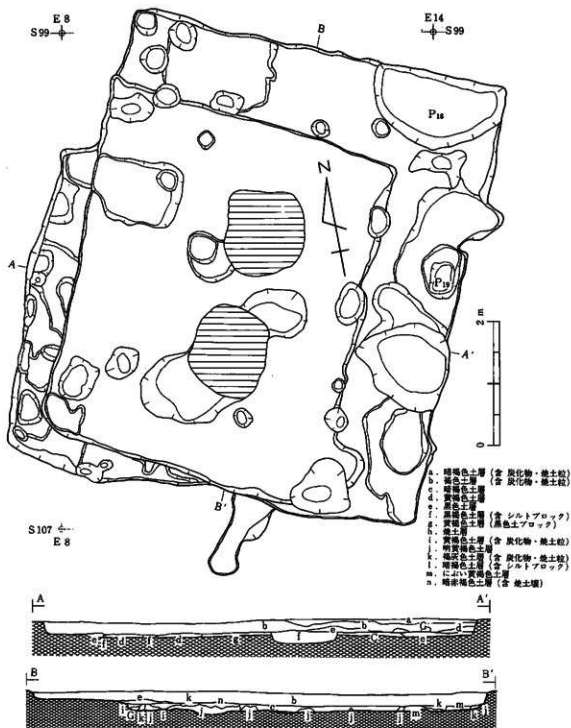
土師器壺(第19図1～4) 1～3はロクロ使用である。1・2は小形の甕である(B₁類)。口縁部はいずれも外反し、2では口唇部が上方に若干挽きだされる。3は口縁部がわずかに外傾し、口唇部は内側に折れまがる(B₂類)。いずれもロクロ痕以外に調整は加えられない。4

はロクロ不使用で、体部下半～底部の残存である。体部外面には縦方向のヘラ削りが加えられる(A類)。このほかの破片を観察しても、B類がA類に卓越し、B類ではB₂類も多い。

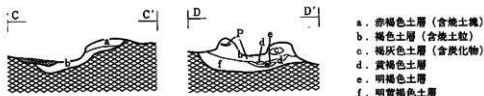
土師器鉢 ロクロ成形の小形のものがある。ほぼ直立気味の体部をもち、口縁部は外反して短い。口唇部が上下に若干挽きだされる。



第8図 D-2b住居址実測図(第1次)



第9図 D-2b住居址実測図(第2次)(1)



第10図 D-2 b 住居址実測図(第2次) (2)

須恵器酸化炭焼成坏(第18図8) 回転糸切り無調整である(DⅣ類)。このほかに底部が観察できる破片はDⅣ類である。

須恵器還元炭焼成坏(第18図9~11) いずれも回転糸切り無調整である(EⅣ類)。8はやや小形である。このほかに底部が観察できる破片ではEⅣ類とEⅡ類が混じる。

須恵器甕 口縁部・肩部・体部の小破片が出土したが、図化できたものはない。

須恵器壺 長頸壺の頸部が出土した。

砥石(第19図5) 現存長17.7cm・厚さ6.5cmの平滑な砥石で、2面が使用されている。石質は凝灰岩である。

(2) 掘立柱建物跡

D区掘立柱建物跡(第11図, 写真図版30a)

本建物跡はD-2a・2b住居址の北東に位置している。建物の規模は東西2間×南北3間である。東西柱列は北側が4.56m±、南側が4.57m±、南北柱列は西側が7.11m±、東側が7.09m±を計る。

桁行は、西側柱列が北から1.97m±、3.17m±、1.97m±、東側柱列が北から1.97m±、3.22m±、1.90m±を計る。梁行は北側が西から2.22m±、2.34m±、南側が西から2.23m±、2.34m±を計る。

掘り方の規模は径30cm±~45cm±、深さ30cm±~48cm±を計り、ほぼ円の形状を呈している。これらの掘り方のうち柱穴が検出されているのは6個である。柱穴は径20cm±~34cm±の規模である。

掘り方の埋土は黄褐色シルトのブロックを多く包含している暗褐色土で占められている。遺物は検出されていない。

南北両側の棟持柱は東西を結ぶ梁行よりわずかながら外側に存在している。

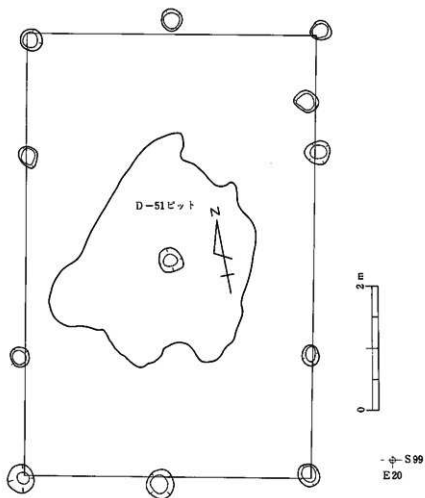
本建物跡に伴う遺物が明らかでないこと、他の遺構との切り合い関係がないことから、建物跡についての時期は不明である。

C区柱穴状ピット群（写真図版31a）

C-1住居址南側から多数の柱穴状ピットが検出されている。埋土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土、灰褐色土などの単層で占められている。規模は径30cm±大のことが多い。掘立柱建物

E14
S91 ↓

E20
← S91



第11図 掘立柱建物跡

跡の柱穴ではないかと考え、色々検討してみたが、埋土・間尺・柱穴の規模などを満足させる最小規模の建物も確認することができなかった。柱穴状ピット部の図版は省略する。

(3) ピット

B-51ピット (第12図a, 写真図版31b)

ピットはC-1住居址の東側にあり、長軸2.2m±、短軸1.8m±の規模をもち、ほぼ方形の形状を呈している。埋土は焼土粒をわずかに包含している暗褐色土で占められている。壁高は東壁で6cm±、南壁で10cm±、西壁で11cm±、北壁で8cm±を計る。底面はかたかたや凹凸がみられる。

出土遺物は、土師器が少量あるものの小破片のため、詳細は不明である。

C-51ピット

検出遺構 (第12図b, 写真図版32a)

ピットはC-2住居址の北側にあり、長軸2.6m±、短軸2.0m±の規模をもち、ほぼ長方形の形状を呈している。埋土は焼土粒、炭化物をわずかに包含している黒色土の単層で占められている。壁高は東壁で16cm±、南壁で12cm±、西壁で11cm±、北壁で5cm±を計る。底面は全体に平坦でややかたい。底面中央部にピットP₁(径22cm±・深さ20cm±)、北壁東側にピットP₂(径36cm±・深さ21cm±)が検出されている。これらの柱穴状ピットが本遺構に伴うかどうかは不明である。

出土遺物 (第20図6・7, 写真図版37)

図示したものの以外には土器の破片が少量ある。6は須恵器還元炭焼成の坏で、回転糸切り無調整である(EⅣ類)。体部外面には火傷ひやまがみられる。7はロクロ調整された甕の体部下半～底部の残存で、体部外面にヘラ削りひらが加えられる。

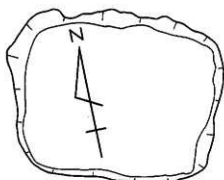
C-52ピット (第12図c, 写真図版33a)

ピットはC-2住居址の東側にあり、開口径2.2m±・底径1.2m±・深さ24cm±の規模をもつ浅皿状の円形ピットである。埋土は上位が焼土粒・炭化物を包含している黒褐色土、下部が炭化物をわずかに包含している暗褐色土で構成されている。底面はややかたかた部分的に凹凸がみられる。

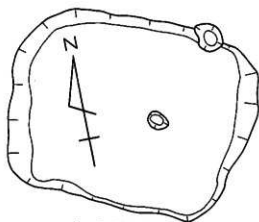
出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

C-53ピット (第12図d, 写真図版32b)

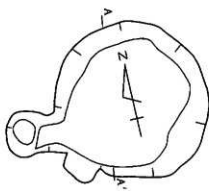
C-2住居址の西側に位置し、径171cm±・深さ21cm±の規模をもつ円形ピットである。埋土は少量の焼土粒・炭化物と中位に黄褐色シルトを帯状に包含している暗褐色土で占められてい



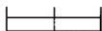
a. B-51ピット



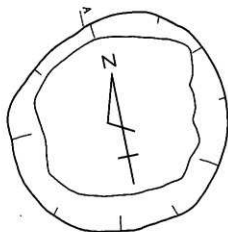
b. C-51ピット



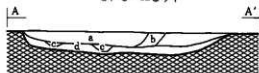
c. C-53ピット



a. 暗褐色土層 (含炭化物・焼土粒)
b. 黄褐色土層

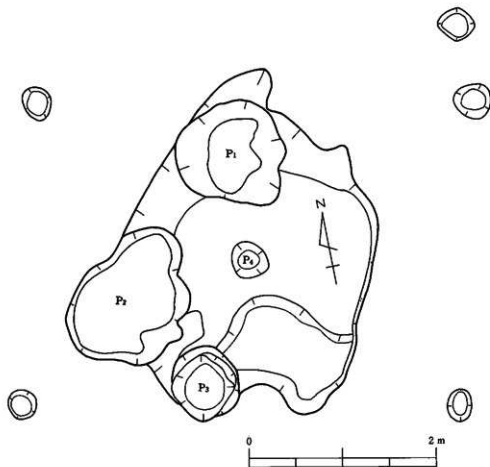


d. C-52ピット



a. 黒褐色土層 (含焼土粒・炭化物)
b. 木根痕
c. 黒褐色土層
d. 黒色土層 (含炭化物)

第12図 ピット実測図(1)



第13図 D-51ピット実測図(2)

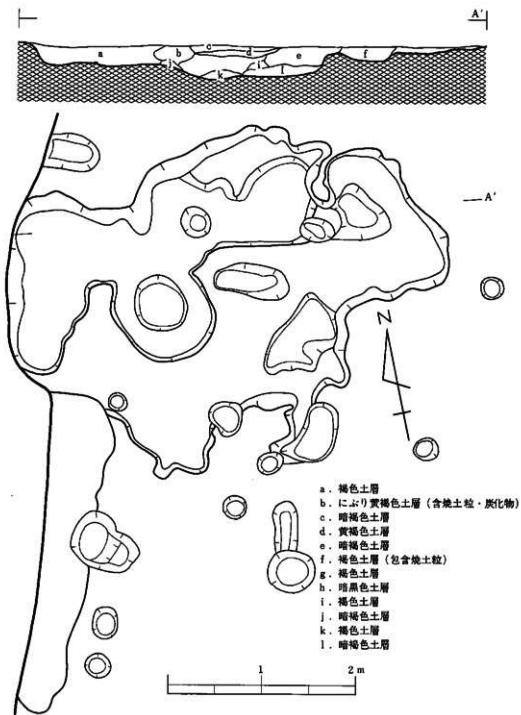
る。底面は凹凸が著しい。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

D-51ピット

検出遺構（第13図、写真図版33b）

ピットはD-2a・2b住址の北東側にあり、長軸3.4m±、短軸2.7m±、深さ10cm±の規模をもち、不整形円形を呈している。埋土は上位に焼土粒・土器片を包含している暗褐色土の単層で占められている。断面形は浅皿状を呈している。本遺構内からピットP₁（径116cm±・深さ17cm±）・P₂（径160cm±・深さ11cm±）・P₃（径70cm±・深さ38cm±）・P₄（径40cm±・深さ20cm±）の4個が検出されている。ピットP₁の埋土は焼土粒を包含している黒色土である。ピットP₂・



第14図 E-51ピット実測図(3)

P₂の埋土は灰褐色土である。ビットP₄の埋土は暗黒色土である。これらのビットが本遺構に伴うかどうかは不明である。

出土遺物 (第20図, 写真図版37)

図示したも以外には土器の破片が少量ある。8は須恵器酸化炎焼成の環で、回転米切り無調整である。内外面にロクロ痕が著しい。

E-51ビット (第14図, 写真図版34a)

ビットはD-2a・2b住居地の南側に検出されている。規模は長軸4.7m±・短軸2.8m±、深さ32cm±を計る。平面形は不整形を呈している。埋土は主に暗黒色土、暗褐色土、褐色土などで構成されている。断面形は摺鉢状を呈している。底面は凹凸が激しい。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細不明である。

(4) 溝 跡

B-151溝跡 (第15図a, 写真図版35a b)

東西に走るこの溝跡はC-1住居地の北側にあり、平均して上幅90cm±、下幅18cm±、深さ27cm±の規模をもち、両端は調査区域外へ延びている。埋土はわずかに焼土粒・土器片を包含している黒褐色土の単層で占められている。断面形はほぼ逆台形の形状を呈している。底面は凹凸が多くみられる。検出されている部分の溝跡の長さは12.1m±を計る。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

B-152溝跡 (第15図a, 写真図版35a)

B-151溝跡に並行して東西に走るこの溝跡は、平均して上幅31cm±、下幅14cm±、深さ16cm±の規模をもち、両端は調査区域外へと延びている。埋土はわずかに炭化物・土器片を包含している暗褐色土で占められている。断面形は「U」字形を呈している。底面は一部に凹凸がみられる。検出されている部分の溝跡の長さは21.1m±を計る。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

B-153溝跡 (第15図a, 写真図版35a)

B-151・152溝跡と並行して東西に走るこの溝跡は、平均して上幅42cm±、下幅18cm±、深さ11cm±の規模をもち、両端は調整区域外へと延びている。埋土は炭化物・土器片を包含している暗褐色土で占められている。断面形は「U」字形を呈している。底面は凹凸が多くみられる。検出されている部分の溝跡の長さは21.4m±を計る。溝跡はB-201方形周溝跡を切っている。

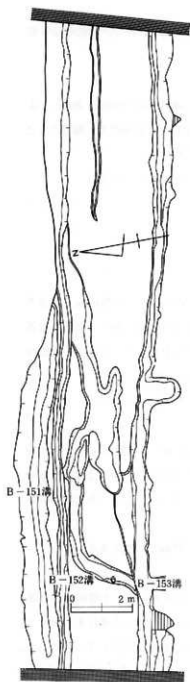
出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

C-151溝跡 (第15図b, 写真図版35b)

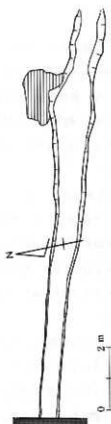
東西に走るこの溝跡は、C-2住居址の南側にあり、平均して上幅86cm±、下幅69cm±、深さ23cm±を計る。東端は調査区域外へ延び、西端は攪乱を受け消失している。埋土は土器片を多く包含している暗褐色土で占められている。断面形は「U」字形を呈している。底面は凹凸が多くみられる。検出されている部分の溝跡の長さは13m±を計る。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

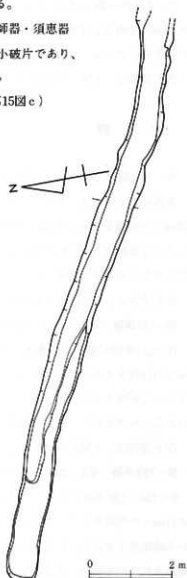
C-152溝跡 (第15図c)



a. B-151・152・153溝跡



b. C-151溝跡



c. C-152溝跡

北西—南東方向に走るこの溝跡はC-2住居址の南側に検出されている。規模は平均して上幅71cm±、下幅64cm±、深さ31cm±を計る。溝跡の東端は攪乱を受け消失している。埋土は下位に多くの黄褐色シルトのブロックを包含している暗褐色土で占められている。断面形は逆台形を呈している。検出されている部分の溝跡の長さは14.2m±を計る。

出土遺物は、土師器・須恵器が少量あるものの小破片であり、詳細は不明である。

(5) 方形周溝跡

検出遺構（第16図，写真図版34b）

C-1住居址の北側にある この方形周溝跡は、外周の長軸6.9m±・短軸6.5m±、溝部の上幅47cm±～61cm±・下幅18cm±～35cm±、深さ6cm±～16cm±の規模をもち、東辺中央部（間隔34cm±）が切れている。断面形はゆるい「U」字形を呈している。底面は凹凸が多くみられる。埋土は黒褐色土の単層で占められている。溝でかこまれた内部からピットは検出されていない。溝部は東側が浅く南側・北側がやや深い。本遺構は東西に走るB-153溝跡に切られている。遺物として土師器片・須恵器片が出土しているが、小破片である。本遺構の時期・性格は不明である。

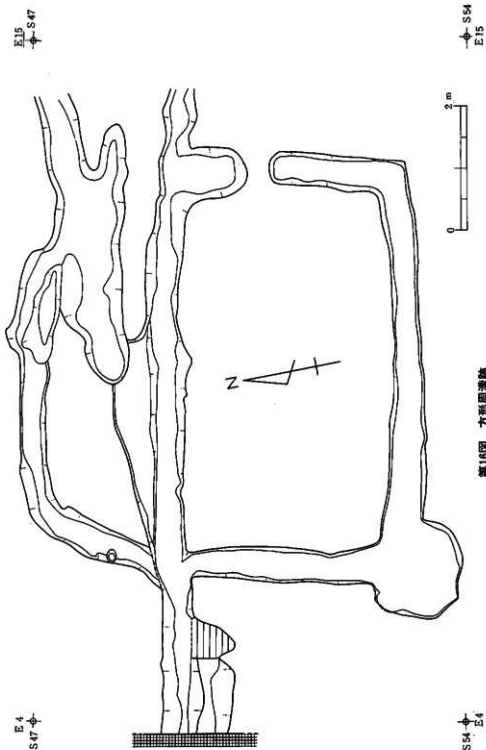
周辺の遺跡では、湯沢B遺跡（三上・1980）から円形周溝跡9基、方形周溝跡1基が検出されている。円形周溝跡はいずれも2カ所以上不連続な部分がある。埋土から内面黒色処理の土師器坏（底部回転ヘラケズリ再調整）、須恵器坏（底部回転糸切り無調整）などが出土している。また宮手遺跡（三上・1980）から、平安時代の住居址を切っている方形周溝跡が1基検出されている。そのほか上平沢新田遺跡（吉田ら・1980）から、隅丸方形周溝跡が検出されている。1つの方形周溝を基本にして北と東に順次周溝が張り出されている。遺構は酸化炭焼成の坏（底部回転糸切り無調整）、須恵器坏（底部回転糸切り無調整）などを出しているピットを切っている。いずれも平安時代に位置づけられるが、その性格については不明である。

（参考文献）

- 三上 昭 1980 「湯沢遺跡B」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 三上 昭 1980 「宮手遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 吉田 勇・千葉周秋 1980 「上平沢新田遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

2. まとめ

古屋敷遺跡は、中田遺跡の南側に隣接して所在し、同様の立地条件のもとにある。



第16図 方形周溝跡

検出された遺構は、竪穴住居址8棟・掘立柱建物跡1棟・ピット6基・溝跡5条・方形周溝跡1基である。

竪穴住居址はいずれも平安時代に属する。中田遺跡と本遺跡の住居址を、時間的に推移する第Ⅰ期～第Ⅲ期に区分したのだが、本遺跡ではC-2住居址が第Ⅲ期に属すると考えられる以外は不明である。ただし、第Ⅰ期に属する古い住居址はない。中田遺跡ではみられなかった拡張住居址や重複が一部にみられる。

掘立柱建物跡は2間×3間の小規模なものである。間尺からは近世に属することも考えられるが、そのような時期を示す遺物は出土していない。

ピット6基のうち、2基は長方形の浅い小形のもの、他の2基は不整形の浅い小形のものである。残る2基は規模が3.4m±～4.2m±と大形になるが、形態がきわめて不安定である。しかし埋土は、層相からは人為的に形成された可能性が高い。いずれのピットも出土遺物は平安時代の土師器と須恵器だけであり、それらの遺物に固有の時期に近接して構築されたピットであろう。性格は不明である。なお、長方形のピットに類似したものは、中田遺跡でも1基が検出された。

溝跡の一部は方形周溝跡と重複するが、住居址と重複関係にあるものはない。形態や規模・深さなどにはばらつきがあるものの、ほぼ東西方向に走る特徴は共通する。遺物は平安時代の土師器や須恵器が出土するが、時期や性格などは不明である。

方形周溝跡は、4辺のうち1辺の中央部は溝が切れ、内部と外部が連絡する。内部に付属施設は伴わない。溝部分の埋土は黒褐色土層の単層であり、包含される遺物は平安時代の土師器と須恵器だけである。類似の形態の遺構は、周辺の紫波町宮手遺跡⁽¹⁾や上平沢新田遺跡⁽²⁾、あるいはやや離れるが都南村湯沢(B)遺跡⁽³⁾などから検出されている。上平沢新田遺跡の例は隅丸方形周溝の名称が使用され、平安時代もしくはそれ以降の年代観があたえられている。湯沢(B)遺跡の場合、主体になるのは平安時代に属すると考えられる円形周溝であり、1基だけ検出された方形周溝はそれよりも時代が下がるが不明とされている。円形周溝との系統的な違い、および発生の時期などが機能を追求する手がかりになるであろう。

出土遺物の大部分が平安時代の土師器と須恵器である。他に同時代の鉄製品・磁石がある。また縄文土器片10数点が住居址埋土から出土したが、時期や器形などの詳細を知ることはできないし、相伴する遺構も検出されなかった。平安時代の土器は、中田遺跡のものとともに第Ⅰ～第Ⅲ群に区分されるが、C-2住居址出土の土器群が第Ⅲ群に属することがわかるだけであり、他の住居址の土器は出土状況や数量の点から区分することを控えた。

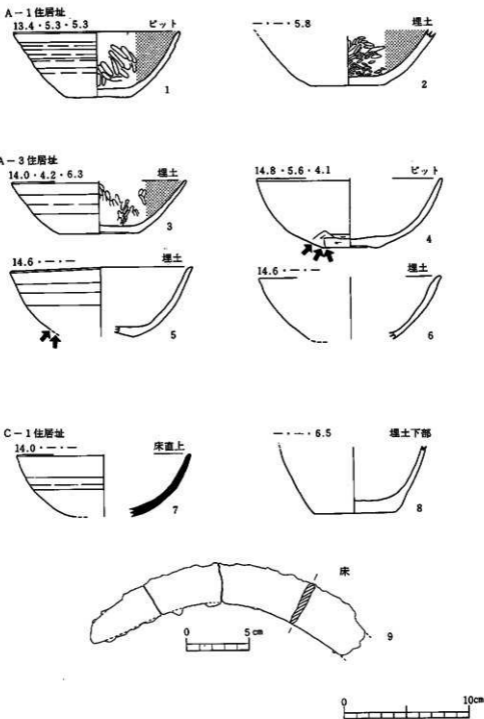
本遺跡は、中田遺跡よりも時間的にやや遅れて平安時代の集落の形成がはじまり、両者は併存して営まれたことであろう。溝跡や掘立柱建物跡など、平安時代集落址との関連が薄いと考

えられる遺構の存在もあるが、その時代や活動の種類は明らかでない。

(光井文行・三浦謙一)

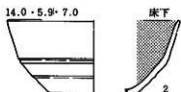
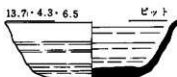
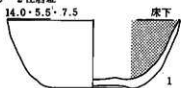
〔註〕

- (1) 岩手県教育委員会 (1980) : 宮手遺跡『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- (2) 岩手県教育委員会 (1980) : 上平沢新田遺跡『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
- (3) 岩手県教育委員会 (1979) : 湯沢(B)遺跡『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

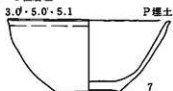


第17図 出土遺物 (A-1住居址・A-3住居址・C-1住居址)

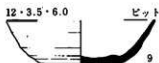
C-2 住居址



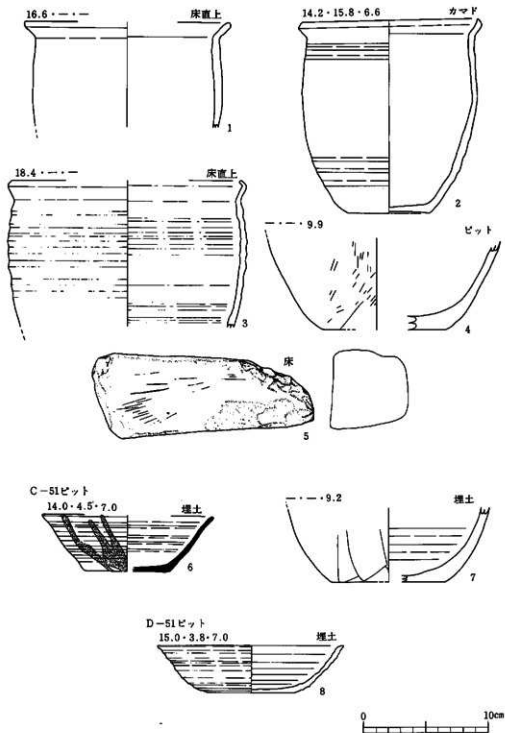
D-1 住居址



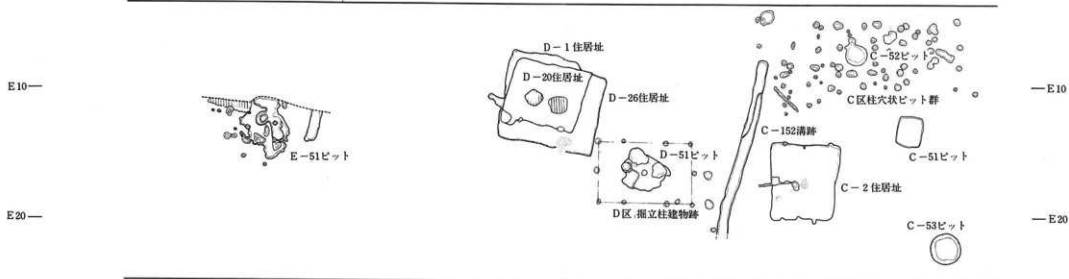
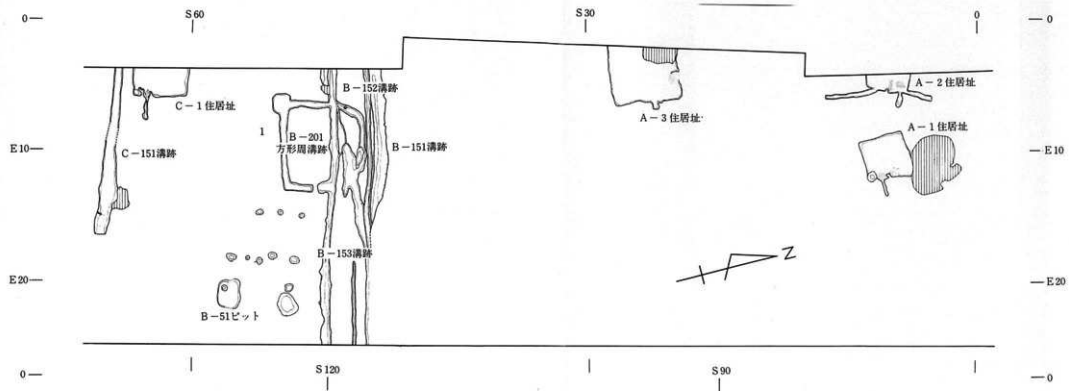
D-2b 住居址



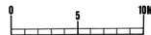
第18図 出土遺物 (C-2 住居址・D-1 住居址・D-2 b 住居址)



第19図 出土遺物 (D-2b住居址・C-51ビット・D-51ビット)



第20図 古屋敷遺跡構配置図



V. 遺構・遺物のまとめ

1. 奈良時代の住居址（稲村遺跡）

当遺跡で検出された竪穴住居址について概要をまとめる。検出された竪穴住居址は3棟で、いずれも重複・増改築等はなかった。そのうち完掘できたのは2棟だけで、他の1棟は南側半分が調査区域外にある。規模は一辺が3.9～4.5mのものが2棟、他は一辺6.5mと推定される。平面形は隅丸方形とやや不整隅丸方形の2種類がある。柱穴・貯蔵穴はなく、壁溝が検出されたのはB-23住居址である。

カマドについて述べると、カマドはE-16住居址・H-10住居址が北壁中央部に、B-23住居址が北壁やや東寄りに構築されている。袖部はシルトで構築され、芯材に礫を用いたB-23住居址と小型の甕を用いたE-16住居址がある。

煙道部は壁外にあり、燃焼部より緩やかな下り勾配で煙出し部につづく。煙道部は溝状に掘りこまれたE-16住居址・H-10住居址とくりぬき式のB-23住居址がある。

壁溝・カマドの位置・煙道部構造などの相違点から形態上は2期に分類される。Ⅰ期は壁溝を有し、カマド位置が北壁中央部よりやや東に寄り、煙道部がくりぬき式のもの。Ⅱ期は壁溝はなく、カマド位置が北壁中央部にあり、煙道部が溝状のもの。Ⅰ期はB-23住居址、Ⅱ期はE-16住居址、H-10住居址である。

2. 奈良時代の遺物（稲村遺跡）

出土した遺物について、土器を中心として概要をまとめる。土器は甕1点を除いて全て土師器である。坏と甕は形態の分類を行った。

〈坏〉坏はロクロ使用の有無で大別し、さらにロクロ未使用のものは形態によって分類した。

- A類（ロクロ未使用）
- I 体部に沈線、段を有し口縁部が外傾するもの。
 - II 体部に沈線、段を有し口縁部が内弯気味になるもの。
 - III 体部に沈線、段をもたないもので口縁部が外傾するもの。
 - IV 体部に沈線、段をもたないもので口縁部が内弯気味になるもの。

B類（ロクロ使用） 底部切り離しが回転糸切りのもの（E-16住居址より1点出土）。

器形は外傾して立ち上がるものが9点、内弯気味なものが7点ある。底部はAⅠ～AⅡ類が丸底～丸底風平底、AⅢ～AⅣ類が平底である。内外面とも磨滅しているものが多いが、外面磨き調整、内面は磨き調整後黒色処理を施している。

〈甕〉甕はロクロ使用の有無で大別し、ロクロ未使用の土器は法量と形態で分類した。

- A類（ロクロ未使用）
- I 口径16cm以上のもの。

- a 頸部に沈線、段をもたないもの。
- b 頸部に沈線、段を有するもの。
- c 頸部に沈線、段を有し口唇部を引き出すもの。
- d 頸部に沈線、段を有し胴部に最大径をもつもの。

II 口径16cm以下のもの。

- a 頸部に沈線、段を有するもの。
- b 頸部に沈線、段を有し口径よりも器高の値が大きいもの。

B類（ロクロ使用） I 還元焙焼成によるもの（須恵器）。

A類では口縁部は外反するものが多い。調整は口縁部内外面とも横撫で、体部外面は刷毛目・撫で、内面は一部に刷毛目が見られるが撫でによるものが大半を占める。B-23住居址より、内面に黒色処理を施した痕跡が見られるものが2点出土している。B類は口縁部破片がH-10住居址より出土している。

〈鉢〉 鉢はE-16住居址より1点、H-10住居址より5点出土し類似する。調整は体部外面横方向の寛磨き、内面は寛磨き後黒色処理を施している。底部は平底と丸底風平底がある。

〈壺〉 壺はB-23住居址とE-16住居址より出土している。胴張りする器形である。

〈手捏ね土器〉 調整は指撫でと寛削りがある。B-23住居址からの出土が多い。

出土した土器は上記の通りである。各住居址ごとのA類環・甕については形態、調整技法で若干の差異はあるものの時期差は見いだされない。数的には環A類ではAI~AII類、甕A類ではAIb~AIIc類が多くなる。住居址ごとの共伴関係でみると、E-16住居址は土師器鉢とロクロ使用環破片、H-10住居址は鉢と須恵器を伴出する。これらのことより住居址は、ロクロ未使用だけのものとロクロ使用及び須恵器と共伴するものの2期に分けられる。I期（ロクロ未使用）B-23住居址。II期（共伴）E-16住居址、H-10住居址である。

I~II期に類似する土器構成をもつ周辺部の遺跡は、都南村百目木遺跡⁽¹¹⁾が上げられる。しかし百目木遺跡においては、ロクロ未使用の土師器鉢を共伴する類例は見られなかった。鉢を共伴しているのは当遺構における特徴であろう。ロクロ未使用の土師器は、従来東北部では前期土師器⁽¹²⁾、I型式として捉えられてきているが、当遺構の土器もその概念に入るものである。またI期~II期への時間的な移行は、土器等から見てあまり時間差はないと考えられる。ロクロ使用の土器、須恵器が共伴することから、ロクロ未使用からロクロ使用へ移行する過渡期的な様相を示している。土器とともに鍛冶道具の鉄鉗、農具の鋤先も出土しており、当地方において鍛冶生産も行われたことがうかがえる。時代としては奈良時代の終りから平安時代初期にかけての集落であろうと考えられる。当集落と鍛冶生産の関わり、北方3.6kmの徳丹城との関連を言及できなかつたが、別の機会に述べてみたい。

〔注 記〕

- (1) 佐藤和男・ 百目木遺跡発掘調査報告書 郡南村教育委員会 昭和54年 3月
(2) 草間俊一 盛岡市史史 昭和33年
(3) 板井清彦 館 址 昭和33年

(高橋義介)

3. 平安時代の住居址 (中田遺跡・古屋敷遺跡)

中田・古屋敷遺跡から平安時代の竪穴住居址が14棟検出されている。五内川をはさんだ対岸の稲村遺跡からは検出されていない。調査された14棟のうち、5棟は住居址の一部または大部分が調査区域外にある。今回調査した部分は遺跡全体の一部にしかすぎず、集落の機能や形態・規模・構造などを究明することは非常にむずかしく、本稿では遺物によって3期に分類される住居址を主として、住居址構造の変遷をみていきたい。

I期に属する住居址は、中田B-4住居址、中田B-5住居址である。

II期に属する住居址は、中田B-2住居址、中田B-3住居址である。

III期に属する住居址は、中田B-1住居址、古屋敷C-2住居址である。

住居址の正面形は、正方形のもの7棟、不整形のもの1棟、長方形のもの3棟である。住居址の形態は正方形を基本にしている。I期の住居址は正方形である。II期の住居址2棟のうち1棟は正方形、他の1棟は各辺の長さの相違で不整形である。III期の住居址は正方形のものと同長方形のものが混在する。III期にはじめて住居址の平面形が長方形であるものが出現している。

住居址を規模別にみると、平面形が正方形のものであるうち、一辺が4.5m以下のもの4棟、4.5mを越えて5.5m以下のもの3棟、5.5mを越えるものが1棟である。平面形が長方形である住居址は3棟とも長軸が5.5m以上である。I期の住居址は2棟とも4.5mを越えて5.5m以下である。II期の住居址はいずれも4.5m以下である。III期の住居址は平面形に関係なく長軸が5.5m以上である。各時期によって規模に差異がみられる。II期の住居址が最も小さく、III期のものが最も大きい。

住居址の床面は、貼り床が施されていないもの8棟、一部に貼り床が施されているもの7棟、ほぼ全体にわたって貼り床が施されているもの1棟である。I期の住居址にはいずれも中央部カマド寄りに貼り床が施されている。II期の住居址は、1棟が東壁近くに貼り床が施され、他の1棟が施されていない。III期の住居址には貼り床が施されていない。

住居掘り方のもつ住居址は3棟である。3棟のうち1棟はI期の住居址、1棟はIII期の住居址、残り1棟は時期がはっきりしないものである。

柱穴が検出された住居址は3棟である。柱穴の総数は4本でいずれも全体として東壁に寄っ

ている。3棟のうち1棟はⅢ期の住居址である。他の住居址2棟は所属する時期がはっきりしないものである。

カマド本体の位置は、東壁中央部南寄りのも8基、東壁中央部北寄りのも2基、北壁中央部東寄りのも2基、南壁中央部東寄りのも3基である。カマドは壁中央部から一方に寄った部分に設けられる傾向がある。Ⅰ期の住居址は東壁中央部南寄りに設けられている。Ⅱ期の住居址のうち1棟は東壁中央部北寄りに、1棟は東壁中央部南寄りにつくられている。Ⅲ期の住居址のうち1棟は南壁中央部東寄りに、他の1棟は北壁中央部東寄りにはじめ設けその後東壁中央部北寄りにつくりかえられている。Ⅰ・Ⅱ期の住居址は東壁に設けられている。Ⅲ期の住居址にはバラつきがある。

カマドの煙道部はトンネル状のものが2基検出されている。そのほかのものは溝状に掘りあげられているものである。トンネル状の煙道部をもつ住居址2棟のうち、1棟はⅠ期の住居址でそれを放棄した後溝状のものにつくりかえてある。他の1棟はⅢ期の住居址である。

カマドそばに貯蔵穴に類した機能をもつと考えられるピットが検出されている。このピットを伴う住居址は6棟ある。6棟のうち2棟はⅡ期住居址で、他の4棟は所属する時期がはっきりしないものである。

住居址の配置をみると、Ⅰ期の住居址2棟、Ⅱ期の住居址2棟は互いに隣接している。Ⅲ期の住居址のあり方については検出された遺跡が違うので不明である。

住居址の分布は中田遺跡が調査区のほぼ中央部に切り合うことなく集中して検出されているに対し、古屋敷遺跡は南北に長いためもあって3ヶ所に分散的に存在する。

以上をまとめると、Ⅰ期に属する住居址は一辺4.5m～5.5m以下の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈している。カマドは東壁中央部南寄りに設けられている。床面は中央部からカマド寄り的一部に貼り床が施されている。住居掘り方のもつものともたないものがある。柱穴は検出されていない。貯蔵穴に類したピットは伴わない。

Ⅱ期に属する住居址は一辺4.5m以下の規模をもち、ほぼ正方形の形状を呈している。カマドは東壁中央部北寄りまたは南寄りに設けられている。床面は一部貼り床の施されたものとされないものがある。住居址掘り方はもたない。柱穴は検出されていない。貯蔵穴に類したピットを伴う。

Ⅲ期に属する住居址は、平面形がⅠ・Ⅱ期の住居址の形態である正方形のほかに長方形が出現してくる。規模は長軸5.5m以上と大規模化している。カマドの位置もⅠ・Ⅱ期の住居址と同じ位置のほかに南壁に設けられる住居址がでてくる。床面は貼り床が施されていない。住居址掘り方のもつものともたないものがある。柱穴は検出されているものとされないものがある。貯蔵穴に類したピットを伴うものと伴わないものがある。

住居址の形態・規模・構造などからみて、遺物でははっきり分けられなかった住居址のうち、中田A-2住居址、古屋敷A-1住居址はⅡ期に、古屋敷D-2a・2b住居址はⅢ期に属するものと考えられる。(光井文行)

4. 平安時代の土器 (中田遺跡・古屋敷遺跡)

(1) はじめに

中田遺跡・古屋敷遺跡は平安時代の集落址を主体にした遺跡である。本稿では、ほぼ類似した内容をもつ2遺跡の土器をあわせてとりあげ、様相を考察してゆく。考察の対象は土師器・須恵器の土器に限定し、それ以外の遺物一縄文土器片・鉄製品・砾石—はごく少量で、遺物の内容を十分に把握するだけの資料性にとぼしいため、除外した。

この時代の東北地方には、「須恵系土器」⁽¹⁾・「あかやき土器」(小笠原, 1976)・「赤褐色土器A・B」(小松, 1976)・「土師質土器」(伊藤ほか, 1977)・「相去B₁土器」(高橋, 1977)などの名称で呼ばれる一群の土器が普遍的に存在し、2遺跡でも数多く出土している。

本稿では、それら一群の土器が分類群としては同一のものであり、技術系統的にみた場合、須恵器の系統に含めるべきであるという立場をとる。須恵器には、還元炎焼成土器(群)と酸化炎焼成土器(群)との2型が存在するとの作業仮説をもつからである。⁽²⁾

その2型の存在は坏と高台付坏において識別でき、本報告書ではその2器種に使用した。もちろん、他器種⁽³⁾にも存在する可能性はあるが、器種別の分業生産体制がどの程度に発達していたかにかかわってくる問題であり、ここではこれ以上ふれないことにする。

(2) 分類

器種には次のものがある。土師器は坏と甕・鉢・高台付坏・塀、須恵器は坏と甕・高台付坏・壺などである。出土数量をみると、土師器では坏と甕、須恵器では坏が圧倒的に優占する。その外の器種は出土数量が少ないうえに破片が主になるため、全容の把握が困難である。類型化できるだけの普遍性や数量を考慮し、土師器の坏と甕・須恵器の坏にかぎって分類をおこない、他は必要に応じて器種名をあげてゆく。

分類は、土師器と須恵器とに大区分し、ついで土師器をロクロ使用の有無、須恵器を焼成技法によって区分した(図1)。土師器・須恵器とも坏は、ロクロからの切り離し技法およびその後に加えられる調整技法の有無によって細分される(図2)。なお後述するが、土師器甕は法量によって大小に区分が可能である。

ロクロからの切り離し技法とその後に加えられる調整技法の有無は坏の変遷を知るひとつの指標になる(阿部, 1971; 岡田ほか, 1974など)。糸切りには回転糸切りと静止糸切りとの2技

法が知られる。しかし静止糸切りはその例がなく、すべて回転糸切りであった。同様に、回転ヘラ削りも例がなく、調整技法は手持ちヘラ削りだけである。

調整が加えられる部位は、1. 体部下端～底部全面、2. 体部下端～底部周辺、3. 体部下端、4. 底部全面、5. 底周辺のいずれかに該当する。

図1

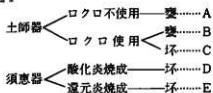


図2



形態は、器種にもよるが、個体差が著しい。もちろん、個体差に収斂されない形態的特徴は分類が可能であるが、共存関係にある同系統同器種の場合でも、形態の組み合わせはランダムなことが多く、ここでは主な器種の形態的特徴と調整技法を列記し、分類はおこなわないことにする。

土師器変；ロクロ不使用の変には、1. 体部がやや膨らみ、頸部には明瞭な段が形成され、口縁部はゆるやかに外反してやや長いもの、2. 体部がわずかに膨らみ、口縁部は外反して短いものがあり、いずれも長胴形である。調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がヘラ削りや刷毛目、内面がヘラナデや刷毛目である。2には外面にタタキ目痕をもつ例がある。

ロクロ使用のものには、1. 頸部がややせばまって体部と口縁部が明瞭に区別され、口縁部は外反して短いもの、2. 体部から口縁部に直接移行し、口縁部は外反して短いものがあり、口唇部が上方に挽きだされる例は両者にみられる。ロクロ調整痕だけをもつ例は小形の變をのぞいてはほとんどなく、体部外面にはヘラ削り、内面には刷毛目やヘラナデの調整が加えられることが多い。

法量による分化はロクロ使用・不使用をとわず認められる。だが、ロクロ不使用の変は数値をあげて大小に区分するだけの類例にとぼしく、漠然とした大形・小形の識別ができるだけである。ロクロ使用の場合、図化できた例から口径の数値（破損品が多いため、器高の数値は採用できない）を基準にし、16.5cm前後を境に、小形（B₁類）と大形（B₂類）とに一応わけることができる。

土師器鉢；類例は少ないが、小形のものにみられる。ロクロ不使用の例は中田遺跡B-4住居址から出土したが、あるいは、小形變の範疇に含めて考えてもよいのかもしれない。頸部には明瞭な段が形成され、口縁部は外反し、内外面とも刷毛目によって調整される。ロクロ使用のものは器高よりも口径の値が大きい。口縁部はわずかに外傾し、口唇部が内側に挽きだされる。体部下端には手持ちヘラ削り調整が加えられる。

土師器環；細部の形態差は個体差に収斂すると考えられる。法量的なばらつきが機能的な分化に結びつくものはないであろう。

土師器高台付環；破片の出土が少量あるだけで、器形の全容は不明である。環部は内面が黒色処理され、「ハ」字状に裾が開く低い高台がつく。

土師器罎¹⁾；図化した1点（中田遺跡B-5住居址出土）だけである。底部から口縁部へ急激に外傾し、口縁部は屈曲して口唇部が上方にわずかに挽きだされる。ロクロ調整され、体部外面はタタキ目痕があるうえをへら削りしている。

須恵器環；酸化炭焼成と還元炭焼成の2型がある。ロクロからの切り離し技法にはへら切りと糸切りがあり、その後に加えられる手持ちへら削り調整はその両者に認められる。へら切りの環は口径に対する底径比が大きく、糸切りの環とは形態的な隔りがある。圧倒的に多い糸切りの環の形態差や法量差に関しては土師器環と同様のことがいえるであろう。

須恵器高台付環；酸化炭焼成に分類される破片が若干出土している。環部の形態が明らかな資料は1点しかないが、体部は底部から口縁部に向い直線的に外傾する。高台部は裾が開く低い高台がみられる。

須恵器甕；出土量が少ないうえに体部破片が主であり、器形の全容は不明である。大部分が中形～大形の甕の破片であろう。図化できたのは口縁部～肩部にかけての1点（中田遺跡B-2住居址）だけである。破片で多く観察できる調整は、外面にタタキ目文やへら削り痕、内面にはナデ腐やアテ道具痕である。

須恵器壺；長頸壺があることは知られるものの、器形の全容を把握できる資料はない。また体部破片は須恵器甕と識別できない場合も多く、この器種がもつ内容は不明である。

(3) 住居址出土土器の様相

住居址から出土した土器がもつ様相を検討する。この場合、遺構に確実に共存する、あるいはごく近接した時間幅のなかで遺構に固有のものとなったと考えられる資料の操作が要求され、しかも完形品であることがのぞましい。だが出土数量や残存状態には制約があり、実際には図化できた程度の破片（原則的には口径あるいは器高の $\frac{1}{2}$ 以上の残存するもの）も資料としてもちい、図化できなかった小破片も参考にした。共存資料よりもむしろ数量的に量的に優占的な埋土や住居址内ピット等からの出土土器は、多くの場合、参考資料にとどめておいた。

まず住居址別に土器の組成を概観し、次に様相と時期を検討したい。

a. 中田遺跡

A-1住居址；遺構に伴う確実な資料はほとんどない。埋土やピットからはA類・DⅢ類・EⅣ類が出土する。破片では、B類がA類に卓越し、CⅢ類・CⅣ類・DⅢ類・DⅣ類がある。他に土師器高台付環・須恵器甕の破片が少量出土した。

A-2住居址；遺構に伴う確実な資料はほとんどない。共伴する破片資料には、B類がA類に卓越し、C類・DⅣ類・E類があるものの少量である。埋土やピットをみると、B類がA類に卓越し、CⅢ類とそれよりも数量がやや多いD類が出土した。燻出し埋土ではCⅣ類とDⅣ類の完形品各1個が共伴する。他に須恵器甕・須恵器壺・須恵器器種不明の破片が出土した。

B-1住居址；B₁類・B₂類・CⅣ類・EⅣ類が遺構に伴う。破片でもB類がA類に卓越し、E類が多い。埋土やピットでは、B₂類が量的に多いほか、短かい口縁部が外反するタイプのA類も若干出土する。CⅣ類・DⅣ類・EⅣ類の坏ではEⅣ類が卓越する。このことは破片でも同様である。他に土師器高台付坏・須恵器甕・須恵器長頸壺などの破片がある。

B-2住居址；A類・B類・CⅥ類・DⅢ類・DⅣ類が遺構に伴い、E類を欠く。B₂類はA類に卓越し、A類は長い口縁部がゆるやかに外反して頸部に段を有するタイプである。破片では、DⅥ類が他の坏に比べて多く、少量のE類もみられる。他に須恵器甕の破片がある。埋土やピットからB₁類・CⅣ類・DⅢ類・DⅣ類が出土した。破片は共伴資料と異なり、C類が他の坏に比べてやや多い。他には須恵器甕の破片がある。

B-3住居址；坏の点数が多いのはピットからの出土が多いためである。B₂類・DⅣ類が遺構に伴う。破片では、B類がA類に卓越するほか、C類・DⅢ類・DⅣ類・E類が出土した。埋土やピット出土の土器には、A類・B類・CⅢ類・CⅣ類・DⅢ類・DⅣ類・EⅣ類・須恵器酸化炎焼成高台付坏がある。破片ではB類がA類よりやや多く、D類はC類に卓越してE類は少ない。他には須恵器酸化炎焼成の高台付坏の破片がある。

B-4住居址；A類およびB類の小形甕・DⅢ類・EⅠ類・EⅡ類が遺構に伴う。EⅠ類の坏は小形、またEⅡ類の1点は口径に対しての底径比が大で器高も低い点で独自の形態をもつ。破片にはE類がある。埋土からはA類・B₂類が出土し、B₂類のものは外面に叩き目痕が残る。破片では、A類がB類に卓越し、坏では、D類・E類がC類を超える。他には須恵器甕・須恵器壺の破片が少量ある。

B-5住居址；DⅠ類・DⅡ類が遺構に伴うが、破片の共伴資料も少なく詳細は不明である。埋土やピットからはB₂類・EⅣ類、それに土師器壺がある。破片ではB類がA類に卓越し、坏ではD類がC類・E類に比べてやや多い。他には須恵器甕の破片がある。

b. 古屋敷遺跡

A-1住居址；出土物が少なく詳細は不明である。遺構に共伴する資料は破片でしか知ることができないが、B類・CⅣ類・DⅣ類がある。埋土やピットからはCⅣ類が出土し、破片でもCⅣ類・DⅣ類が少量ある。

A-2住居址；出土物が少なく詳細は不明である。図化できた資料もない。破片からは、D類とEⅡ類が遺構に伴い、B類に比べるとやや多いA類やC類・D類・E類が埋土にあるこ

とが知られる。

A-3住居址；図化できた共伴資料はDⅣ類1点だけである。破片では、土師器變は少ないなかでB類がA類を越え、坏ではCⅢ類・CⅤ類ほかのC類がDⅣ類・EⅣ類に比べてやや多い。埋土やピット出土のものにはCⅣ類・DⅢ類・DⅣ類がある。破片では、B₁類・B₂類がA類に卓越し、B類の1点は体部下端に手持ちヘラ削りの調整が加えられる。他にCⅣ類・D類・E類があるが、E類は僅少である。

C-1住居址・遺構に共伴する資料はDⅣ類の1点が図化できただけで、破片での詳細も不明である。同様に、埋土からはA類の1点が図化できただけで、破片には須恵器變・須恵器長頸蓋などがある。

C-2住居址；CⅣ類・EⅣ類が遺構に伴う。破片では、B₁類・B₂類がA類に卓越し、C類がD類・E類よりやや多い。住居址のほぼ床面まで削割してしまったこともあり、埋土出土のものについては不明である。

D-1住居址；重複するD-2住居址に切られて残存状態が悪いうえに2住居址の遺物との識別ができなかったため、固有の資料はピットから出土したDⅣ類1点だけにすぎない。

D-2住居址；拡張住居址であり、新(D-2a住居址)・旧(D-2b住居址)に分けられる。しかし、精査の段階では1棟の住居址を想定していたため、遺物の帰属にやや混乱が生じた。埋土や床面・新旧の住居址に帰属が判明するピットやカマドから出土した遺物は2棟のいずれかに固有のものと確認できる。ここでは新しいD-2b住居址から出した確実な遺物だけををあつかうことにする。

遺構に伴うのはB₁類・B₂類・DⅣ類・EⅢ類である。破片資料ではCⅣ類を含むC類がD類・E類に比べてやや多い。埋土やピットからはEⅡ類・EⅣ類が出土する。破片はB類がA類に卓越し、EⅡ類とEⅣ類を含むE類がC類・D類を越える。B類ではB₁類の破片数がやや多い特徴をもつ。他には須恵器變の破片がある。

c. 様相と時期

土師器と須恵器の坏は、一般的にヘラ切りから糸切りへ、その後に加えられる調整も調整されるものから無調整のものへと推移する(阿部, 1971; 岡田ほか, 1974)。また、土師器の甕はロクロ不使用からロクロ使用へ移行する。この2つの作業仮説にしたがって、土器がもつ様相を住居址との関連で検討するが、その際に指標としたのは須恵器の坏で(D類・E類)、他は共伴関係としてあつかってゆく。

第Ⅰ群；D類・E類ともヘラ切りで、調整が加えられるものと無調整とが混在する。中田遺跡B-5住居址はDⅠ類・DⅡ類に古い様相をもつA類を伴う。中田遺跡B-4住居址はEⅠ類・EⅡ類にDⅢ類・B類を伴う。

第Ⅱ群；糸切りのD類が優占的であるが、調整が加えられるものと無調整のものが混在する。中田遺跡B-2住居址・B-3住居址は、共伴資料・埋土資料ともD類がC類・E類に卓越する。共伴する壺はいずれもA類に卓越するB類である。

第Ⅲ群；糸切りのE類が優占し、無調整である。中田遺跡B-1住居址ではEⅣ類がC類・D類に卓越し、埋土ほかからのE類の資料にも調整が加えられるものはみられない。A類とB類が共伴するが、B類が卓越する。古屋敷遺跡C-2住居址もこの群に含めて考えることができ、CⅣ類が共伴している。

以上のように、中田・古屋敷遺跡では須恵器の坏を指標にした3群の存在が考えられる。各群の時間的な関係は、先の作業仮説からは第Ⅰ群→第Ⅱ群・第Ⅲ群の推移が予想される。

第Ⅰ群をみるとヘラ切りの段階ですでにD類とE類が併存し、しかも調整が加えられるものと無調整とが併存することが指摘できる。E類をもつ中田遺跡B-4住居址は古い様相を示すB類とともにDⅢ類を伴っている。これに対し、D類をもつ中田遺跡B-5住居址は共伴する土師器壺を欠く。けれども、B-4住居址ではEⅡ類とDⅢ類がカマドの袖に芯材につかわれて確実な共伴例となることを考慮するならば、DⅠ類・DⅡ類→EⅠ類・EⅡ類へと推移した可能性も考えられる。

第Ⅱ群はDⅢ類・DⅣ類が卓越し、第Ⅲ群ではEⅣ類にCⅣ類が共伴する。技法の面からは第Ⅱ群→第Ⅲ群への推移が考えられるが、そのためにはC類・D類・E類間の対応関係、およびそれぞれの技術的な発展の段階がどのように展開されたかが問われてくる。

岩手県で須恵器の在地生産が可能になる以前は、その搬入品をのぞいては土師器が唯一の土器であった。やがて須恵器の生産が始まり、その影響のもとに土師器も技術的に変化をとげてゆく。この場合、ロクロ土師器坏の初現形態は回転糸切りでその後調整を加えられるものであり、ヘラ切りを一時期の主要技法にもつ須恵器とは技術段階が異なるものであった。北上川中流域⁽⁸⁾では(搬入品でないとい一般的にみられる)ヘラ切りの須恵器には、1. ロクロ未使用坏、2. ロクロ未使用坏とロクロ使用坏との共伴、3. ロクロ使用坏、と様相を異にする土師器坏が共伴する(佐々木, 1980)。須恵器においてヘラ切り技法と糸切り技法は、土器製作上の本質的な相違ではないと指摘(阿部, 1971; 岡田ほか, 1974)されていても、前者から後者への移行は受入れられている(岡田ほか, 1974)。

したがって、ヘラ切り須恵器を指標にした第Ⅰ群は他の2群よりも時間的に先行するであろう。この第Ⅰ群における土師器坏は不明である。第Ⅱ群のDⅢ類・DⅣ類・(EⅣ類)に共伴する土師器坏はCⅢ類とCⅣ類である。この段階では須恵器坏と土師器坏とは技術的に対応関係をもつと考えられ、第Ⅲ群はいずれも無調整のものが主体を占める段階である。第Ⅱ群・第Ⅲ群におけるC類・D類・E類の比率は、第Ⅱ群はD類が卓越、第Ⅲ群はE類の卓越によって示

されるものの基本形は混在である。そのあり方は相互補完的ではなく、併存状況における量的変化である。第Ⅰ群にみられたD類とE類の併存は第Ⅲ群においても確認できる。

岩手県で須恵器が生産開始された時期を伊藤(1976)は9世紀前半代にみている。そして岡田ほか(1974)は、須恵器環のへら切り技法から糸切り技法への主要な変化点を東北地方ではほぼ9世紀後半にあると考えている。各群に年代観をあたえるべきであろうが筆者はその資料をもたない。ここでは伊藤の見解にしたがい、第Ⅰ群を9世紀前半代に考えたい。しかし第Ⅱ群・第Ⅲ群については不明としておく。

(4) ま と め

中田遺跡・古屋敷遺跡では、住居址から出土した土器を、須恵器の環を指標にして第Ⅰ群から第Ⅲ群の3群に分けることができる。それは時間的に推移するものと考えられ、住居址はそれぞれに対応した第Ⅰ期～第Ⅲ期に分けることが可能である。

岩手県で須恵器生産が開始された時期とその様相については不明の点が多い。2遺跡の南西数百mのところには無調整のへら切り須恵器環を出土する未調査の須恵器窯跡がある(杉ノ上Ⅱ遺跡)。中田遺跡から出土した須恵器環との関連が注目される。

第Ⅰ群に分類した土器の時期の遺跡は、紫波地方でも少数が明らかになっているにすぎない。集落として増加する傾向にあるのは次の第Ⅱ群に分類した土器の時期になってからである。それは単に土器にあらわれた変化では説明がつくものではなく、社会構造の変化を伴った大きな要因にもとづくものであろう。

〈注 記〉

- (1) 「須恵系土器」のよび方は「宮城県多賀城跡調査研究所年報1970」が初見である。その後、桑原(1976)は「須恵系土器について」を発表しており、その論文を参考にした。
- (2) 筆者も参加する「平安時代研究会」(代表、高橋信雄)がテーマのひとつにとりあげ、共同討議を加えてきたものである。詳細は論文として発表する予定である。
- (3) たとえば小笠原(1976)は、環・高台付環のほかに皿・高台付皿・耳皿・鉢・甕などの器種を指摘している。
- (4) ここでは「塙」としたが、人によっては「盤」の器種名をもちいている。

〈文 献〉

- 阿部義平(1971): ロクロ技術の復原 考古学研究 第18巻第2号
伊藤博行(1976): 岩手県の古代土器生産について—須恵器のロクロ土師器の案審— 岩手史学研究, 第61号
伊藤博行(1977): 「胆沢城跡—昭和51年度発掘調査概報—」 岩手県水沢市教育委員会
岡田茂弘・桑原滋郎(1974): 多賀城周辺における古代環形土器の変遷「研究紀要Ⅰ」
宮城県多賀城跡調査研究所
小笠原好彦(1976): 東北における平安時代の土器についての二、三の問題 東北考古学会編「東北考古学の諸問題」 寧楽社

- 桑原滋郎(1976)：須恵系土器について 東北考古学会編『東北考古学の諸問題』寧楽社
- 小松正夫(1976)：『昭和50年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会
- 佐々木 勝(1980)：『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書一Ⅳ一』岩手県教育委員会
- 高橋信雄(1977)：岩手県のロクロ使用土師器について 考古学研究, 第2号
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1970)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1970』

(三浦謙一)

写 真 图 版



a. 南から



b. 東から

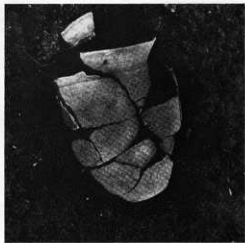
写真図版 航空写真



a. B-23住居址(南より)



B-23住居址(カマド)
b. カマド(南より)



B-23住居址
c. 土器出土状況

写真図版 2 稲村遺跡



a. E-16住居址土器出土状況(北より)



b. カマド周辺(南より)

写真図版 3 稲村遺跡



a. H-10住居址(北東より)



b. 銅先出土状況

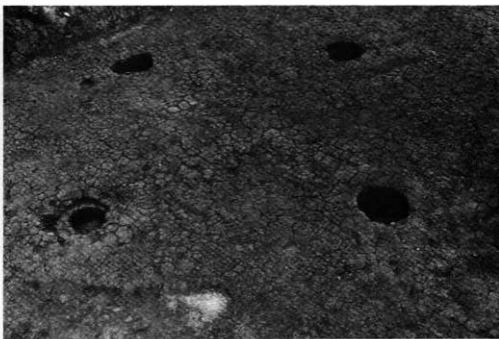


c. 須恵器壺出土状況

写真図版4 稲村遺跡



a. C-19掘立柱建物跡(東より)



b. E-23掘立柱建物跡(西より)

写真図版 5 稲村遺跡



a. B-27陥し穴状遺構(北より)



b. C-28陥し穴状遺構(北より)



c. D-04陥し穴状遺構(北東より)



d. G-08溝(北東より)

写真図版 6 稲村遺跡



a



b

B-23住居址 a (S = 1/5) b ~ C (S = 1/5)



c



d

E-16住居址
d ~ e (S = 1/5)



e

写真図版 7 稲村遺跡



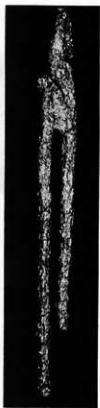
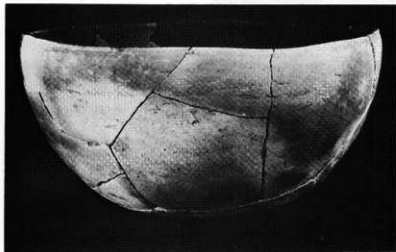
E-16住居址(S=3/4)



写真図版 8 稲村遺跡



E-16住居址 (S=1/3)



写真図版9 稲村遺跡



a



e



b

H-10住居址
a-d (S=1/2)
e-g (S=1/4)



f



c

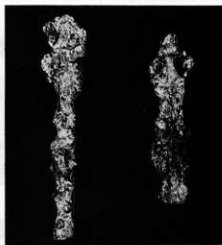
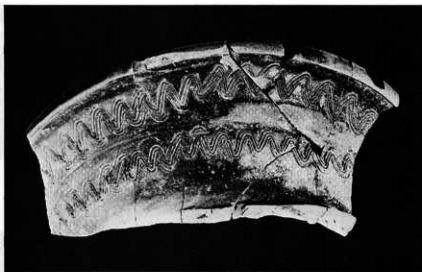


g



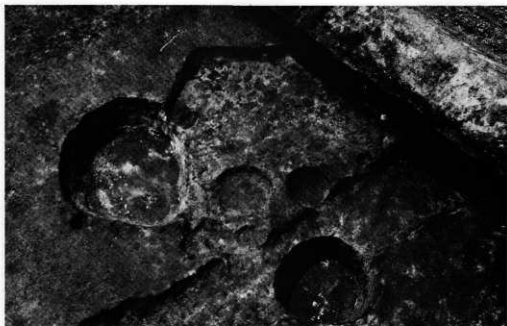
d

写真図版10 稲村遺跡



H-10住居址
a~b(S=1/4)
c(S=原寸)

写真図版II 稲村遺跡



a. A-1 住居址



b. A-2 住居址

写真図版 12 中田遺跡



a. B-1 住居址

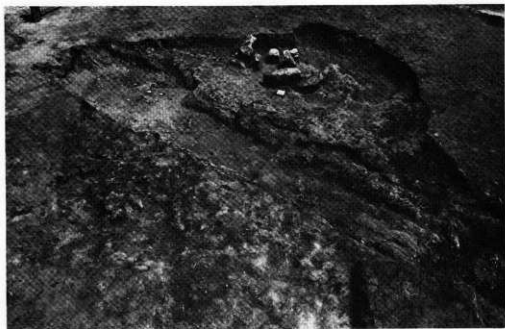


b. B-1 住居址カマド

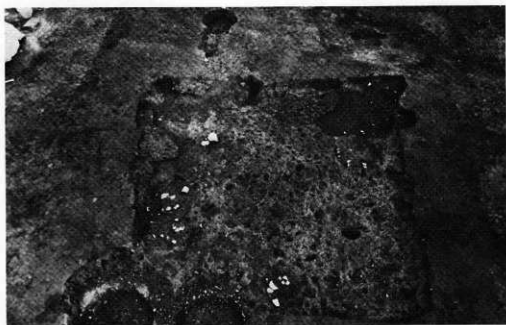


c. B-1 住居址煙道

写真図版13 中田遺跡



a. B-2 住居址



b. B-3 住居址

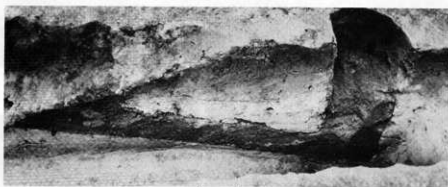
写真図版14 中田遺跡



a. B-2 住居址(カマド)



b. B-4 住居址(カマド)



c. B-4 住居址(煙道部断面)



d. B-4 住居址(左袖部)



e. B-4 住居址(遺物出土状況)

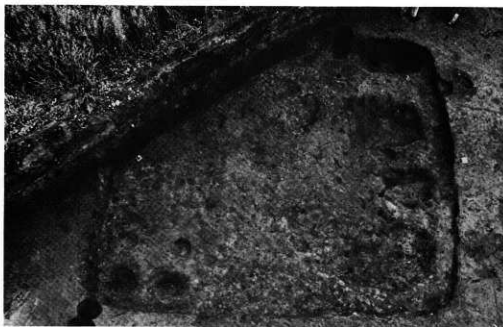


a. B-4 住居址



b. B-4 住居址(貼り床除去後)

写真図版16 中田遺跡

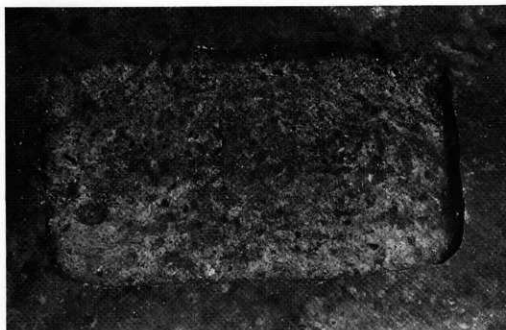


a. B-5 住居址

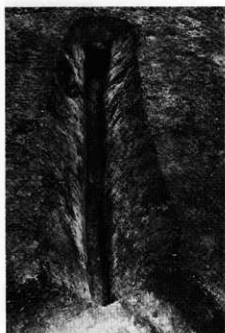


b. A-51 ピット

写真図版17 中田遺跡



a. A-52 ビット



b. B-101 陥し穴状遺構

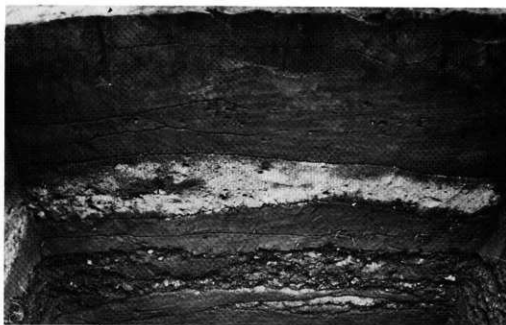


c. B-101 陥し穴状遺構(断面)

写真図版18 中田遺跡



a. A-152溝跡・A-153溝跡・A-154溝跡

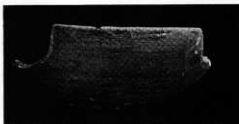


b. A区深掘り断面

写真図版19 中田遺跡



13-1



13-2



13-4

注)番号は図版番号に対応



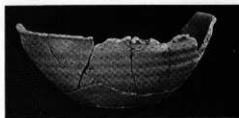
13-6



13-5



14-3



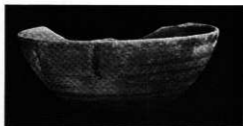
13-7



14-3

A-1 住居址・A-3 住居址

写真図版20 中田遺跡



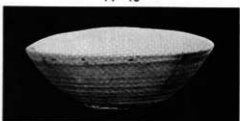
14-4



14-10



14-5



14-11



14-7

番号は図版番号
に対応する



15-2



16-1

B-1 住居址

写真図版21 中田遺跡



15-1



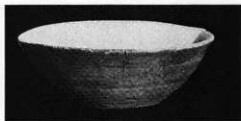
17-1



17-3



17-8



17-4



17-11

B-1 住居址・B-2 住居址

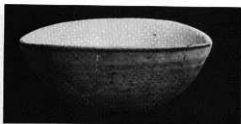
写真図版22 中田遺跡



17-12



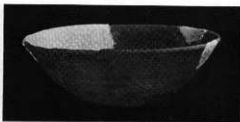
18-1



20-2



20-3



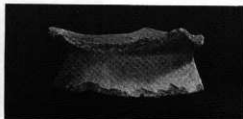
20-9



20-12



20-15



20-17

B-2 住居址・B-3 住居址

写真図版23 中田遺跡



20-18



21-1



21-2



21-8



22-3

B-3 住居址・B-4 住居址

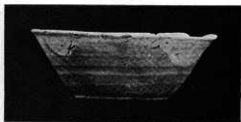
写真図版24 中田遺跡



23-1



21-5



21-7



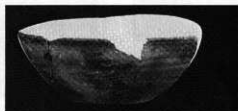
23-2



23-3



23-4



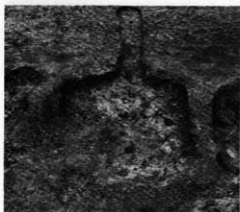
23-9

B-4 住居址・B-5 住居址・A-154 溝跡

写真図版25 中田遺跡



a. A-1 住居址



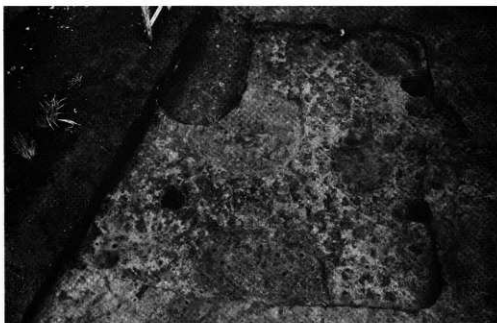
b. A-1 住居址(カマド)



c. A-3 住居址(カマド)



a. A-2 住居址



b. A-3 住居址

写真図版27 古屋敷遺跡



a. C-1 住居址

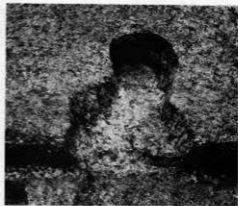


b. C-2 住居址

写真図版28 古屋敷遺跡



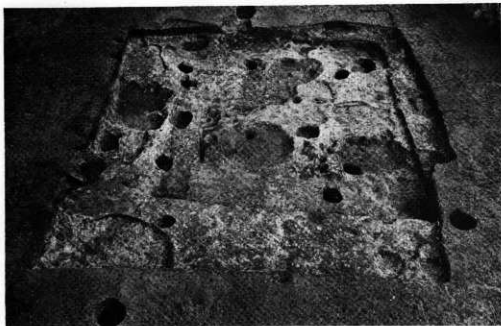
a. C-1 住居址(カマド)



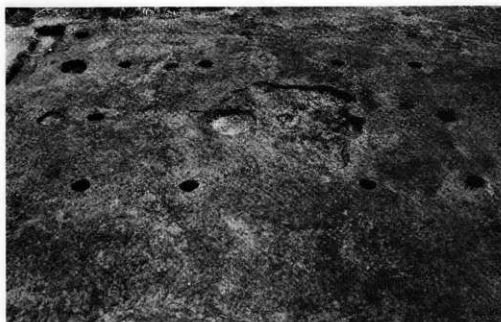
b. D-2 a 住居址(カマド)



c. D-1・D-2 a・D-2 bの各住居址



a. D-1・D-2 a・D-2 bの各住居址

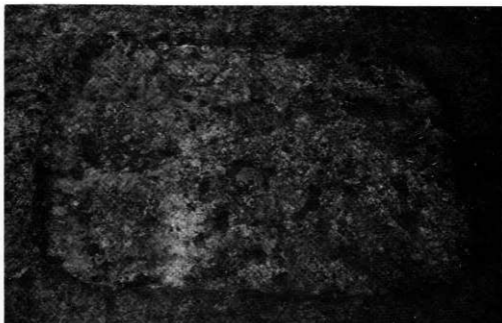


b. D区掘立柱建物跡

写真図版30 古屋敷遺跡



a. C区柱穴状ピット群

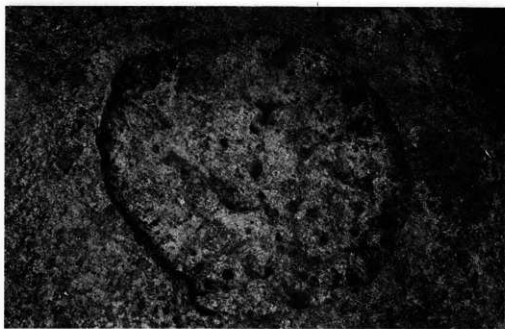


b. B-51ピット

写真図版31 古屋敷遺跡

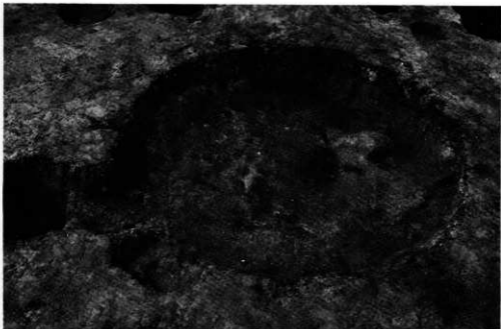


a. C-51ピット

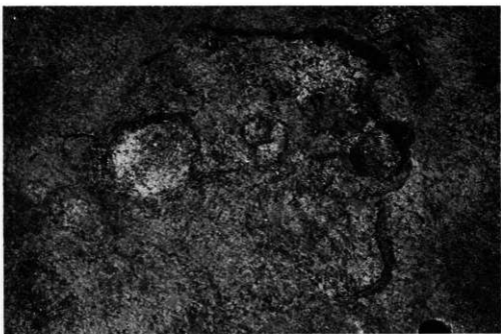


b. C-53ピット

写真図版32 古屋敷遺跡



a. C-52ピット

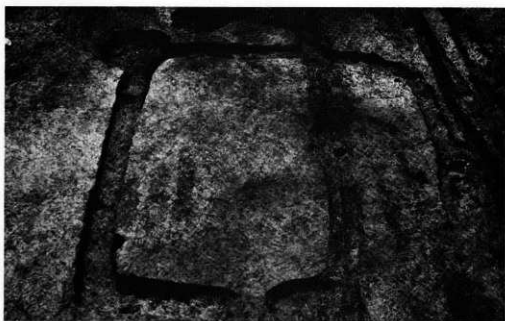


b. D-51ピット

写真図版33 古屋敷遺跡



a. E-51ピット



b. B-201方形周溝跡

写真図版34 古屋敷遺跡



a. B-151溝跡・B-152溝跡



b. C-151溝跡

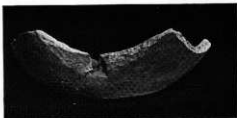


c. A区深掘り断面

写真図版35 古屋敷遺跡



18-1



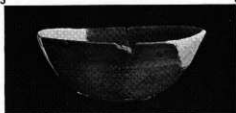
18-2



18-3

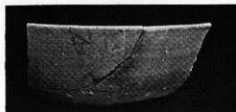


18-4



18-5

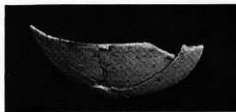
番号は図版番号
に対応する



18-7



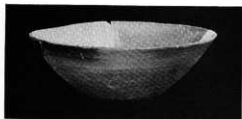
19-1



19-3

A-1住居址・A-3住居址・C-1住居址・C-2住居址

写真図版36 古屋敷遺跡



19-3



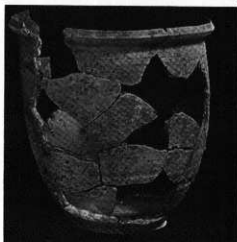
19-4



19-10



19-7

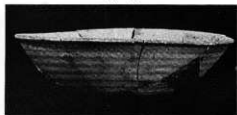


20-2

20-6



20-8



C-2 住居址・D-2 b 住居址・C-5I ビット・D-5I ビット

写真図版37 古屋敷遺跡

岩手県埋文センター文化財調査報告第19集
国道4号線矢巾地区改修工事関連遺跡調査報告書
紫波町稲村遺跡・中田遺跡・古屋敷遺跡

(昭和53年度・54年度)

昭和56年3月20日 印刷

昭和56年3月25日 発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市向中野字向中野39番1号

TEL.(0196) 35-6622

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-01 盛岡市下厨川4-2-6
